

高校中退者の中退をめぐる経緯とその後の意識に関する検討

—内閣府調査（2010）の再分析—

乾彰夫・桑嶋晋平・原未来・船山万里子・三浦芳恵・宮島基・山崎恵里菜

はじめに

1. 高校中退をめぐる問題の所在

本稿は、内閣府が2010年に実施した「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）」¹（以下「中退者調査」と記す）の調査票回答データを基に、高校中退者の実態をより詳細に捉えることを目的としている。データは内閣府より研究目的として提供されたものである。

高校中退という問題は、1980年代に一定の注目がされた以降、近年まで社会的にはあまり大きく注視されてこなかった。しかし2000年代に入り若者全体をめぐる困難が社会問題となり、若者支援の必要性が次第に認知される中で、高校中退者はとくにリスクを抱える可能性のあるグループのひとつとして注目されるに至っている²。内閣府が高校中退者を対象とした本調査を実施した目的もそこにあった³。

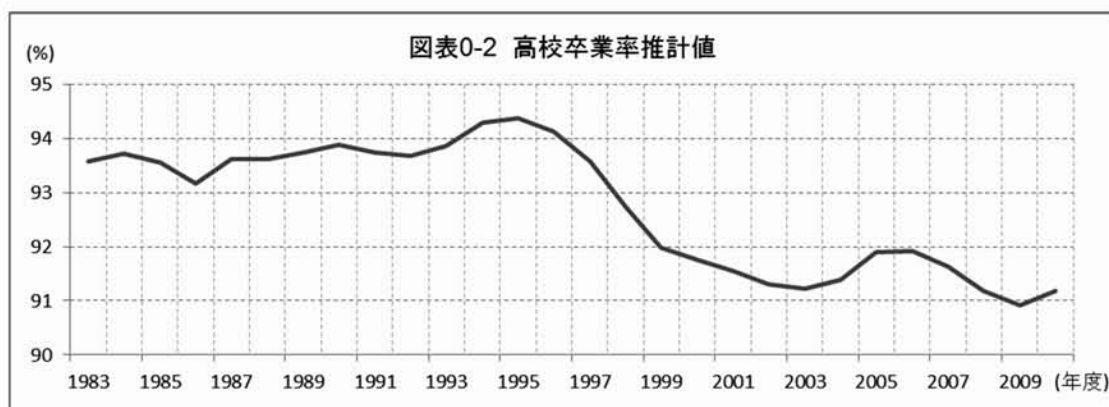
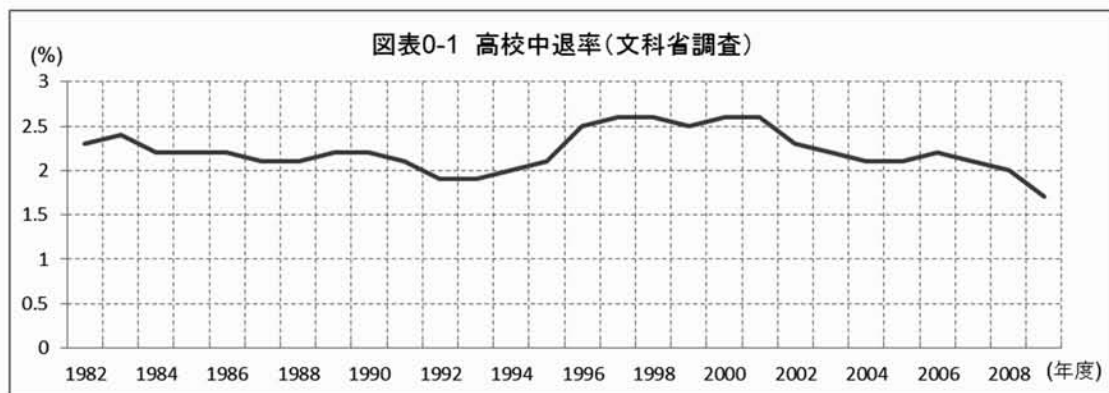
文部科学省による「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（平成22年度）」によれば、高校中退率は20年ほどの間2.0%前後で推移しており、近年若干の減少傾向に転じている（図表0-1）。中退についての「事由」を見てみると、「学校生活・学業不適應」が39.0%、「進路変更」が34.0%と大多数を占め、そのほかに「学業不振」7.0%、「問題行動等」6.0%、「家庭の事情」4.5%などが続く。この調査ではほかに、1年時に中退者をもっとも多いこと、全日制より定時制高校、全日制的なかでも普通科より専門学科・総合学科で中退率が高いことを明らかにしている。

しかし、文科省が公表しているこの中退率は、必ずしも実際に高校で起きている中途退学の実態を正確に表しているとはいえない。全日制及び定時制高校の卒業生数を3年前中学校卒業者のうちの高校進学者数で除した推計卒業率は図表0-2の通りである。文科省調査が当該年度の中退者数を総在籍者数で除しているのに対し、推計卒業率では入学から卒業までの3年間の脱落数の累積が推計未卒業率となっていることから、両者の数値を直接比較することはできない。しかし推

計卒業率から見て、この20年あまり少なくとも6～8%程度の生徒が、全日制・定時制高校に入学したものの卒業できずに学校を去っていることになる。さらに、卒業者の中には中学校を卒業して入学した高校をそのまま卒業した者ばかりでなく、他校を一旦中退して別の全日制・定時制高校に編入学した者も含まれているので、入学した高校をそのまま卒業した割合はこれよりもさらにやや低くなる可能性がある。この推計卒業率から求められる未卒業率は、文科省調査の数値を3倍したものよりも明らかに高い傾向にあり、しかも近年の部分を見ると、文科省調査による中退率が低下傾向にあるのに対し、推計未卒業率が上昇するという明らかに矛盾した動向が見られる。

このギャップの一部は、全日制・定時制高校から通信制高校への転籍者が、中退者とは見なされず計上されていないためと考えられる。実際、15-18歳人口の減少に伴い全日制・定時制高校の生徒数がかなり減少している中で、通信制高校の生徒数の減少率は僅かにとどまっている。全日制・定時制高校から通信制高校への転籍は、実際には現在いる学校を何らかの事情で辞めざるを得なかった際の選択肢であることが多いと考えられる。その意味では手続き的には転籍であろうとも、本人もまわりの高校教員らも実態としては中退と認識しているケースが多数であろう。

また通信制高校に移った中退経験者の状況は、以下の本論にも見るとおり、様々な中退リスクにさらされている。それは通信制ばかりでなく、全日制・定時制高校に移った場合も同様である。その意味では、一度入学した学校を続けることができなくなって辞めるという経験は、形式的には学籍の継続する他校への転籍であろうとも、一定のリスクを伴うものであるといえる。このことからいえば、中退リスクを抱える者は、文科省調査の数値よりもかなり多く存在しているといえる。



2. 「中退者調査」データの概要と本稿の課題

内閣府の実施した本調査の概要は以下の通りである。対象者は高校中退後概ね2年以内とし、都道府県及び政令指定都市の教育委員会を經由して任意の公立高校に対してアンケート調査票を郵送し、1176名から有効回答を得た。アンケートで尋ねているのは、主に、個人の属性、現在していること、家族構成や生計、高校を辞めた時の状況、今後の進路見通し、資格に関する意識、社会サービスに関する認知度や必要度、大人や友人との交友関係、高校中退への後悔の有無、自己イメージに関する意識などである(本論文末に「調査票」を掲載)。調査結果はすでに報告書としてまとめられており、委員からのコメントも付されている。しかし、紙幅の限られた報告書コメントでは必ずしも中退者の実態や全体像は浮き彫りにされておらず、「中退者調査」を十台により詳細な検討が必要と思われる。

そこで、本稿では、「中退者調査」データを用いて中退者の実態を描き出し、高校中退者とはいったいどのような者たちであるのか検討をおこなっていきたい。具体的には、中退時と現時点(調査時点)という二つ

の時点に着目し、それぞれを起点にしながら中退者の実態を捉えていく。それは、高校中退者を中退時点から現在に至るまでの軌跡のなかで捉えようとする試みである。

まず、1章では高校中退者がどのような理由から高校を中退しているのかに着目する。かれらがどのような状況で中退に至っているのか、中退理由別にグループ化をおこない、典型的な辞め方タイプを導き出したい。そして、それぞれの辞め方をしている者たちが中退後どのように自らの人生を歩んでいるのかについて考察をおこなう。

2章では、現在の状況に注目する。高校中退者らは現在どのようなことをしており、またその中でどのような意識を有しているのか。当然のことながらかれらは中退後様々なことに直面しながら現状に至っているが、かれらの現状を規定したり支えたりするものはいったい何なのか、考察をすすめた。

なお、本稿で扱う「中退者調査」はアンケート調査であり、一人ひとりの背景を詳細に汲み取ることは不可能である。むしろ本稿で重要視するのは、「高校中退

者」と一口で言っても、その者たちがどのようなことを考え、どのように生きている者たちなのか、その多様な全体像をつかむことである。以下ではグループ化をおこなったり、カテゴリ別に見ながら、共通の特徴をもつ者たちの集団のあり方を考察していくが、それはすべての中退者がそのようなタイプに分類されるという意味ではない。中退時点、現在双方の起点からの考察を通じて、中退者にそれぞれどのような中退後の移行過程が生じているのか、その大枠から中退者の特徴を把握することが本稿の目的である。そして、中退者の実態を捉える際にはどのような視点が必要になるのか、また、かれらの実態に即したときどのような支援が求められるのかについて最後に若干の提起をおこないたい。

その際、「中退者調査」がある偏りを持っていることも付言しておく。先に触れた推計卒業率では、女性の卒業率が男性に比べ一貫して2～3%ほど高い。したがって中退者の男女比では男性の方が高くなっていると思われるが、本調査回答者の男女構成比は男性47.1%、女性52.2%とやや女性の方が多くなっている。調査平均値は全国の中退者総数の男女比よりも女性にやや偏っている可能性がある。また、中退時の学年についても、先の文科省調査と比較した際には、本調査では1年時退学者がやや少なく2年時退学者がやや多くなっている⁴。

最後に、文章の表記と数値の扱い方について述べておく。以下でグループやカテゴリごとに傾向を見ていく際には、参考として調査の全体平均を「大カッコ%」の形式で記している。また、それぞれ男女の総数、あるいは「就業者」や「在学中」のようなその当該集団の総数に占める割合を示す場合は、「男%」・「女%」、あるいは「就業者%」、「在学中%」という形で表記し、それぞれ男性554名、女性614名における平均、あるいは就業者661名、在学者362名における平均をそれぞれ表すものとする。なお、分析にあたっては内閣府報告書に付帯している集計表を参照するとともに、原データからの再集計値を用いた⁵。

また、本論の各箇所の割合(%)は無回答者を含んで算出されている。その際留意しておきたいのは、設問によって無回答者の割合が高くなっているものがあることである。「調査票」問3(5)の親学歴を尋ねた設問では、特に父親学歴について無回答者が多くっており、後に見るように母子家庭が多いことと関連していると思われる。また、問4(5)において高校を

辞めた後の進路決定で苦労してきたことを尋ねた設問では、「ない」という選択肢がなかったためか無回答者が多い。さらに問11で親しい友人の数を尋ねたところでは、(カ)「ア～オ以外で」という最後の選択肢において全体の四分の一以上が無回答という結果となっている。

注

¹ なお本調査の内閣府による報告書は2011年に以下で公表されている。

『若者の意識に関する調査(高等学校中途退学者の意識に関する調査)報告書』

<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/school/kaisetsu.html>

² 青砥恭『ドキュメント高校中退—いま、貧困がうまれる場所』筑摩書房、2009年

³ 内閣府『報告書』前掲、「調査の概要」にある「調査の目的」を参照。

⁴ 文科省調査によれば、1～4年(単位制除く)の退学者割合は、1年56.9%、2年31.9%、3年10.5%、4年7.2%となっている。本調査では、1年44.2%、2年41.0%、3年13.1%、4年0.8%であった。

⁵ 特に、中退後の経過期間については、集計表での「3ヶ月以内」「4～6ヶ月」「7～12ヶ月」「13～24ヶ月」「25ヶ月～」の5段階分類ではなく、「8ヶ月以内」「9ヶ月以上」の2段階分類に集計しなおした。この項目について「調査票」では、2010年7～9月の調査期間を基点に、「今から□年前の□□月中退」の□に数字を記入するかたちで回答を得ている。しかし、たとえば2009年12月を表すと思われる回答に「今から0年前の12月」と「今から1年前の12月」の双方が見られたため、2009年以前の中退者の経過期間について正確なコーディングは不可能と判断し、上記のように中退から比較の日が浅いか否かのみを把握する方式に変更した。なお集計方法は、2010年9月1日を基点とし、「今から0年前の1月」から「今から0年前の8月」までを「8ヶ月以内」、それ以外を「9ヶ月以上」としている。

1章 中退理由から見る高校中退者の類型

1. はじめに

1-1. 中退時点への注目

高校中退者らは、学校を辞めた後どのような進路選択をおこないながら生きているのだろうか。本章では、その人生経路の起点となる中退時に着目し、かれらがどのような考えや状況から高校退学に至り、その後どのように人生を歩んでいるのかについての考察を試みる。

まず、中退時点に注目する際に中心的に扱う質問項目について概観しておこう。本調査では、「調査票」問4で「あなたが高校を辞めたときの状況についてお聞きします」との設問を設けている。ここでは、(1) 中学時代の中学卒業後の進路希望、(2) 高校を辞めた理由、(3) 中退について誰に相談したか、(4) 中退時点でのその後の見通し、(5) 中退後の進路決定に際して苦労したこと、について尋ねている。本節では、特に(2)の高校を辞めた理由についての項目に注目し、以下分析をおこなっていく。具体的には、まず高校中退に至った理由の選択傾向から、中退者に典型と思われる辞め方のタイプをいくつか導き出したい。そしてそれぞれの理由から高校を去った者たちをグループ化し、かれらがどのような属性や意識をもった者たちで

あるのか、その後どのような進路に進んでいるのか等について他の質問項目との関連のなかで考察し、その実態を明らかにしたい。

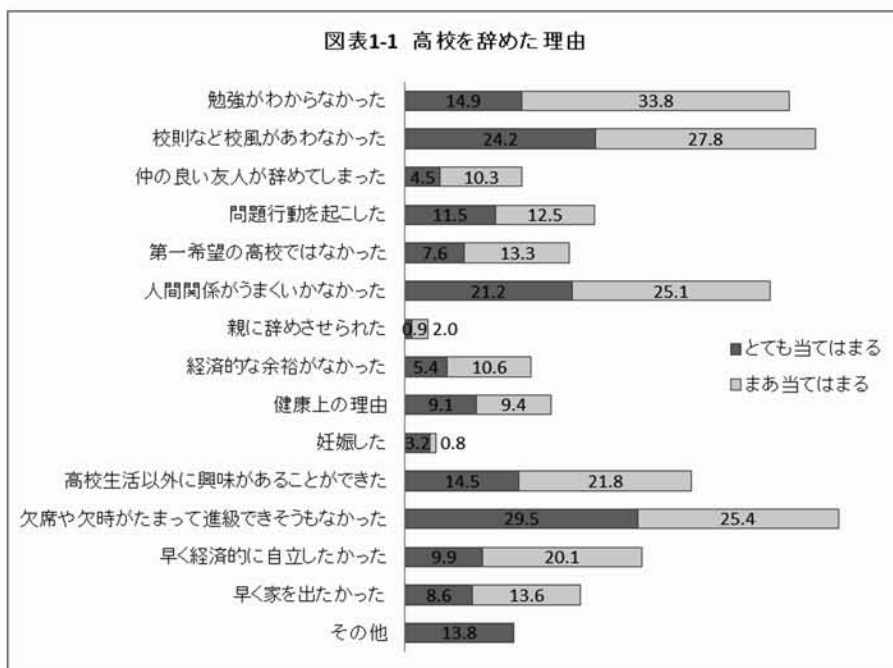
なお、中退理由についてのタイプといった際、抽出されるのはある顕著な傾向によって分類することが可能であったタイプのみであり、その点で典型例ともいえるものに限定されている。すべての対象者が完全に何らかのタイプに腑分けできるほどかれらの中退理由やその背景は単純ではないであろうし、またその複雑さに従って細かなグループを多数作ることも目的ではない。むしろ、いくつかの特徴的かつ典型的と思われるタイプをつかみ出し、その特徴を描き出すことによって、これまでほとんど明らかにされてこなかった高校中退者の実態についての全体像を描き出すことが本章の目的となる。

1-2. 中退理由別にみる中退者のグループ化

では、中退者が高校を辞めた理由について見ていこう。調査では中退理由として14の項目について「とても当てはまる」「まあ当てはまる」「当てはまらない」の選択形式で回答を求めている。図表1-1は、各質問項目について「とても当てはまる」「まあ当てはまる」を集計したものである（以下、両者の計を「当てはまる」と記載）。

図からわかるように、「欠席や欠時がたまって進級で

図表1-1 高校を辞めた理由



きそうもなかった」[54.9%]、「校則など校風があわなかった」[52.0%]、「勉強がわからなかった」[48.6%]、「人間関係がうまくいかなかった」[46.3%]などの理由がもっともよく選ばれており、それぞれ50%前後の者が「当てはまる」と回答している。中退理由として「当てはまる」とされた回答数は一人あたり平均 4.1 項目であり、中退者の多くが複数の理由から退学へと至っていることを確認できる。

続いて、より直接的な退学理由となっている事柄について検討をおこなうため、「とても当てはまる」という回答に着目してみよう。「とても当てはまる」の選択数は一人あたり平均 1.8 項目であった。「とても当てはまる」を一つも選択していない者が全体の 15.0%、何らかの理由において一度だけ選んだ者が 35.9%いることから、残りの半数の者の重複回答数は平均より多いことになる。そこで、「とても当てはまる」の重複のあり方を見てみると、そこには項目間で特徴的な傾向が見出された。それら項目ごとの関連性を図式的に表したのが図表 1-2 である。

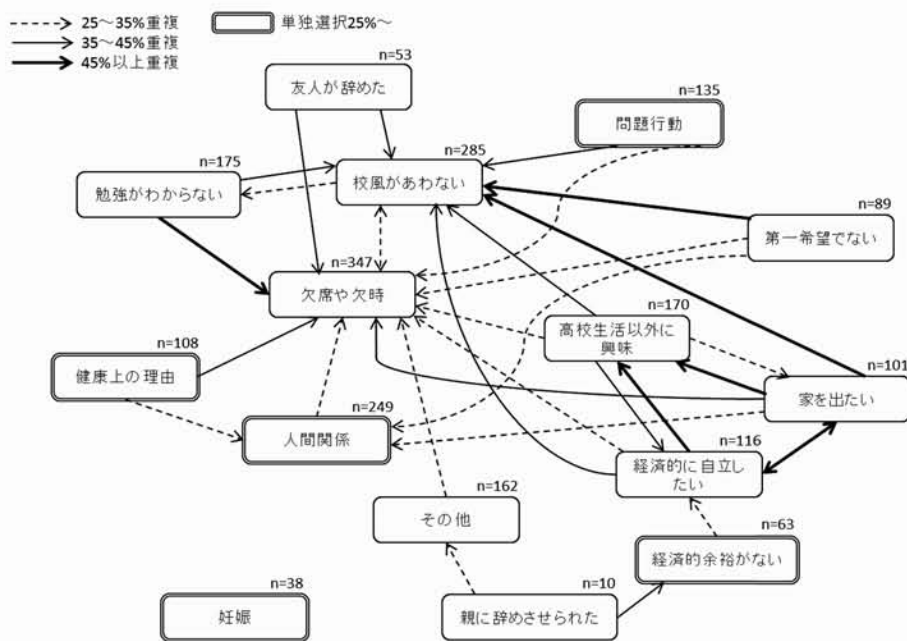
各項目選択者を母数とし、重複傾向のある項目へ矢印が伸びている。矢印の方向は多岐にわたっているが、とりわけ欠席欠時という理由は何の項目からも重複して選ばれる傾向が強いことがわかる。ここからは、何らかの理由が欠席欠時と重複することで中退へと至る

という一定のイメージを描くことが可能であろう。また、「早く経済的に自立したかった」「早く家を出たかった」「高校生活以外に興味があることができた」の3項目に見られるように、複数の項目間で比較的結びつきの強いものがあることもわかる。対照的に、単独で選ばれる傾向の強い項目もあり、とりわけ「妊娠した」という理由は他項目との重複がほぼ見られなかった。言い換えれば、「妊娠した」という理由は単独で強い中退理由となっているのである。

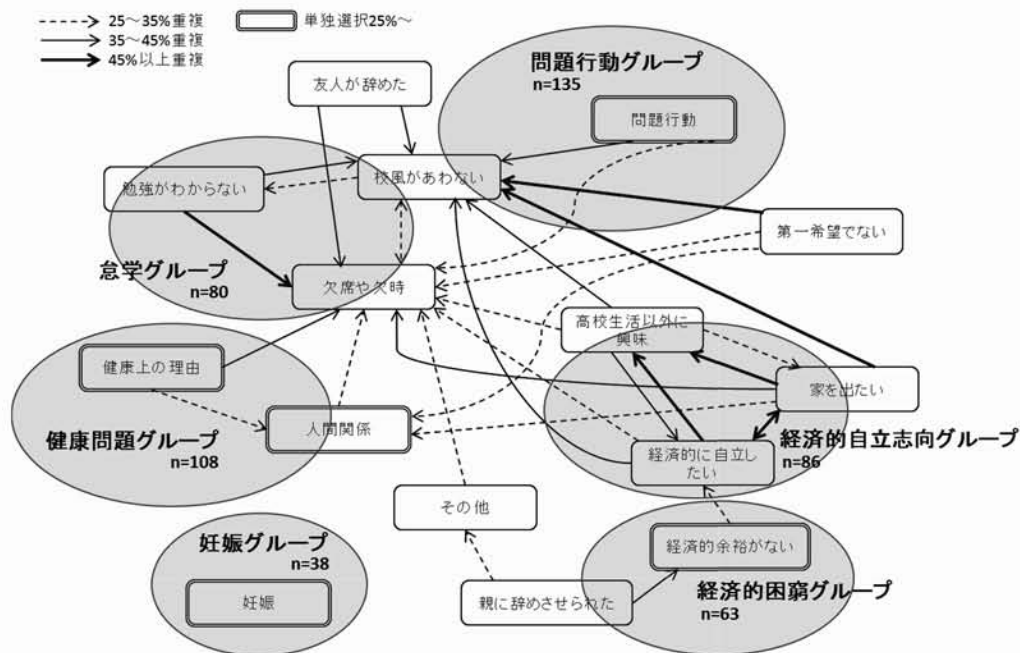
以上のような重複傾向もしくは単独傾向といった項目ごとの関連性に着目してグループを作成したものが図表 1-3 である。「妊娠した」を選んだ妊娠グループ 38 名、「経済的な余裕がなかった」を選んだ経済的困窮グループ 63 名、「問題行動を起こした」を選んだ問題行動グループ 135 名、「健康上の理由」を選んだ健康問題グループ 108 名、「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」を選んだ怠学グループ 80 名、「早く経済的に自立したかった」と重複して「高校生活以外に興味があることができた」もしくは「早く家を出たかった」のいずれかを選択した経済的自立志向グループ 86 名の6グループである。これらは高校中退時の様子について、典型的な辞め方をしている者同士でのグループ化といえる。

以下では、それぞれのグループの特徴を見ることで、

図表 1-2 各中退理由の関連図



図表1-3 中退理由傾向から導き出されるグループ



中退時からその後現在に至るまでの中退者たちの状況と、その下での意識のありようを明らかにしていく。

なお、先述したようにこれらのグループ化はすべての中退者を捉え分類するものではない。今回典型として取り上げる6グループには調査回答者の半数弱しか含まれていないことには注意されたい。

2. 中退理由別グループの特徴

2-1. 怠学グループ

まず一つ目のグループとして、「怠学グループ」と名付けられる特徴をもった80名のグループを見ていこう。このグループに含まれるのは、高校を辞めた理由として「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」と「勉強がわからなかった」を、ともに「とても当てはまる」と回答した者たちである。男性51.2%に対して女性46.3%と男女差はほとんどない（全体平均は[男47.1%、女52.2%]）。最初にこのグループに注目するのは、かれらの傾向が「中退者調査」全体の平均的傾向とよく似た特徴をもっているためである。もちろん一部の特徴については平均値との間に多少の差異はあるが、中退者全体の特徴に類似したこのグループの姿は、後に続く5つのグループを対比的に明ら

かにするための比較軸を提供してくれる。まずは怠学グループの特徴について、特に家族背景と中退時前後の様子、現在の状況、そして今後の見通しといった時系列に沿ってその姿を描き出していこう。

怠学グループに含まれる者たちの親の学歴は、それほど高くない。父親の場合、中卒20.0% [18.7%]、高卒36.3% [38.0%]であり、母親も中卒13.8% [14.9%]、高卒48.8% [48.4%]となっている。また、本人も高校への進学を必ずしも自明視していたわけではない。中学卒業後「高校に進学したかった」と考えていたのは71.3% [82.5%]であり、「中卒で働きたかった」者が21.3% [14.6%]いる。そしてかれらの多くは高校進学後、1年(46.3% [44.2%])または2年(43.8% [41.0%])の時に中退しており、3年は8.8% [13.1%]と少ない。

次に高校中退時の様子について見ると、退学することについて、かれらすべてが誰かに相談していたわけではない。このグループの23.8% [21.9%]、つまり4人に1人は誰にも相談することなく中退を決定している。一方、図表1-4にあるように、誰かに相談したと答えた者のうち、相談相手としてもっとも多いのは「親」で88.5% [90.0%]、次いで「高校の先生」が52.5% [51.3%]となっており、かれらの相談相手が

身近な大人であったことがわかる。また、大人たちほどではないが、「高校時代の友人」(39.3% [29.4%]) や、「高校以外の友人」(27.9% [25.0%])、「先輩」(19.7% [11.0%])、「兄弟姉妹」(18.0% [18.9%]) といった同世代の人たち、あるいは「中退経験のある人」(24.6% [18.0%]) にも広く相談しており、かれらにとってこうした同世代の人たちも重要な相談相手として位置づいていることがわかる³。

ではかれらは、中退後の見通しをどのように思い描いていたのだろうか。中退時点での進路展望は、高い順に「アルバイトとして働くつもりだった」31.2% [35.9%]、「別の高校に再入学するつもりだった」23.4% [23.6%]、「正社員として働くつもりだった」15.6% [11.1%] と続いている。要するに、半数近くの者が働くことを、また4人に1人が高校再入学を考えていたことがわかる。またこれら3つに続いて「どうしていいかわからなかった」も11.7% [8.9%] おり、中退はしたものの今後どのように歩いていく迷っていた者たちも一定数いたことがうかがえる。

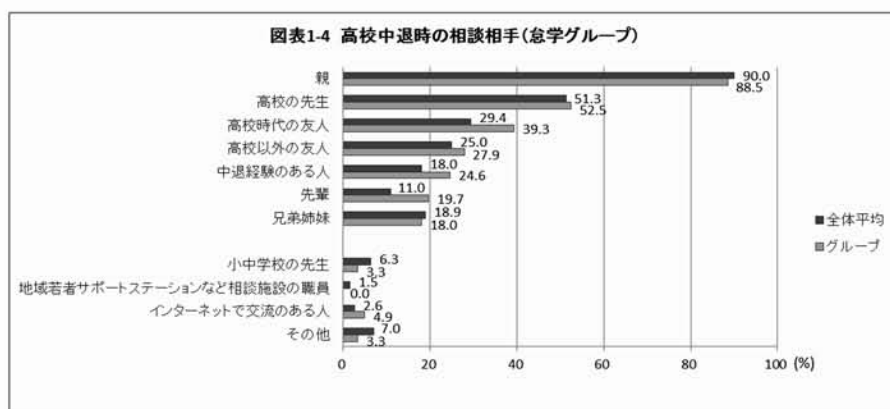
こうした見通しをもちながら、実際には中退後のかれらは様々な苦労に直面している。もっとも多いのは、「適切な情報を得る方法がわからない」26.3% [19.2%] である。その他にも、「地元には仕事がない」23.8% [18.1%]、「仕事をしていく自信がもてない」22.5% [16.4%] という仕事に関する問題、あるいは「受け入れてくれそうな学校がわからない」18.8% [11.1%] といった就学に関する問題、さらに「保護者との間で進路についての意見が合わない」22.5% [16.2%] などの苦労が続いている。

では、かれらは現在どのような状況にあるのだろうか。高校中退やその後の苦労を経験してきたかれらももっとも多く至っている進路は、「働いている(フリー

ター・パートなど)」(40.0% [43.4%]) という非正社員としての仕事である。正社員や正職員になったのは8.8% [9.6%] に留まっており、中退時の見通しと比べると、非正規の仕事には流入しやすく正規の仕事には就きにくいのが現状といえよう⁴。一方、現在全日制・定時制の高校に在学している者は13.8% [10.2%]、通信制の高校に在学中は7.5% [15.3%] で、20%程度の者が再び高校に通っている⁵。また、「仕事を探している」と答えた者も多く(21.3% [13.6%])、正社員やフリーター、在学中と重ならない、いわゆる失業状態にある者が9名(11.3% [8.2%]) いる。さらに、「家事・家事手伝いをしている」と答えた者も10名(12.5% [11.0%]) おり、うち8名は女性である。

次に、かれらの友人関係を見てもみよう⁶。たとえば「辞めた学校内に親しい友だちがいるか」に関しては、選択肢中でもっとも多い「13人～」と答えた者が28.7% [22.0%] いた。「1～3人」と比較的少人数である者が21.3% [30.7%]、あるいは「友だちがいない」と答えた者も8.8% [10.7%] いるが、全体的に見れば交友関係は比較的大人数の方に寄っている。

また、かれらの「自己イメージ」⁷のありようを見ると、例えば「自分には人よりすぐれたところがある」について「とても当てはまる」と答えた者が16.3% [12.6%]、あるいは「将来の目標がある」について「とても当てはまる」と答えた者が38.8% [35.7%] いる。だが逆に、それぞれ「まったく当てはまらない」と答えた者も、23.8% [21.3%]、23.8% [15.5%] いた。つまり、自尊感情については、肯定的な評価から否定的な評価まで特定の特徴が見えないかたちで広く分散しており⁸、様々な状態の者たちが本グループには含まれていると考えられるのである。ただし、将来への不安に関しては、「たいへん不安だ」40.0% [26.1%]、



「やや不安がある」38.8% [43.4%] と高くなっており、80%近くの者が不安を感じていた。

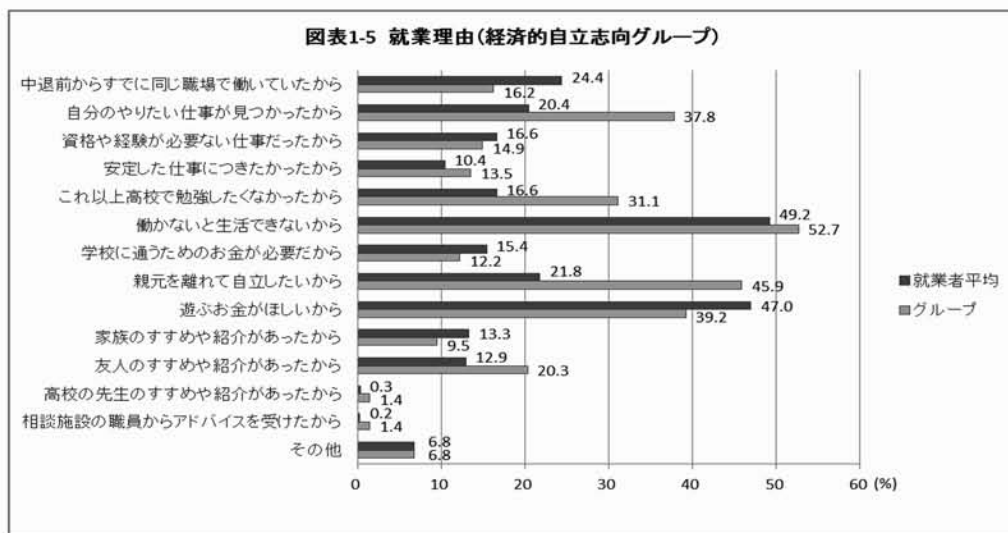
こうした現状のなかでかれらが3年後の見通しとしてもっとも多く希望しているのは、「正社員として働きたい」43.0% [35.9%] である。次いで「アルバイトとして働きたい」15.2% [9.9%] となるが、3番目に多いのは「まだどうしていいかわからない」13.9% [11.5%] である。ここからは、まだ迷いながら見通しを明確にもてずにいる者たちが一定数いることが示唆されよう。それは例えば、今後取りたいと思っている職業に関わる資格について、「アーク・ガス溶接、TIG溶接、玉掛け等」、「自動車整備士」といった特定の職業で求められる技能資格や国家資格を挙げる者がいる一方で、「あるのかわからないけど声優の資格がとりたい」、「危険物、介護士、動物に交わる仕事の資格」のように、資格に関する情報が曖昧である者や方向性が多岐にわたる者がいることにもうかがえる。まさにこのグループが多様な者を包摂していることを示しているといえる。このような点からは、勉強がわからないことや欠席欠時を理由とする怠学的な傾向から高校中退へと至るあり方は、様々な層に広く共有されやすいものだということができるだろう。

2-2. 経済的自立志向グループ

本グループに含まれるのは、「早く経済的に自立したかった」と重複して「高校生活以外に興味があることができた」もしくは「早く家を出たかった」のいずれかを選択した86名である。全体平均と同じく、男女比は半々で、1、2年で辞めた者が大半を占めている。

まず、中退時の様子を見てみると、辞めることについて誰にも相談しなかった者が30.2% [21.9%] いる。相談した者のなかでは、全体平均同様その多くが親に相談しているほか、平均に比して「高校時代の友人」(45.0% [29.4%])、「先輩」(23.3% [11.0%])、「中退経験のある人」(35.0% [18.0%]) への相談が多い。また、中退時の進路展望については、働こうと思っていた者が多数を占める。「アルバイトとして働くつもりだった」(51.2% [35.9%]) がもっとも多く、「正社員として働くつもりだった」(23.8% [11.1%]) も多い。逆に、復学や進学を考えていた者はわずかだ。もともと、本グループには中学時代「中卒で働きたかった」者が一定数おり(30.2% [14.6%])⁹、こうした仕事志向の進路展望のあり方は特徴的である。中退後進路を決める際には、「保護者との間で進路についての意見が合わない」ことで苦勞してきた者が多い(26.7% [16.2%])。

現在の状況としては、正社員が18.6% [9.6%]、フリーター・パートが64.0% [43.4%] など、働いている者が多い。家の商売や事業等も含めて何らかのかたちで働いている者が86.0% [56.2%] おり、学生と兼業せず働いている者が全体平均では50%に満たないのに対して、本グループでは77.9%と4分の3以上を占めている。その就業理由を表したものが図表1-5である。「働かないと生活できないから」が就業者平均同様もっとも高いが、次いで「親元を離れて自立したいから」が顕著に高くなっている。また、「自分のやりたい仕事が見つかったから」、「これ以上高校で勉強しなくなったから」も平均に比して高い。以上からは、



本グループの特徴として、学校に留まらず社会や仕事の世界に出ていこうとする者が多いこと、そして実際に仕事の世界に生きている者が多数を占めていることが指摘できる。

その特徴は資格への意識においてもうかがえる。高卒資格について不要と考える者が中退前（39.5% [24.1%]）・中退後（44.2% [21.3%]）ともに高い傾向が見られる。一方、職業に関わる資格については取りたいものがあるとする者が半数以上にのぼる（53.7% [37.5%]）。自由記述では、調理師、自動車整備士、介護福祉士、美容師などが多く挙げられているほか、フォークリフト、玉かけなど現在の仕事に直結していると思われる資格が多い。3年後の進路としては「正社員として働きたい」が最多で、半数以上を占めている（51.8% [35.9%]）。

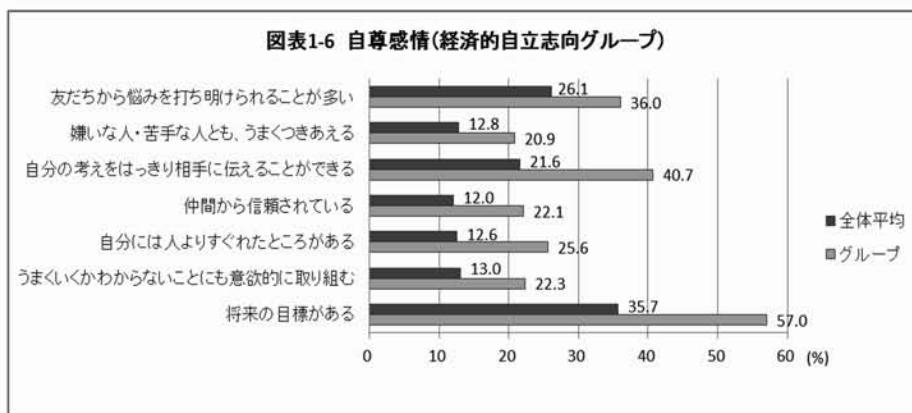
現在の世帯形態は、単身世帯が 9.3% [3.2%]（ただしほとんどが男性）であり、結婚相手と同居している者も平均より多い（16.7% [6.2%]ほとんどが女性）。自身の収入で生活している者が 45.3% [26.4%] と半数近くを占め、逆に父母の収入に頼っている者がそれぞれ父 46.5% [59.3%]、母 41.9% [53.5%] と平均より低い割合に留まることも特徴的だ。また、かれらの父親学歴は総じて低めの傾向にあった（中高卒 67.4% [56.7%]）。

続いて、かれらの意識面を見てみよう。まず、将来への不安感だが、「まったく不安はない」「あまり不安はない」と回答した者が 39.5% [29.8%] にのぼっており、他グループの者や全体平均より不安を感じていない者が多い傾向が見られる。また、自尊感情についてまとめたものが図表 1-6 である¹⁰。すべての項目において「とても当てはまる」と回答した者が全体平均より多く、かれらの自己イメージの高さがうかがえる。

特に 60% 近くの者が「将来の目標がある」としているのは、先ほどの職業資格取得への意識と重なるところがあるだろう。

また、社会サービスについての認知度は全体的に高めであった。働いている者の多い本グループでは、平均に比して「雇用保険」（19.8% [5.8%]）や「仕事で困ったときに、相談する方法」（20.9% [10.7%]）を「よく知っている」とした者が多い。また、必要なサービスに関しては、「低い家賃で住めるところ」53.5% [29.4%]、「生活や就学のための経済的補助」41.9% [31.3%] など経済的支援を必要とする声が強いわき、「会社などでの職場実習の機会」も求められている（33.7% [23.7%]）。その一方で、相談できる施設や仲間への要望はそれほど高くない。

その背景として注目されるのが、かれらの交友関係である。保護者以外に親しく話しかける大人では、半数の者が「アルバイト・仕事先の上司や先輩」（50.0% [36.1%]）を挙げているほか、「友だちの保護者」（30.2% [15.1%]）との回答も多い。また、友人関係では「アルバイト先に」友人が多いほか、学校内外・塾・インターネットなど以外での友人を意味する選択肢（「調査票」では「ア～オ以外」と記載、以下本稿では「選択肢以外」とする）が多く選ばれている。特に後者に関しては 29.1% [19.5%] の者が 13 人以上の友人がいると回答している。ここには友達の友達や地元の先輩などにあたる者が含まれている可能性が考えられ、かれらの友人関係が学校を経由するものに留まらないことが指摘できるだろう。また、友人のすすめや紹介から現職に就いている者も 20.3% [12.9%] おり（図表 1-5 参照）、それら友人関係が活用可能な資源となり得ている様子もうかがえる。



2-3. 問題行動グループ

次に「問題行動グループ」の様子を見てみよう。対象となるのは、中退理由として「問題行動を起こした」を選んだ135名である。かれらの特徴としてまず挙げられるのは、男性が71.1%を占めることである。問題行動を起こし、男性が7割を占めるこのグループの者たちにとって、高校を辞めることとはどのような出来事なのだろうか。

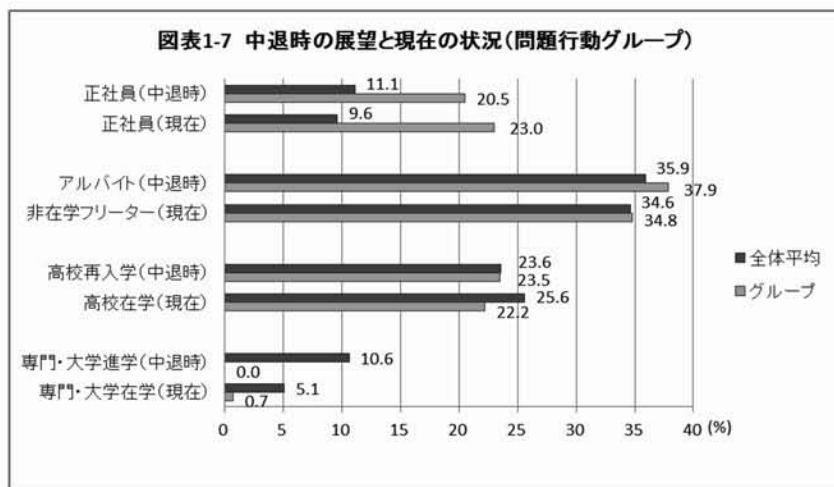
まず特徴的であるのは、かれらのなかには高校を辞めることについて誰にも相談しなかった者が34.8% [21.9%] と全体平均を大きく上回っているという点である。そしてそれとともに特徴的であるのは、中退後の進路として働くこと、特に正社員になることが全体平均よりも多くイメージされていることである。中退時点で割合上多く想定されているのは、アルバイト37.9% [35.9%]、高校再入学23.5% [23.6%] であるが、平均と同程度である(図表1-7¹¹⁾)。だが、正社員を考えていた者は20.5%に及び、それは全体平均 [11.1%] の2倍近い。他方で専門学校・大学進学を考えていた者は、中退時点では一人もいなかった。要するに、アルバイトと高校再入学を考えた者は平均程度である一方で、正社員を考えた者が平均の倍近くにのぼり、進学を考えた者はいない、というのがかれらが中退時の進路イメージである。

こうした中退時の見通しは、現状のあり方にも関連している。現在の状況について見てみると、「非在学フリーター」¹²である者や高校在学者は、中退時点の見通しとはほぼ同程度の割合であり、平均とも大差ない。これに対し、現在正社員として働いている者は23.0% [9.6%] と4分の1程度を占め、中退時の見通しより

実際に正社員となっている者の方がやや多くなってきている¹³。その結果、本グループでは何らかのかたちで働いている者が73.3%を占めており、全体平均 [56.2%] を大きく上回る結果となっているのである。またその就業理由を見ても、「親元を離れて自立したいから」(30.3% [就業中21.8%]) といった回答が平均よりも高く、実際に自身の収入で生活している者が38.5%と、全体平均 [26.4%] に比べて多くなっている¹⁴。3年後の進路希望も、「正社員として働きたい」と考えている者が47.4% [35.9%] にのぼり、全体平均を大きく上回っている。

このように本グループは、多くの者が中退時に働くことを中心に進路を考え、そして実際に働いている。特にそれを押し上げているのは、正社員になる見通しと、そして実際に正社員になることができていることである。ここには、高校を経由して仕事に就くという進路とは別のかたちで就労生活を開始し、経済的に自立していけるルートの存在が考えられる。おそらく男性がそれほど学歴を必要としないまま正社員として働くことができる土木建築系の仕事や、その中心であると予測できる¹⁵。

こうした特徴は、かれらの人間関係に密接にかかわっているようにも見える。かれらにとって親しく話せる大人は、アルバイト・仕事先の上司や先輩がもっとも多く45.9% [36.1%]、友だちの保護者も平均よりやや高く23.7% [15.1%] となっている。また親しい友だちは、辞めた学校内・小中学校・選択肢以外で大変多く、選択肢中でもっとも多い「13人～」がいずれの項目でも35～40%前後に上る。これは平均よりも10～15ポイント前後高い。要するに、かれらは上の世



代や同世代との幅広い人間関係をもっており、それが仕事に関する情報を得ることや就労生活への渡りを可能にしていると考えられるのである。

かれらは自尊感情についても、比較的肯定的に捉えている。例えば、「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」、「自分は人よりすぐれたところがある」という質問について「とても当てはまる」「まあ当てはまる」と答えた者はそれぞれ 80.0% [72.5%]、44.4% [35.0%] にのぼり、周囲の人たちとの関係性や自己に対しての肯定的感情をもっている。

ただ、中退後の生活を築きつつあることは確かであるものの、40.7%の者が高校中退への後悔を感じており、全体平均 [23.7%] に比して高い。問題行動による退学という事情を踏まえて後悔の理由を推測すれば、たとえば友人が多かった学校生活が問題行動によって急に終わってしまったことに起因しているとも考えられるが、そこには高卒資格の必要性を再確認している様子も見られる。中退前、高卒資格を必要と思わない者は 33.3% であり、全体平均 [24.1%] よりも高い値を示していた。ところが、その値は中退後に 20.0% にまで減少している（平均では [21.3%]）。中退前に高卒資格を不要と感じていた者のうちで、中退後に必要であると認識を変えた者は 20.7% [14.0%] であった。こうした中退への後悔や高卒資格に対する認識の変化は、将来への不安とも結びついていると考えられる。かれらの多くは就労生活を開始しているにもかかわらず、将来について「やや不安がある」「たいへん不安だ」と答えた者がそれぞれ 43.7% [43.4%]、26.7% [26.1%] と平均程度に高かった。かれらは必ずしも今の生活が安定的だと捉えているわけではないのである。つまり、かれらが高卒資格を必要と思直している様子は、実際に仕事には就いたものの、今後の就労生活を高卒資格なしで続けていくことに不安を感じることに無関係ではないだろう¹⁶。このように問題行動グループは、広い友人関係や知人関係を築きながら仕事に就き、自分の収入で生活を送っている者たちである一方で、必ずしも今の生活を安定的に続けていけるという見通しをもっているわけではなく、将来への不安や高校中退への後悔もまた抱えているのである。

2-4. 経済的困窮グループ

次に「経済的困窮グループ」とみなされる人たちを見てみよう。かれらは、「経済的な余裕がなかったを」「とても当てはまる」中退理由として答えた 63 名で

ある。男女比の偏りはない。

まず家族の様子が特徴的である。親と同居している者のうち、ひとり親世帯が 65.3% [37.5%] と極めて高く、両親の学歴は、父親で中卒 28.6% [18.7%]、高卒 23.8% [38.0%]、母親も中卒が 25.4% [14.9%] と、平均より低い傾向にある。また単身世帯が多いことも特徴の一つであり（14.3% [3.2%]）、主に父親の収入で生活している者が 34.9% [59.3%] と平均に比して少ないのに対し、自分自身が家計収入の中心となっている者が 39.7% [26.4%] いる。ここからは必ずしも経済的に安定した状態にいないとはいえない様子うかがえる¹⁷。

そうした経済的な苦しさの中退のかかわりを具体的に見てみよう。高校中退時のかれらはあまり人に相談をしていない。高校中退について相談しなかった者は 33.3% [21.9%] に及び、3人に1人が親を含め誰にも相談していないことになる。家庭の経済状況を理由としているために、他者への相談のしづらさや親に相談することへの諦めなどを抱えていたとも考えられよう。かれらの中退学年に着目すると、平均に比べて1年での退学者が少なく（28.6% [44.2%]）、2年に集中していた（50.8% [41.0%]）。自ら早々に学校を去った者たちというよりは、経済的事情を抱えながら学校生活を過ごしていたものの、経済状況が悪化したり他の理由と重なったりするなかで退学に至った者が多いことが推察される。

一方、中退時に相談した者の相談相手を見てみると、親が 90.5% [90.0%] と平均程度のほか、高校の先生が 64.3% [51.3%] と高い。また、高校時代の友人 45.2% [29.4%]、先輩 21.4% [11.0%] など高い値を示している。身近な教師が頼りにされているほか、相談相手は同輩・先輩集団にも広がっていることがわかる。

経済的理由を中退理由としていることから容易に推測できるが、中退時点での今後の見通しとして高校への再入学を考えていた者は 14.8% [23.6%] と低く、大学進学希望者は一人もいない。逆に、もっとも多いのはアルバイト 39.3% [35.9%] や正社員 16.4% [11.1%] であり、とにかく働いて収入を得ることが念頭に置かれていたことがうかがえる。このグループで現在就業している者の就業理由を見ても、「働かないと生活できないから」「学校に通うためのお金が必要だから」とする者が高い傾向が見られ（それぞれ 73.3% [就業中 49.2%]、26.7% [就業中 15.4%]）、働くど

いう選択の際に経済的事情が強く意識されている。反対に、「これ以上高校で勉強しなくなかったから」4.4% [就業中 16.6%]、「遊ぶお金がほしいから」33.3% [就業中 47.0%] といった理由は平均よりも低く、学校を忌避して仕事の世界に入ろうと思ったわけではないことがうかがえる。また、中退直後の展望として「どうしたらいいかわからなかった」と答えた者も 14.8% [8.9%] いる。経済的な都合で中退することにはなつたものの、今後どのようにしていくか見通しをもてなかつた者が一定いるのである。

その後のかれらの進路は、正社員になった者が 20.6% [9.6%] と顕著に高い。また、アルバイトも 47.6% [43.4%] と平均程度に高く、何らかのかたちで働いている者が 71.4% [56.2%] にのぼる。逆に高校に再入学した者は少なく、全日定時制・通信制を合わせて 14.3% [25.6%] に留まる。中退後苦労してきたこととして、「別の高校や専門学校などに進学・編入するための必要なお金がない」と答えた者が 28.6% [12.8%] と明らかに高くなっていることから、高校再入学や進学を希望した者が中退後も引き続き経済的事情に縛られていたことがわかる。

以上のように、本グループの者たちは、経済的事情から高校中退を余儀なくされ、その後も経済的制約を抱えている。かれらの3年後のイメージとしては、正社員として働きたい者が 38.7% [35.9%] とグループ内でもっとも多く、その一方で高校に再入学したいという者も 12.9% [6.1%] いる。今すぐには無理でも、お金を貯めるなどして高校に戻りたいと考えている層が一定いるのである。ただ、これは母教が少ないため参考に留めるが¹⁸、職業に関わる資格取得についても「お金がない」ことを理由に取得することが難しいと感じている者が 76.9% [47.5%] いるなど、見通しは必ずしも明るいわけではないことがうかがえる。かれらは、今までだけでなくこの先の進路選択においても、経済的状況が強力なブレーキとなる可能性が強い者たちだといえる。

次に、かれらの自尊感情に目を向けると、肯定的な傾向が見られた。例えば、「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」など人間関係面での自信についての項目、あるいは「自分は人よりすぐれたところがある」など自分自身への自信についての項目では肯定的な回答が見られる。また、友人関係が極端に少ないということもない。「辞めた学校内に」友人が 13 人以上

いるとした者は 27.0% [22.0%] で平均程度に高く、「選択肢以外」の親しい友人がいないと答えた者は 12.7% [24.9%] と、こちらは平均を大きく下回っている。

また、かれらは社会サービスの認知について、22.2% が「仕事で困ったときに、相談する方法」をよく知っており（全体平均では [10.7%]）、「低い家賃で住めるところ」(44.4% [29.4%]) や、「生活や就学のための経済的補助」(54.0% [31.3%]) を「必要」とする者が顕著に多い。これらの点から、かれらはまさに経済的支援をおこなうことが直接的に移行支援に繋がる可能性があるグループともいえるだろう。

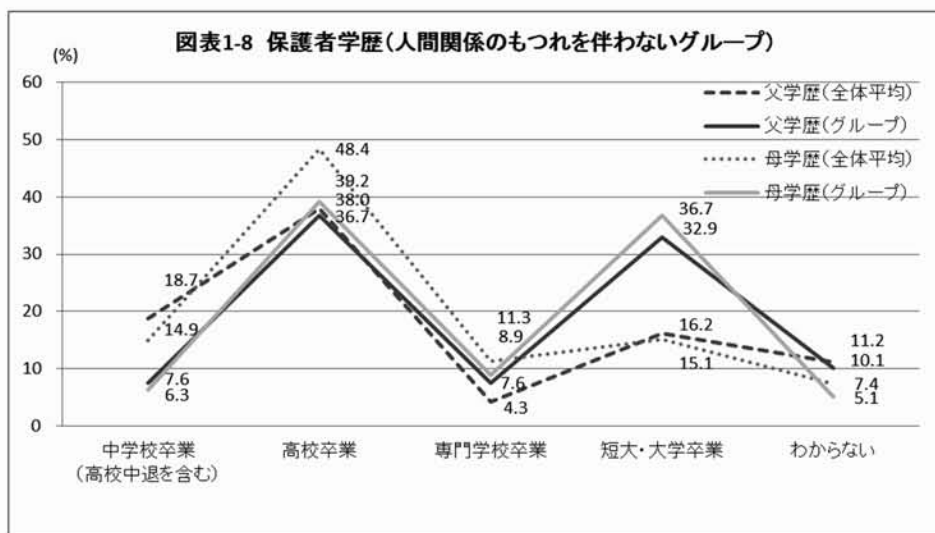
2-5. 健康問題グループ

ここでは、「健康問題グループ」と呼ばれるグループを見ていく。先にあるように、中退理由において「健康上の理由」を選んだ者は 108 名であるが、ここでは健康上の理由と人間関係を重複して選んだ 29 名と、それ以外の 79 名を、それぞれ「人間関係のもつれを伴うグループ」、「人間関係のもつれを伴わないグループ」として、以下特徴を描いていく。なお、両グループに共通する傾向として、健康問題といった際には身体上の問題というよりは精神面での問題を抱える者が多いことが推測される。本調査では保護者以外に親しく話せる大人や中退時の相談相手などについて自由記述欄を設けているが、それらの回答において「心療内科の医師」「カウンセラー」などと明記している者だけでも両グループ合わせて 12 名いる¹⁹。また、中退理由等において「うつ病」「対人不安」などといった回答も見られる。もちろん、身体的な健康上の理由から中退した者も含まれてはいるだろうが、両グループの傾向として精神面での問題を抱えた者が多いということ念頭に置きながら、以下分析を試みていく。

人間関係のもつれを伴わないグループ (79 名)

まず特徴的なこととして、人間関係のもつれを伴わないグループでは女性が 62.0% [52.2%] と多い。中退学年では、1 年が少なく (25.3% [44.2%])、2 年以降に辞めた者が 70% 以上を占めている (2 年 54.4% [41.0%]、3 年 19.0% [13.1%])²⁰。また、普通科に通っていた者の割合がやや高めだ (68.4% [55.8%])。

現状を見てみると、グループ内でもっとも多いのはフリーター・パート (31.6% [43.4%]) だが、次いで「その他」(24.1% [7.0%]) が顕著に多い。自由記述



を見てみると、その内容は高等学校卒業程度認定試験（以下、高卒認定試験）や大学受験に向けて勉強中、もしくは予備校通いといった者がほとんどである。また、「大学に在学中」(8.9% [3.3%]) も平均より多く、高校に在学している者 (26.6% [25.6%]) も一定数いる。なお、フリーター・パートのうち在学中の者を除いた「非在学フリーター」は24.1% [34.6%] と平均より少ない傾向にあった。

また中退時点の見通しを見てみると、グループ内では「別の高校に再入学するつもりだった」(26.3% [23.6%]) 者が多いほか、特徴として「大学に進学するつもりだった」(26.3% [7.0%]) が顕著に多くなっている。3年後の進路希望においても、「大学に進学したい」が29.9% [12.9%] と平均より高く、「その他」の自由記述においても「留学したい」「大学で勉強を続けたい」などの回答が多く見られた。以上のように、このグループでは大学などへの進学意識の高さが顕著に見受けられる。一方、その裏返しで、正社員やアルバイトといった項目が全体平均に比べ低い数値を示している。中退直後の見通しでは、アルバイト 17.1% [35.9%]、正社員 1.3% [11.1%] と平均を大きく下回っている。3年後の進路展望においても、正社員として働きたい者が平均より低く (22.1% [35.9%])、こうした部分にも大学進学志向の様子うかがえる。中卒時の進路意識においても、高校に進学したかった者が多く (93.7% [82.5%])、やはり働くことよりも進学することへの志向が強いグループといえよう。

また、上記のような傾向は、両親の学歴にもあらわ

れている。父母それぞれの学歴を記したのが図表 1-8 である。全体に比べ、このグループでは父母ともに学歴が高い傾向がうかがえる。父学歴では中学校卒業が少なく、短大・大学卒業が 32.9% [16.2%] と3分の1を占めている。母学歴では高学歴の傾向はより顕在化し、中学校卒業 6.3% [14.9%]、高校卒業 39.2% [48.4%] に対し、短大・大学卒業 36.7% [15.1%] となっている。かれらの高い進学意識の背景には、こうした親の高学歴傾向も影響していると考えられる²⁾。また、高卒認定試験への認知度の高さ (81.0% [64.2%]) などは、本人の進学志向もさることながら、そのような情報収集が可能な環境や資源の一つに家族がなり得ているとも考えられるだろう。

次に、かれらの人間関係を見ていこう。まず現在の友人関係を全体平均と比較したものが図表 1-9a、図表 1-9b である。各項目における平均との有意差こそないものの、グループの傾向としては、どちらかといえば友人関係は狭いといえよう²⁾。また、高校中退時の相談の有無では 88.6% [77.9%] が誰かしらに相談したと回答している。しかし、その内訳を見ると、親が 98.6% [90.0%]、高校の先生が 65.7% [51.3%] と高い数値を示しているのに対し、高校時代の友人 17.1% [29.4%]、高校以外の友人 11.4% [25.0%]、先輩 1.4% [11.0%]、中退経験者 5.7% [18.0%] などでは低さが目立つ。また、保護者以外に親しく話ができる大人でも、塾や予備校の先生 11.4% [3.8%]、カウンセラー等の記述が見られる「その他」 22.8% [11.2%] といった項目が高いことは特徴的ではある

が、友だちの保護者や近所の知人などではやや数値が低い。このように見てくると、本グループは、友人関係がそれほど広いわけではなく、また友人たちもそれほど相談相手になっていないことがわかるだろう。同輩以外の相談相手にしても、それほど広い関係があるわけではないこともうかがえる。こうした傾向は、社会サービスについて、「進路や生活などについて何でも相談できる施設」(必要+ある程度必要 62.0% [48.6%])、「進路や生活などについて何でも相談できる人」(83.5% [66.6%])、「仲間と出会い、一緒に活動できる施設」(72.2% [55.9%])を必要とする者の高さ、あるいは「自分がひとりぼっちだと感じる」者の多さ(よくある+ときどきある 54.4% [42.9%])などにもあらわれていると考えられる。

人間関係を伴わない健康問題グループでは、上記のように相談できる友人がそれほど多くなく、孤独感をもつ者も少なくないが、一方で自己イメージを見てみるとそれほど低い傾向があるわけではない²³。先の進

学意識の高さも踏まえると、その目標に向かって励む者が多いといった特徴が描けるだろう。しかし、先に見たようにカウンセラーや精神科医、主治医などの回答が散見されることから、グループ内に抑鬱状態などの精神的健康問題を抱える者が少なからずいると思われる。また、将来について「たいへん不安だ」とする者も36.7% [26.1%] おり、進学に向けて順調に進んでいるとは限らないことには留意が必要であろう。

人間関係のもつれを伴うグループ (29名)

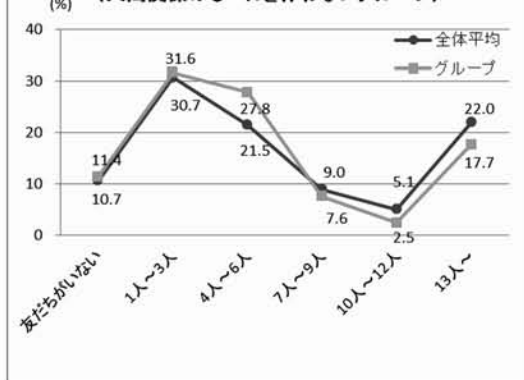
人間関係のもつれを伴うグループは、前のグループ以上に女性が多く75.9% [52.2%]を占める。中退学年では、人間関係のもつれを伴わないグループに2、3年が多かったこととは対照的に、1年が多い(46.4% [44.2%])。

現在は、全日定時制・通信制高校37.9% [25.6%]、家事手伝い34.5% [11.0%]、職探し中24.1% [13.6%]などが多い。特に家事手伝いはグループの3分の1以上を占め、全体平均と比べても顕著に多くなっている。フリーター・パートも一定いるが、全体と比べるとかなり少なく(17.2% [43.4%])、働いている者が24.1% [56.2%]と顕著に少なくなっている。このように現在の状況だけを見ても、特徴的なグループといえよう。

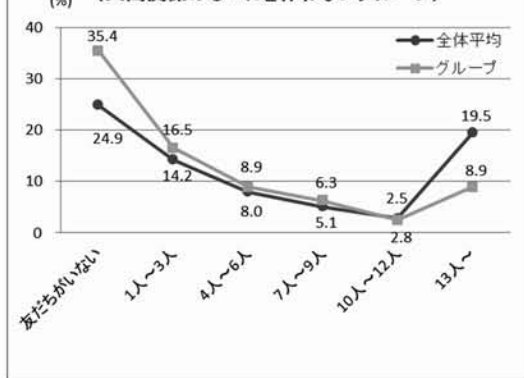
一方、進路や意識などにも特徴的な傾向が多く見られる。中退直後の見通しでは、別の高校に再入学25.9% [23.6%]、どうしていいかわからなかった25.9% [8.9%]といった項目が高い。特にどうしていいかわからなかったという回答は4人に1人に相当し、中退直後には今後の進路をかなり迷っていた様子がかげえる。そうした進路選択や進路決定上の困難は中退後のみならず、その後も続いたようである。中退後の進路決定の際に苦労してきたことについての回答を見ると、すべての項目で全体平均を上回り、平均に比して顕著に高い数値を示しているものも多い(図表1-10)。また、職業に関わる資格で取りたいものがあるかという設問に関しても、まだわからないと回答した者が半数いる(50.0% [35.7%])²⁴。将来への不安については、「たいへん不安だ」35.7% [26.1%]、「やや不安がある」46.4% [43.4%]と、不安を感じている者が平均よりやや多めとなっている。このように、このグループでは、進路選択・決定のプロセスにおいて、現在にあっても相当の困難を抱えている者が多く、進路展望が不透明である者も多いことがうかがえる。

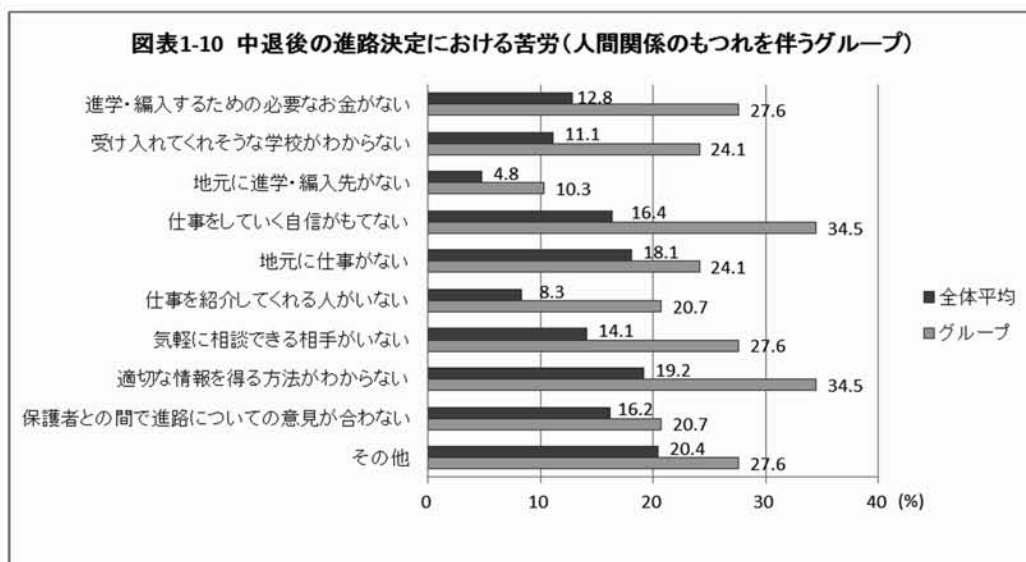
ここで、人間関係のもつれを伴わないグループとの

図表1-9a 辞めた学校内の親しい友だちの人数
(人間関係のもつれを伴わないグループ)



図表1-9b 選択肢以外の親しい友だちの人数
(人間関係のもつれを伴わないグループ)



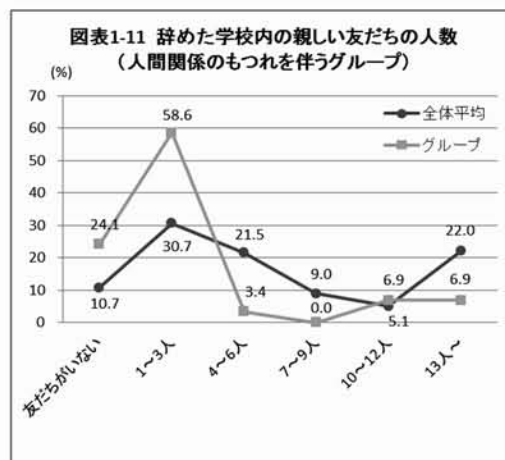


比較から本グループの特徴を見ておこう。中退時展望においてアルバイトとして働くつもりだった者は、人間関係のもつれを伴わないグループ同様、本グループも18.5% [35.9%]と低い。だが、本グループでは大学進学希望が低く(3.7% [7.0%])、また親学歴についても人間関係のもつれを伴わないグループのような高学歴傾向は見られない。3年後の進路においては、高校再入学 10.7% [6.1%]、専門学校入学 17.9% [10.1%]、大学進学 14.3% [12.9%]と40%以上の者に進学志向が見られるが、人間関係のもつれを伴わないグループの大学進学希望者 29.9%と比べればやはり大学進学志向はそれほど高くない。また、正社員を希望する者も32.1% [35.9%]おり、人間関係のもつれを伴わないグループにおける22.1%よりもやや多くなっている。

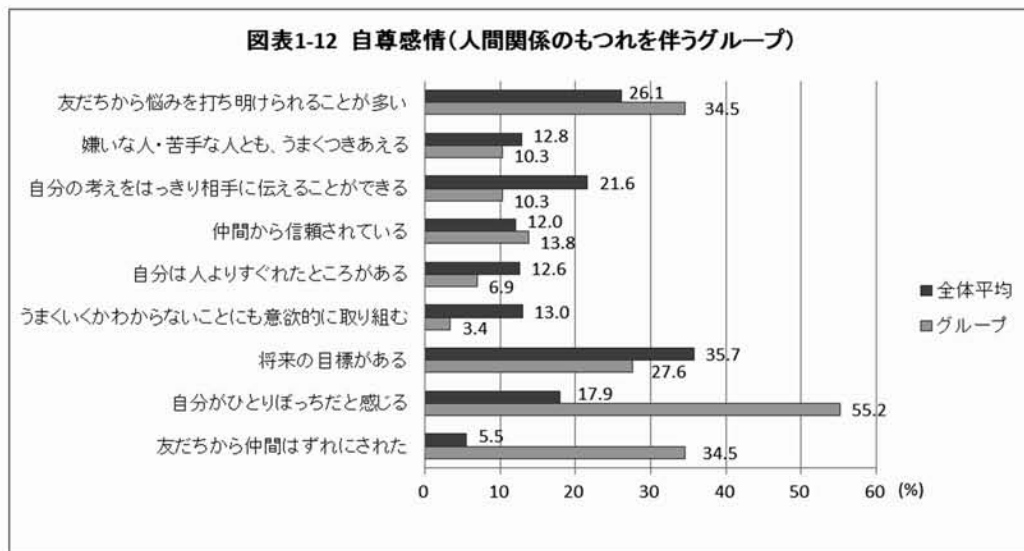
このように見てくると、確かに現在高校在学者が多いこと、あるいは3年後には学校に在学することをイメージする者が少なくないことから、仕事志向というよりは学校志向である特徴が見られる。しかし、人間関係のもつれを伴わないグループでは、大学進学という明確な希望に向けての準備段階にある様子が見られたのに対し、本グループでは現状と進路希望との間にある種のギャップが見受けられ、目標に至る際には現状からやや飛躍を求められる状況にあるといえよう。先に見たように進路選択・決定上の困難が多く、とりわけ「仕事をしていく自信がもてない」者が多い(34.5% [16.4%])ことを踏まえれば、そうした困難

の結果として高校再入学などの選択をしてきた、あるいは進学を希望する、といったイメージが描き出されるのではないだろうか。常に大学進学を念頭に置いてきた者が多いだろう人間関係のもつれを伴わないグループとは、同じ学校志向傾向をもちながらその点で大きく異なるのである。

次に、本グループの人間関係の様子を見てみよう。辞めた学校内や選択肢以外に親しい友人がいないと回答した者は、それぞれ24.1% [10.7%]、41.4% [24.9%]と平均より多い傾向が見られる。また、友人の数についても「1～3人」という回答が多く、図表1-11に見られるように友人関係は狭い傾向にある。中退時の相談相手についても、高校の先生が高い(69.2%



図表1-12 自尊感情(人間関係のもつれを伴うグループ)



[51.3%]) もの、同輩先輩への相談が総じて少ない。また、社会サービスの必要度においては、相談施設(必要+ある程度必要 69.0% [48.6%])、相談相手(82.8% [66.6%])を必要としている者の多さが目立つ。こうした数値の高さは、友人関係の狭さに起因していると考えられるだろう。先に見た図表 1-10 の進路決定時の苦勞で、「気軽に相談できる相手がいらない」、「仕事を紹介してくれる人がいない」が高かったことにあらわれるように、このような人間関係の狭さも進路選択や決定のプロセスに重要な影響を与えていることがうかがえる。次に、かれらの自尊感情を見てみると、やや否定的なありようが見られる(図表 1-12)²⁵。特に「自分がひとりぼっちだと感じる」、「友だちから仲間はずれにされた」の数値の高さが顕著である。先の友人関係の狭さと合わせて考えると、「人間関係がうまくいかなかった」という本グループの中退理由には、いじめなどの問題を含意するケースが含まれていると考えられるのではないだろうか。このような点をさらにあらわしていると考えられるのが、保護者以外に親しく話しかける大人といった項目である。人間関係のもつれを伴わないグループ同様に本グループにおいても「その他」の数値が高く(34.5% [11.2%])、その内容を見てみると、ここでもカウンセラーや主治医などの回答が少なくない。また、進路決定の際の苦勞(図表 1-10)においても、「その他」の自由記述で心身の不調を訴える回答が見られる²⁶。いじめなど、人間関係上のトラブルの結果、カウンセリングや精神科への通院を余儀なくされた者がグループ内に一定いるのだ

と考えられる。

このように見てくると、同じように健康上の問題を中退の理由としていても、2つのグループで大きく異なることがわかる。人間関係のもつれを伴わないグループは、前述の通り、親の高い学歴を背景に本人も進学意識が高いなど、学校に対して非常に適応的であった。本調査では偏差値等による学校ランクを聞いていないため憶測になるが、進学校における中退者には神経症的不登校タイプが多く見られており、人間関係のもつれを伴わない健康問題グループの者たちの親学歴や本人の様子を踏まえると、そのようなタイプの者がここには一定数含まれていると考えられる。一方、人間関係と健康問題双方の理由から退学に至ったグループには、端的にはいじめなどの人間関係トラブルによって心身の状態を崩した者が含まれていると考えられる。中退時どうしていいかわからなかった者が多く、また現在でも就学・就業していない者、心身の不調を訴える者が少なくないことから、中退後現在に至っても精神面での困難を抱え、その結果として進路選択や決定のプロセスに困難を抱えている者が多いことがうかがえる。

2-6. 妊娠グループ

以下、「妊娠グループ」の38名を見ていく。このグループでは1名の無回答を除く37名が女性である。まず中退した高校の特徴として、課程別に見ると、全日制が少なく(65.8% [87.2%])、夜間定時制が多い(34.2% [8.2%])²⁷。また、中退学年を見てみると、

1年が少なく(15.8% [44.2%])、3年(28.9% [13.1%])が多い。本調査に限らず高校中退は一般的に1年に多く3年で辞める者は少ないが、妊娠については3年生でも辞める理由になり得るほど強い要因となっていることがわかる。

次に、妊娠グループの現在の状況を見ていこう。38名中36名(94.7%)が現在「妊娠中・育児をしている」と回答している。また、通信制高校に在籍する者が7名(18.4%)おり、その7名のうち4名はフリーター・パートもしている。

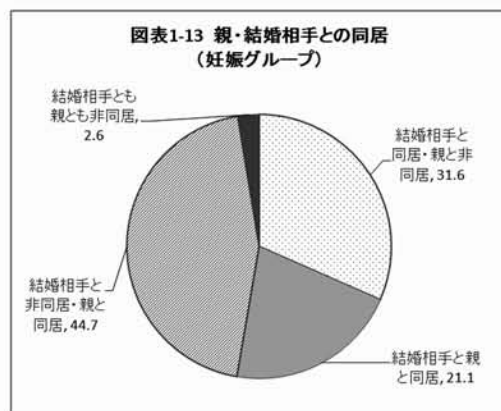
また、家族に関してであるが、まず「結婚している」と回答した者は52.6%と約半数であり、「同棲している」者が若干数(5.3%)、残りは「結婚していない」(42.1%)と回答している。約半数が未婚のまま妊娠・育児中にあるということになる。次に、家族構成を①結婚相手と同居・親と非同居、②結婚相手と親と同居、③結婚相手と非同居・親と同居、④結婚相手とも親とも非同居の4つに分けて見てみると、図表1-13のようになった。①が12名(31.6%)、②が8名(21.1%)、③が17名(44.7%)、④が1名(2.6%)²⁸であった。図表からわかるように、半数近くの者が現在結婚相手(ないしは恋人)と同居していない。また、子どもとの同居は26名(68.4%)である²⁹。結婚しておらず、また同棲もしておらず、かつ子どもと同居している者は13名であることから、データ上は34.2%がシングルマザーということになり、高い数値を示している。妊娠グループの親学歴を見てみると、父親は平均的であるが、母親は専門学校・短大・大学卒業(13.2% [26.4%])がやや少なく、中学校卒業(26.3% [14.9%])が多いことが目立つ。

次に、友人や相談相手などの関係について見ていこう。高校を辞めることについて、誰かしらに相談したという者は94.7% [77.9%]と大半を占めた。相談相手として、グループ内で高かったのは親91.7% [90.0%]に次いで、高校の先生44.4% [51.3%]、高校時代の友人36.1% [29.4%]であったが、平均に比して高校以外の友人11.1% [25.0%]、中退経験者5.6% [18.0%]などが低い³⁰。妊娠という事情から、通っていた高校の先生や友達など身近な人が頼りにされたとも考えられるだろう。また、現在、保護者以外に親しく話ができる大人としては、親戚34.2% [23.8%]がやや高めであったほかは平均的であった。友人関係にしても、平均に比べてとりわけ低いものは見られていない。しかし、現在必要なこととして、有

意差が認められるほどではないものの、相談相手(必要+ある程度必要78.9% [66.6%])を求めている様子が読み取れる。この背景には、妊娠・育児という事情が関係していると思われる。多くの者が生後0~2歳の子どもを抱えている、あるいは妊娠中という状況であり、さらに80%以上の者が働いているわけでも高校に通っているわけでもない。つまり、人間関係がある程度限定された状況にある者が多く、子育て等をめぐって相談相手を必要と感じているとも考えられるのである。ただし、育児・妊娠中ということから妊婦健診や乳幼児健診などでの保健師等との接触はあるものと思われる。それは、社会サービスに関して、「生活で困ったときに、相談する方法」を知っている者が多い(よく知っている+だいたい知っている50.0% [26.8%])ことからいえるだろう。

ところで、前述したように、このグループではほとんどの者が現在妊娠・育児中であるが、3年後には、高校に再入学したい(15.8% [6.1%])、アルバイトとして働きたい(26.3% [9.9%])と思っている様子が見られる。育児がある程度落ち着いた後に、高校に再入学するなり働くなりしたい、と考えている者が一定いるのである³¹。このことと関連して、妊娠グループでは高卒資格を必要と考える者が、中退前(89.5% [75.8%])、中退後(86.8% [78.4%])ともに多くなっている。このような数値の高さは、もともと高校を卒業しようと思っていた者が本グループに一定含まれているとともに、将来的にアルバイトやパートなどで働く際に高卒資格が必要となるということに動機づけられているとも考えられるのではないだろうか³²。

最後に、妊娠グループの自己イメージを見てみよう。「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」など人



間関係面での自尊感情は平均的か比較的高いが、「自分には人よりすぐれたところがある」という項目では、当てはまるとした者の割合が少ない(21.1%[35.0%])。また、将来に関して不安に感じている者(たいへん不安だ+やや不安がある)が78.9%[69.6%]にのぼっている。子育てを中心に据えて積極的に今後の将来展望を描いている者たちであるが、一方で、シングルマザー率の高さや子育て中ゆえに交友関係が限られてしまい相談相手を欲していることなど、子育てをめぐっての不安も抱えざるを得ない状況にあることがうかがえる。

3. 終わりに —中退理由別グループの分布

本章では、中退時の理由に着目し、怠学グループ、経済的自立志向グループ、問題行動グループ、経済的困窮グループ、健康問題グループ、妊娠グループの計6グループについて見られる特徴を描いてきた。かれらがどのような属性の人たちで、学校を辞めた後どのようなことを考えながら進路選択をおこない生きてきたのか、その具体的な姿を描き出すことを目的としてきた。以下では改めて各グループのまとめをおこない、グループ同士の関係を明らかにすることで、中退理由を切り口とした中退者の全体像について考察する。

まず、経済的自立志向グループ(以下、自立志向グループ)から見てみよう。正社員やアルバイトなど、現在何らかのかたちで働いている者が86%にのぼり、就労率は6グループでもっとも高い。また、中退時点でも75%の者が働くつもりであった。生活のためや親元から自立したいことを理由に仕事の世界に飛び出したかれらは、学校に戻ることをほとんど考えていない。半数弱の者は高卒資格を不要と感じており、それに代わって職業に関わる資格意識が強くなっている。

一方、同じように仕事の世界に入りつつも、やや異なる側面をもつのが問題行動グループである。このグループでも多くの者が正社員やアルバイトとして働いているが、一方で高校再入学を果たした者も22%いる。職業資格の取得を意識しているとともに、高卒資格についても必要と感じる者が中退後増加している点が特徴的であり、将来への不安感も自立志向グループより高くなっている。問題行動という中退理由の性質上、本人にとって不本意で性急な退学もあり得たであろうことを踏まえれば、学校を忌避し意識的に仕事の世界へ

とスピアウトしていった自立志向グループの者たちとはやや異なる面をもって当然ともいえよう。

また、現在仕事をしている者が多いという点は、経済的困窮グループにも共通して見られる特徴である。中退時の進路展望では高校再入学が少なく、働くことを考えていた者が多い。しかし、現在働いている者たちの就業理由を見てみると、生活のためという理由のほか、学校に通う資金のためが多くなっている。自立志向グループで多かった「これ以上高校で勉強しなかつたから」などの理由は顕著に少ない。本グループには再び学校に戻りたいと考えている者が一定含まれているのである。その背景には家庭の経済状況の厳しさという事情が大きく関係しているのだろう。すなわち、経済的困窮グループの者たちは、家庭や経済上の理由から高校を辞めざるを得ず、また仕事の世界に渡らざるを得なかつた者たちであり、自ら仕事の世界へ参入していこうという自立志向グループとは大きな違いがあるのである。

以上、仕事への渡り方の経緯や動機付けは異なるものの、かれらは学校から社会、とりわけ仕事の世界へと生活の軸を移しつつあり、いわば就労生活を開始し始めているグループといえる。

一方、これらのグループと対極にあるのが健康問題グループである。人間関係のもつれを伴わないグループでは働いている者が顕著に少なく、大学進学に向けての準備段階にある者が多かった。3年後の将来展望においても正社員希望は少なく、大学への進学希望が日立つ。かれらを神経症的不登校タイプと一定の重なりがあると見るならば、学校・家庭への過剰適応的な苦しさから健康上の不調をきたし、やむを得ない状況下で中退へと至っていることが想像できる。そしてその後も、高校再入学や高卒認定試験等を経て高等教育への進学に邁進していこうとする者たちであることから、同じ高校中退者とはいえ前の3グループとはまったく異なる層であるといえよう。

また、人間関係のもつれを伴うもう一方の健康問題グループについても、高校在学者が比較的多くフリーター・パート等で働いている者は顕著に少ない。家事手伝いや職探し中など状況が不透明である者が多いことも特徴的である。象徴的にはじめ等が推測される人間関係のもつれから心身の不調を生じ中退に至ったと思われるこのグループでは、中退時どうしていいかわからなかつた者が25%以上にのぼる。3年後の将来展望に関しては、高校再入学や専門学校進学など一定

の学校志向性が見られるものの、人間関係のもつれを伴わないグループのような顕著な大学進学志向は見られず、どちらかという、仕事をする事への自信のなさなどから結果的に学校志向性をもった者たちと考えられる。

以上のような現在仕事の世界に出ているグループと、学校に留まったり進学準備をしたりするグループとの間に、怠学グループは位置している。先に見てきたように、まったく異なる現状や志向性をもつ者たちが相反する中で全体平均の数値は形成されており、怠学グループは結果的にその中間に位置したとみなすことができるだろう。現状では、フリーター・パートの者が40%を占めるほか、高校再入学者も20%いた。将来的には正社員として働きたい者が43%おり、アルバイト15%を足すと、3年後の将来展望としては学校に留まるよりも仕事の世界に参入していこうとする者の方が若干多い傾向があるといえるだろう。

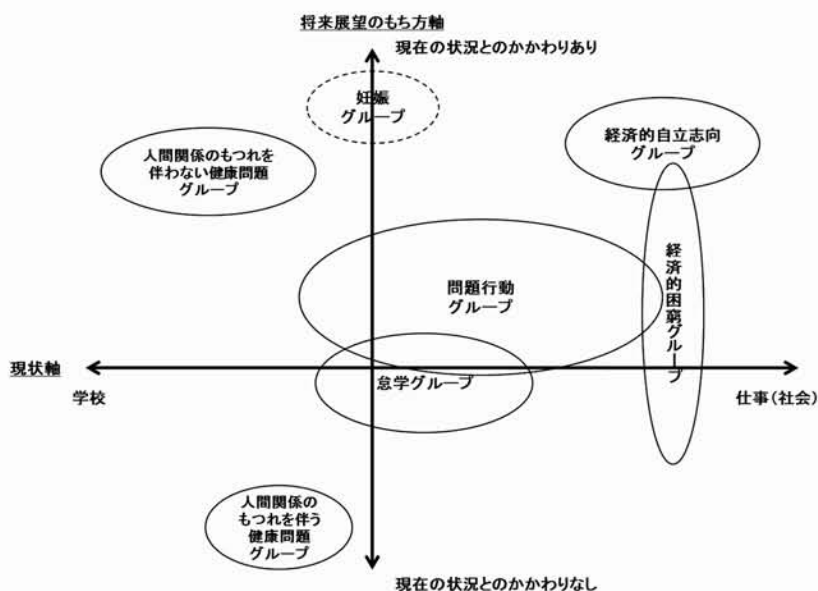
また、最後に妊娠グループを見ておきたい。彼女らは妊娠・育児というイベントを経て「母親」への経路を歩んでいる者たちである。3年後の将来展望では高校再入学者を希望する者がいることや、高卒資格の必要性を感じる者が多いことから、決して学校を忌避した者たちではない。現在は妊娠・育児中と、これまで見てきたグループの者たちのような学校・仕事双方の軸から離れた状態にあり、ひとまずは子育てが生活の中

心にある者たちである。

以上のような各グループの特徴を図式的に表したものが図表1-14である。X軸は、現在の状況が「学校から仕事(社会)」への移行においてどこに位置するかを示している。右側にいくほど仕事の世界で生きている様子が顕著なグループで、左側にいくほど学校に留まったり進学したりする傾向が顕著なグループとなっている³⁸⁾。また、Y軸では将来展望のもち方を尺度とした。上にいくほど、現在の延長線上に将来を考え、将来と現状との関連が強いグループが位置している。逆に、現在の状況から次の目標への結びつきが薄い場合には、相対的に下に位置するようになっている。なお、Y軸はあくまで現状とのかわりがあるか否かの指標であり、後に見るように将来展望の安定・不安定を示すものではない。

図を見てみると、たとえば、各グループの中間的な立ち位置にある怠学グループは図中の原点に近いところに位置している。現状において仕事をしている者がやや多いため、X軸でやや仕事方向寄りとなっている。また、将来展望については、もっとも多い正社員希望の者たちのうち半数は現在何かしらのかたちで働いており、すでに仕事の世界に出ているという点で現在の状況と関連が見られるが、家事手伝いや職探し中の者なども含まれることからY軸の中間に位置している。

図表1-14 中退理由別グループの分布図



このように見てくると、学校から仕事への軸でも、将来展望が現在の状況と関連しているか否かという軸でも、まず突出しているのは自立志向グループである。何らかのかたちで働いている者がほとんどであり、3年後に正社員を希望する者のうち80%以上が現在就労している者たちである。また、すでに正社員である者も一定数おり、現在の延長線上に将来展望を描いている傾向が比較的強いグループと考えられるだろう。ただし、全体平均に比して正社員が多いとはいえ、非正規雇用の者が60%以上を占めていることや、参入可能な労働市場が実質的に限られていることを踏まえれば、かれらが決して安定的であるわけではないことは付言しておきたい。

自立志向グループが仕事の世界に渡り、今後もそこでやっぴこうとする者が多いのに対し、同じように仕事の世界に生きている者たちの多い経済的困窮グループにおいては、高校再入学を希望する者が一定数いるなど、多少の進路変更を視野に入れた者が含まれている。その背景には、かれらが家庭や経済上の理由から高校を辞めて働かざるを得なかった事情があるのだろう。かれらは中退によって学校生活の途中で仕事の世界に出されてしまった者たちであり、今後もこのまま仕事の世界でやっぴこうとする者と学校に戻ろうとする者の両者が存在しているといえる。この点から、経済的困窮グループの将来展望のモチ方は現状の就労生活とのかかわりが強い層だけでなく、逆に就労から学校へと反転する層が出てくるのである。それは問題行動グループも同様である。現在働いている者が多いが、3年後の展望では正社員が多い一方で復学進学を考える者も一定おり、将来展望のモチ方において現状との結びつき度合いにグループ内でややばらつきが生じている。

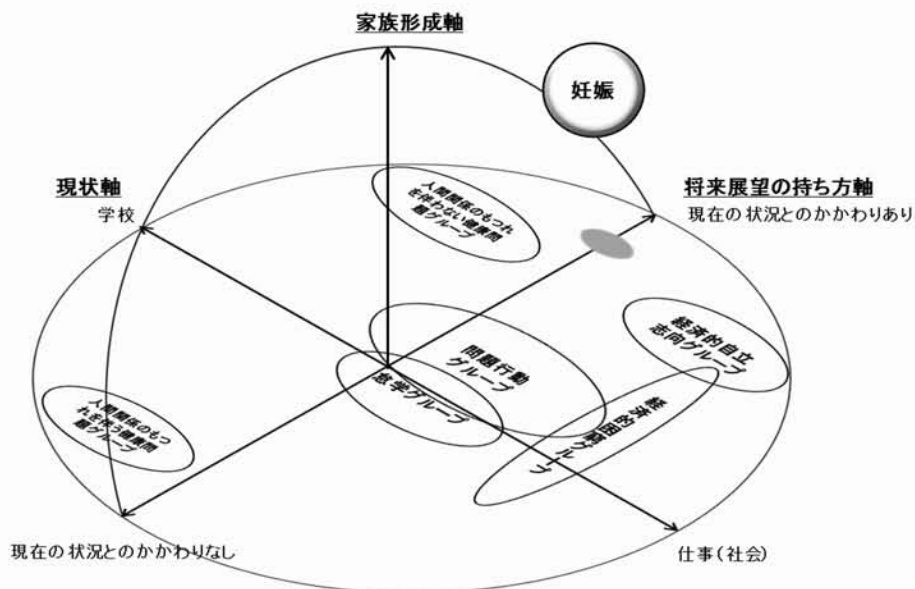
次に、健康問題グループを見てみると、人間関係のもつれを伴うグループと伴わないグループで位置が大幅に異なる。人間関係のもつれを伴わないグループでは、大学進学という「明確」な将来展望が描かれており、また、予備校等に通い受験準備中である者が多い現状を考えれば、比較的現在の状況とのつながりのなかで大学への進学を考えている者が多いといえよう。ただし、神経症的疾患を患っていると思われる者が一定いることから、大学進学という展望自体はかなりクリアでありながら、その後安定的な学生生活を続けられるかという面では不透明なところもあるだろう。そのことと関連して、80%近くが将来への不安感を抱

いていることを付言しておく³⁴。一方、人間関係のもつれを伴うグループでは、家事手伝いや職探し中の者が多くを占めるなか、進学や正社員を希望するなど現状から一定の飛躍が要される将来展望となっている。中退時「どうしていかかわりなかった」者が顕著に多かったグループでもあり、将来への不安感が他グループと比してもっとも高い(82%)ことから、今後の進路を描く際にも一定の迷いがある者たちと考えられる。

最後に、妊娠グループはどのように考えられるだろうか。先に述べたように、妊娠・育児中である彼女らは、現在学校・仕事両軸に乗らない者たちであり、その点で学校か仕事かという指標で分類した図に位置づけることは難しい。彼女たちの現在の状態を捉える際に必要なのは、学校・仕事という軸よりは家族形成という軸になるだろう。もちろん、10代が多くを占める中退者全体としては家族形成が問題となる者は少数に過ぎない。だが、妊娠・出産・育児というイベントが彼女らの生活や移行を捉える際に重要なものであることは間違いない。そこで、図示したX軸Y軸に対して、仮に家族形成というZ軸を置き、三次元で考えた際に上方向にいくほど自らの新しい家族を形成しているグループと考えてみたい。とするならば、妊娠グループの者たちはまさにこのZ軸上方に位置づくことになる(図表1-15)。また、Z軸上に位置づけた上でY軸の将来展望のモチ方との関係を見てみると、中退時あるいは3年後の将来展望で「出産後、子供が少し大きくなってから働く」「子育てをしながら専門学校に行きながらアルバイトをしたい」などといった家族形成と関連した記述が見られる。このように将来展望が子どもの成長展望と重ねて形成されていることを踏まえれば、育児という現状とのかかわりを強く持ったまま将来展望を描いている者たちといえ、Y軸上にも上方に位置づくだろう。ただし、先にも指摘したように、Y軸上方に位置づくことは将来展望が安定的だということを意味していない。妊娠グループでは80%近くの者が将来への不安を感じており、シングルマザーも多く含まれていることを考えれば、むしろ彼女らは、子どもを抱える状況の下で今後の将来展望を描かざるを得ない者たちであるともいえる。

以上6グループに見られる状態を俯瞰してきた。今回典型として扱った6グループの中では、図にあらわれているように、中退後就労生活を開始し仕事の世界への渡りを遂げつつある者がやや多くなっている。一

図表1-15 中退理由別グループの分布図(立体)



方で、人間関係のもつれを伴わない健康問題グループのように大学進学志向が強く学校に留まり続ける者や、問題行動グループなどのように高等教育への進学を考えずとも高校に戻ろうとする者もある。

そのことと関連して注目したいのは、仕事の世界に入っているか否か、学校に通っているか否かなどの現状を見ているだけではかれらの実態を十分に捉えられないということである。たとえば、自立志向グループと経済的困窮グループではすでに多くの者が就労生活を始めている。しかしながら、今後の将来展望について見てみると、後者においては、現在の状況との関連の中でそのまま就労生活を継続していこうという者もいれば、学校に戻ることも含めて迷っている者もいた。つまり、高校中退者らは就労世界へ渡りつつある者が多いものの、それは渡りきったというよりは不安や中退への後悔など様々な感情を含みながら移行の途上にあると捉えられるのである。それは、学校に在学している者であっても同様である。健康問題グループは総じて在学者が多い傾向にあったが、それを大学進学への経路として位置づけている者もいれば(人間関係のもつれを伴わないグループ)、仕事への不安をかかえその忌避といったかたちで在学に至っている者もいる(人間関係のもつれを伴うグループ)。こうした不安や

迷いを含んだ高校中退者の実態は、現状軸だけでなく、中退後からの経緯や現在と将来展望のかかわりなどに着目しない限り捉えることはできないものである。そして、かれらの中退後の進路・移行に際しての支援を考えたときには、こうした分析枠組みを通じてかれらの揺れや迷いを把握し、かれらの将来展望を支えるような支援が必要となろう。

注

- 1 母数には無回答者が2名含まれている。
- 2 内閣府「若者の意識に関する調査報告書(解説版)」12頁には、参考として、本調査対象者の親世代にあたる35歳から49歳までの学歴分布が、平成19年就業構造基本調査から引用されている。それによれば、当該世代において最終卒業学校が「小学・中学」である割合は、男性6.3%、女性3.9%、また「短大・高専」「大学」「大学院」を合わせた割合は、男性40.0%、女性36.0%である。一方、本調査対象者における保護者学歴は、「中学校卒業(高校中退を含む)」が父親18.7%、母親14.9%、「短大・大学卒業」が父親16.2%、母親15.1%である。報告書でも指摘されているとおり、就業構造基本調査は本人の回答であるのに対し、本調査は子どもが親の学歴を回答しているため、両者の単純な比較はできない。しかしながら、本調査対象者の親学歴は、父母ともに同世代の平均より低学歴に偏つ

ている可能性が高い。

3 それに対して、「小中学校の先生」(3.3% [6.3%])、「地域若者サポートステーションなど相談施設の職員」(0.0% [1.5%])、「インターネットで交流のある人」(4.9% [2.6%])などは、あまり相談相手にはなっていない。

4 なお、本グループで現在フリーター・パートの者32名のうち19名(59.4%)は女性である。女性で正社員である者はいなかった。

5 それに対して、専門学校在学中は2.5% [1.8%]、大学在学中は1.3% [3.3%]と、ともに低い。

6 「調査票」では、親しい友だちとして、「(ア) 辞めた学校内に」、「(イ) 小・中学校からの」、「(ウ) 塾や予備校に」、「(エ) アルバイト先に」、「(オ) インターネットや携帯サイトに」、「(カ) ア〜オ以外で」に分けて尋ねている。それぞれの項目において、「友だちがいない」、もしくは「友だちがいる」場合に「1〜3人」、「4〜6人」、「7〜9人」、「10〜12人」、「13人〜」という選択肢から人数を選ぶ形式になっている。ただし、塾や予備校・アルバイト先・インターネットや携帯サイトの項目では「通っていない」「アルバイトをしていない」「利用していない」の選択肢も別途用意されている。

7 ここでいう「自己イメージ」には、将来への不安のもち方や、人間関係面あるいは自分自身への自信としての自尊感情が含まれる。詳細は2章(p.48)を参照。

8 あるいは自己意識を示すこの項目に関しては、本グループでは全体平均以上に分化が見られるともいえる。

9 本グループの「中卒で働きたかった」者の内訳を見てみると、やや男性に多く女性が占める割合は35%程度であった。ただし、調査全体では男女比はほぼ半々である。

10 ここではより特徴的な傾向が見られたため、「とても当てはまる」のみを扱っている。

11 ここでは、正社員、アルバイト、再入学、進学に絞って図示した。

12 「非在学フリーター」とは、現在「働いている(フリーター・パート)」と回答した者のうち学生との重複を除いた者を意味する。図表1-7では、学生と重複する者は「学生アルバイト」とみなし、「高校在学(現在)」「専門・大学在学(現在)」に分類した。

13 もちろん、現在正社員の者がみな中退時から一貫して正社員として働く見通しを持ち続け、現状へと至っているわけではない。現在正社員の者のうち、中退時に正社員・アルバイトを問わず働こうと思っていた者は6割強であったが、「どうしていいかわからなかった」者も2割強含まれていた。問題行動により突然退学することになった者も一定数いることが予想されるが、先が不透明の状態で辞めたとしてもその後正社員を含めて仕事の世界に渡っていくことができるといふ本グループの特徴がここにはうかがえる。

14 なお、かれらの父親学歴は平均より低く、中卒(26.1% [18.7%])・高卒(46.3% [38.0%])がほとんどである。

15 たとえば、今後取りたい職業に関わる資格として、「足場組立て、解体、1t以上たまたがけ」、「高所作業車、クレーン、アーク溶接、ガス溶接、大型重機など建築関係」、「ホイスト、小型特殊」といった土木・建築関係の資格を挙げている者たちがいることが、その解釈を裏付けている。

16 たとえば、土建系の仕事では身体を酷使するものも少なくなく、現在と同じ仕事内容を今後も続けていくとは限らない、といった見通しも推測できる。

17 本調査では「調査票」問3(6)において「最近のあなたの家族は経済的にゆとりがありますか」と、経済状況について質問している。この項目からは、かれらが主観的に感じている経済状況は把握できるものの、客観的な経済状況を十分に分析することはできない。そのため、本稿では扱っていない。

18 資格が取れない理由に関する回答者は13名のみであり、母数が顕著に少なくなっている。

19 なお、精神的な問題と明記せずに「主治医」と回答している者がほかに5名見られたが、自由記述から身体上の健康問題で病院にかかっていると判断できる者は一人もいなかった。

20 休学や留年を含め、一定の不登校期間を経て退学に至った者が多いのではないかと考えられる。

21 先の経済的困窮グループに顕著にあらわれているように、中退者のなかには母子家庭を中心とするひとり親家庭の者が多いことがわかっているが、このグループにおいては父親との同居率が73.3% [63.1%]と高い。そのため、主に父親の収入で生活していると回答した者も78.5% [59.3%]と高くなっている。

22 ただし、図表1-9b 選択肢以外の親しい友だちにおいて「友だちがいない」と回答した者については、平均より有意に低い。

23 たとえば、「嫌いな人・苦手な人とも、うまくつきあえる」(とても当てはまる+まあ当てはまる53.2% [51.4%])など平均的である。ただし、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」(44.3% [58.7%])では低く、「将来の目標がある」(70.9% [61.7%])では高い傾向が見られる。

24 なお、あると答えた者は28.6% [37.5%]であった。具体的な資格としては、保育士、調理師、中型・大型の自動車免許、看護士、福祉系の資格、などといったものが挙げられている。

25 ここでは、より特徴的な傾向が見られたため、「とても当てはまる」のみを扱っている。

26 「人が怖くて外出できない」、「この体と心で何ができるかわからない。何もできない」、「うつ病になってしまったのでどうしたらいいかわからなかった」など。その他に「自立する方法がわからない」、「親の不仲で

進路どころではなかった」などの回答があった。

²⁷ 学科では、1業科が少なく(2.6% [13.7%])、商業科が多い(21.1% [8.6%])。

²⁸ この1名は子どもと二人暮らしである。生活における主な収入の項目を見ると、生活保護を受給している。なお、妊娠グループで生活保護を主な収入としている者は3名(7.9% [3.8%])である。

²⁹ 子どもと同居していない者の多くは高校を辞めてから8ヶ月以内であり、妊娠中と考えられる。

³⁰ なお、選択肢に恋人ないし結婚相手といった項目がなかったことから、恋人や結婚相手に相談したと回答した者は、自由記述で「彼氏」、「結婚相手」と答えた2名のみであった。

³¹ 中退時や3年後の将来展望についての自由記述では、「ある程度、子育てが落ちついたら通信に通うつもり」「育児しながら働ける所で働きたい」などの回答が見られている。

³² 職業に関わる資格で取りたいものがあるか尋ねた設問では、あると答えたのは平均と同程度だが(43.2% [37.5%])、具体的な資格では、特に美容関係が多く挙がり、また医療事務、看護師なども見られる。

³³ ただし、このような軸では「特に何もしていない」など迷っている状態の者たちの現状を示すことができない。グループでいえば、人間関係のもつれを伴う健康問題グループはそのような者が一定含まれるが、それは本図においてうまく描き出せていない。これらの者たちの特徴は、2章でより詳細に捉えられている。

³⁴ 本調査では高校中退後大学に在学している者たちの自尊感情の低さがみられており(2章参照)、このことからかれらの大学進学後のありようには留意すべき点があるだろう。

[桑嶋 晋平・原 未来・宮島 基]

2章 調査時点における高校中退者の現状

1. はじめに

1-1. 自己イメージへの注目

前章では、中退理由別に中退時の状況とそれからの歩みを描き出した。本章では、高校中退者の調査時点の状況に着目し、その後かれらが何をしているのか、自分についてどう感じているのかを明らかにしたい。

本調査では、問5、問13、および問14で、調査時点での高校中退者の意識を様々な角度から尋ねている。本章ではこのうち、問13(ケ)「読み書きに苦労する」

などの生活スキルに対する自己評価を問う項目を除いた10項目を取り上げる(図表2-1)。以下では、この10項目を「将来への不安」と「自尊感情」に大別し、さらに「自尊感情」を「人間関係における自尊感情(自信)」と「自分自身に対する自尊感情(自信)」の二つに分類した。そしてこれらを総合したものを「自己イメージ」と名づけた。

本章では、以上の内容で構成される自己イメージに関する回答傾向や特徴がどのように形成されているのかを、現在していることとの関連において把握する。本調査では、「調査票」問2で「あなたが現在していることについてお聞きします」と尋ねている。その際、

〈図表2-1 自己イメージの諸側面と対応する設問〉

側面		対応する設問	
将来への不安		問5。(2)あなたは、自分の将来について、どのように感じていますか。	
自尊感情	人間関係における自尊感情(自信)	問13. あなたは、次にあげたことがどのぐらい当てはまりますか。 (ア)「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」 (イ)「嫌いな人・苦手な人とも、うまく付き合える」 (ウ)「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」 (エ)「仲間から信頼されている」	
		問14. あなたは、次にあげたことがどのぐらいありますか。 (ア)「自分がひとりぼっちだと感じる」 (イ)「友だちから仲間はずれにされた」	
		自分自身に対する自尊感情(自信)	問13. あなたは、次にあげたことがどのぐらい当てはまりますか。 (オ)「自分は人よりすぐれたところがある」 (カ)「うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む」 (キ)「将来の目標がある」

〈図表2-2 「現在していること」一覧〉

カテゴリ名(原文)	本節での名称(略称)	人数	男	女	比率(%)
1 仕事を探している	「仕事を探している」または「職探し中」	160	75	85	13.6
2 働いている(正社員・正職員など)	「正社員」	113	92	(21)	9.6
3 働いている(フリーター・パートなど)	「フリーター・パート」	510	199	310	43.4
4 働いている(家の商売や事業など)	「家業手伝い」	40	31	(9)	3.4
5 高校に在学中(全日制・定時制。休学中も含む。)	「全日・定時」	120	63	57	10.2
6 高校に在学中(通信制。休学中も含む。)	「通信」	180	81	97	15.3
7 専門学校に在学中(夜間部・通信制なども含む。休学中も含む。)	「専門」	21	13	8	1.8
8 大学に在学中(夜間部・通信制なども含む。休学中も含む。)	「大学」	39	19	19	3.3
9 妊娠中・育児をしている	「妊娠・育児中」	64	(1)	62	5.4
10 家事・家事手伝いをしている	「家事手伝い」	129	(36)	92	11.0
11 その他(具体的に)	「その他」	82	48	32	7.0
12 特に何もしていない	「特に何もしていない」	47	23	23	4.0
無回答	—	7	—	—	0.6
合計および重複回答率(全体)		1512	—	—	128.6

図表2-4 自己イメージに関する各設問への回答傾向(女性)

設問 [女性平均]	←肯定的										回答傾向				否定的←	
	採用する選択肢	正社員	専門	その他	フリーター	妊娠	家事手伝い	特になし	職探中	通信	大学	全日・定時	専門	特になし	全日・定時	家事手伝い
問5(2) あなたは、自分の将来について、どのよう に感じていますか [70.2%]	「大変不安」 + 「やや不安」	57.1%	62.5%	65.6%	66.2%	68.9%	71.7%	73.9%	75.3%	76.3%	78.9%	79.3%			79.3%	100.0%
問13(ア) 友だちから悩みを打ち明けられることが多い [83.5%]	「とても当てはまる」 + 「まあ当てはまる」	100.0%	95.2%	89.5%	87.1%	86.1%	84.5%	83.5%	81.5%	78.1%	77.8%	77.3%			77.3%	69.6%
問13(イ) 嫌いな人・苦手な人とうまく付き合える [50.9%]	「とても当てはまる」 + 「まあ当てはまる」	63.2%	60.0%	57.1%	56.7%	55.8%	55.5%	53.2%	51.1%	50.0%	44.8%	37.5%			37.5%	26.1%
問13(ウ) 自分の考えをばきり相手に伝えることができる [60.0%]	「とても当てはまる」 + 「まあ当てはまる」	85.7%	77.8%	75.0%	69.4%	61.9%	60.9%	60.0%	57.9%	56.3%	55.2%	48.5%			48.5%	47.8%
問13(エ) 仲間から信頼されている [71.4%]	「とても当てはまる」 + 「まあ当てはまる」	95.2%	87.5%	81.3%	77.4%	77.2%	75.3%	73.9%	71.1%	66.7%	63.2%	60.9%			60.9%	53.4%
問13(オ) 自分は人よりすぐれたところがある [26.9%]	「とても当てはまる」 + 「まあ当てはまる」	38.1%	37.5%	33.3%	31.3%	30.4%	29.3%	27.4%	26.3%	25.8%	25.0%	23.5%			23.5%	19.4%
問13(カ) うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む [38.9%]	「とても当てはまる」 + 「まあ当てはまる」	57.9%	57.1%	50.0%	48.3%	46.9%	44.4%	43.9%	39.9%	38.0%	35.3%	28.9%			28.9%	13.0%
問13(キ) 将来の目標がある [63.0%]	「とても当てはまる」 + 「まあ当てはまる」	100.0%	75.4%	75.0%	68.4%	67.7%	63.9%	63.0%	62.4%	61.8%	61.5%	56.5%			56.5%	44.4%
問14(ア) 自分がひとりぼっちだと感じる [51.7%]	「よくある」 + 「ときどきある」	40.3%	42.8%	43.5%	44.4%	52.9%	54.1%	55.2%	56.3%	56.5%	56.7%	62.5%			62.5%	63.2%
問14(イ) 友だちから仲間はずれにされた [19.6%]	「よくある」 + 「ときどきある」	9.8%	9.7%	10.5%	12.5%	20.0%	20.0%	20.7%	20.7%	22.2%	22.7%	25.0%			25.0%	34.8%

カネコリ内の性別がごく少数なため考察対象外

%

傾向あり(20%水準)

(1) で現在していることを、図表 2-2 にある 12 のカテゴリからの選択によって回答を得た上で、(2) で就業者に、(3) で在学者に、(4) で「特に何もしていない」人に、それぞれ現在していることの理由を問うている。本章において自己イメージとの関連を探る単位となる「現在していること」とは、(1) の 12 のカテゴリを指す。各カテゴリには、他の選択肢と重複して回答した者も含んでいるため、二つ以上のカテゴリに同時に分類された者が一定数存在する。また、「妊娠中・育児をしている」と回答した男性 1 名など人数が少なすぎるものや、「正社員」の女性 21 名などカテゴリ内において著しく比率の低いものは分析対象から外した。図表 2-2 で () で括ったものがそれである。なおカテゴリによっては性別無回答者を含む場合がある。

図表 2-2 を見ると、すべてのカテゴリのなかで「フリーター・パート」が 43.4% と最多を占め、「通信」15.3%、「仕事を探している」13.6%、「家事手伝い」11.0%、「全日・定時」10.2% と続く。平成 22 年度『学校基本調査』によれば、全日制・定時制高校在籍者は約 336 万 9 千人であるのに対し、通信制高校在籍者は 18 万 8 千人と前者の約 5% に過ぎない。しかし高校中退者を対象とする本調査において、通信制高校在籍者数は全日制・定時制高校在籍者数の 1.5 倍となっており、高校中退者にとっての再入学先が通信制高校に偏っていることが示唆されよう。また、各カテゴリの性別比率に着目すると、「正社員」「家業手伝い」は男性が、「妊娠・育児中」「家事手伝い」では女性がそれぞれ多く、従来の性分業に沿った性別比率となっている。平成 19 年就業構造基本調査によれば、15-19 歳の若者の正規雇用者のうち女性比率は 38.2% と低い。本調査での「正社員」の女性比率が 18.6% と半減している事実は、高校中退者の場合ジェンダー格差がさらに拡大することを示唆していよう。

1-2. 全体の傾向

では、「現在していること」の 12 カテゴリ別に、自己イメージについての回答の傾向を見よう。ただし、自己イメージに関する回答は性別によって平均値が大きく異なるものがあるため、以下では男女別に傾向を見たらうでカテゴリの傾向を把握することとする。

手続きは次の通りである。まず、各カテゴリの回答傾向を見るために、問 5 (2) に「大変不安」「やや不安」、問 13 の各設問に「とても当てはまる」「まあ当てはまる」、問 14 の各設問に「よくある」「ときどきある」とそれぞれ回答した割合を性別ごとに求めた。そのうえで、自己イメージが肯定的になる回答をしたカテゴリほど左にくるように、問 5 (2) および問 14 は数値の小さい順に、問 13 は数値の大きい順に、それぞれ配列した (図表 2-3、2-4)。このうち、カイ二乗検定の結果、性別平均との間に 20% 水準で有意差があった数値のセルを黒く塗りつぶした。カテゴリ内の性別比率に偏りがある場合は、少数派のセルに斜線を引いた。

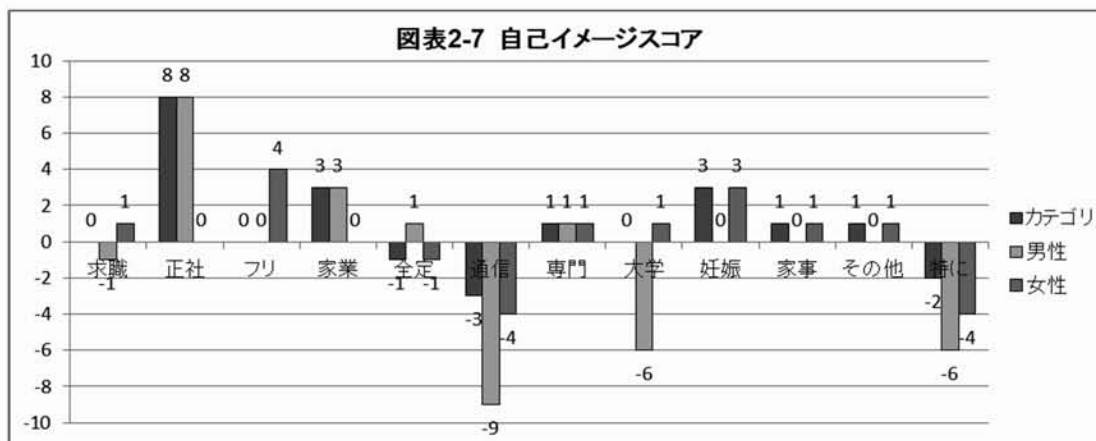
次に、20% 水準で有意差を示した数値を、自己イメージが肯定的な回答と否定的な回答とに分け、男女別に整理した (図表 2-5、2-6)。またこのとき、男女ともに 20% 水準で有意差のあった設問を、カテゴリそのものの傾向を示すものと捉え、図表 2-5、2-6 の「カテゴリ」の欄に、肯定・否定それぞれの個数を記入した。そのうえで、男女別およびカテゴリの肯定と否定との差を「自己イメージスコア」として算出した (図表 2-7)。なお、カテゴリ内の性別比率に偏りがある「正社員」「家業手伝い」「妊娠・育児中」「家事手伝い」は、多数派の性別の自己イメージスコアをもってカテゴリのそれとした。以上の手続きによって算出した各カテゴリにおける自己イメージスコアに沿って、+1 より大きい場合を「自己イメージが肯定的なグループ」、-1

図表 2-5 自己イメージが肯定的な回答を示した設問数

	職探し	正社	フリ	家業	全定	通信	専門	大学	妊娠	家事	その他	特に
カテゴリ	0	—	0	—	0	0	1	0	—	—	1	0
男性	1	9	0	3	2	0	2	0	—	—	3	0
女性	1	—	4	—	1	0	1	1	4	1	1	0

図表 2-6 自己イメージが否定的な回答を示した設問数

	職探し	正社	フリ	家業	全定	通信	専門	大学	妊娠	家事	その他	特に
カテゴリ	0	—	0	—	1	3	0	0	—	—	0	2
男性	2	1	0	0	1	9	1	6	—	—	3	6
女性	0	—	0	—	2	4	0	0	1	0	0	4



図表2-8 自己イメージのグループ分類

グループ	カテゴリ	男性	女性
自己イメージが肯定的なグループ	正社員、家業手伝い、妊娠・育児中	正社員、家業手伝い	フリーター・パート、妊娠・育児中
自己イメージが中間的なグループ	仕事を探している、フリーター・パート、全日・定時、専門、大学、家事手伝い、その他	仕事を探している、フリーター・パート、全日・定時、専門、その他	仕事を探している、全日・定時、専門、大学、家事手伝い、その他
自己イメージが否定的なグループ	通信、特に何もしていない	通信高校、大学、特に何もしていない	通信、特に何もしていない

以上1以下の場合を「自己イメージが中間的なグループ」、-1より小さい場合を「自己イメージが否定的なグループ」に分類すると、図表2-8のようになる。これによれば、「正社員」「家業手伝い」「妊娠・育児中」は自己イメージが全般的に肯定的であるのに対し、「通信」「特に何もしていない」は全般的に否定的であることがわかる。また、その中間に位置づくグループには、それ以外の7つのカテゴリが含まれる。ただし性別に着目すると、「フリーター・パート」や「大学」のように男女間でやや傾向が異なる場合がある。

では、現在していることによって、どうしてこのような差が生じるのだろうか。以下では、自己イメージの肯定的なグループ、中間的なグループ、否定的なグループの順に、そのカテゴリにどのような人たちがいるのかを、他の設問への回答傾向を手がかりに明らかにし、自己イメージとの関連を考察したい。なお中間的なグループについては、就労、在学、それ以外の活動の順に検討する。

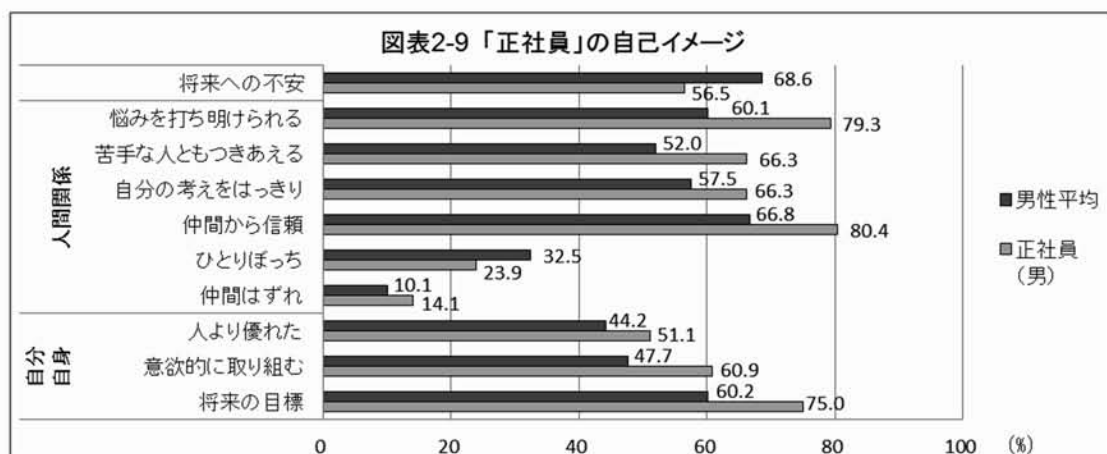
2. 肯定的な自己イメージのグループ

2-1. 「働いている(正社員・正職員など)」(113名、男性92名、女性21名)

現在「正社員」をしていると回答した者は、男性が8割を占めるため、以下では男性のみを分析対象とする。

「正社員」の男性は全般的に肯定的な自己イメージを有している(図表2-9)。将来への不安を感じている割合は低く、自尊感情は平均より高い項目が9つのうち8つある。このような肯定的な自己イメージを有する「正社員」とはどのような特徴をもつ人たちののだろうか。

まず彼らの年齢分布を見ると、16歳が21.7%[男30.4%]と少ない。中退後の経過期間は、9ヶ月以上の割合が80.7%[男68.5%]で、全体として時間の経っている者が多い。また、辞めた高校での学科は普通科がどのカテゴリよりも少なく39.1%[男52.0%]である一方、工業科が31.5%[男23.1%]と多い。次に、彼らの家族の状況に関して特徴的なのは、単身世帯が11名(12.0%[男4.7%])おり、学校の近くで一人暮らしをしている割合が高いと考えられる高等教育進学者に次いで高いことである。ここに、結婚または同棲



していてパートナーや子どもと独立世帯となっている者4名を加えると、自ら稼がなければ生活ができない者が少なくとも15名(16.3%)いることになる。そうしたことも手伝って、自分の収入で生活している割合は高く(57.6% [男 27.8%])、父親の収入で生活している割合が低い(43.5% [男 61.9%])。なお親の学歴を見ると、父親が低学歴の傾向にある(中卒25.0% [男 17.5%]、短大・大学卒8.7% [男 16.3%])。

では、彼らは中退から現在までどのような経緯をたどったのだろうか。まず、彼らが高校を辞めた原因をたどると、もっとも多いのは「問題行動を起こした」(30.8% [男 17.4%])で、他のカテゴリよりも突出して高い。彼らの約3割はいわゆる「やんちゃ」をして学校を辞めたことになる。次いで高いのは「欠席や欠時がたまっても進級できそうもなかった」(30.4% [男 30.1%])であるが平均的である。3番目以降に多い理由で特徴的なのは、「高校生活以外に興味があることができた」22.8% [男 13.6%]、「早く経済的に自立したかった」19.6% [男 11.4%]でいずれも高く、「早く家を出たかった」(13.0% [男 7.9%])でやや高い傾向が見られることである。このうち、経済的自立と離家に関する項目はどのカテゴリよりも高く、正社員の男性たちの一定数が中退当初から自立へと歩みを進めようとしていたことがうかがえる。また、そうした自立志向の裏返しであるのか、あるいは「問題行動」によって問答無用に退学が決まったためか、中退時に相談をしなかった割合が35.9% [男 29.4%]とやや高い傾向にあった。相談した相手としても、親(83.1% [男 89.7%])や高校の先生(42.4% [男 53.6%])は低くなっている。

現在働いている理由を見ると、彼らの就労生活への

充実感が伝わってくる。たとえば、「自分のやりたい仕事が見つかった」32.6% [就業中男 24.9%]、「安定した仕事につきたかった」27.2% [就業中男 13.1%]と高いことから、従事する仕事への満足感や誇りを読み取ることができる。また、「親元を離れて自立したい」(25.0% [就業中男 19.0%])がやや高いことから、一定数の男性たちが自立のために奮闘していることが伺える。なお「働かないと生活できない」(58.7% [就業中男 45.8%])は「正社員」においてもっとも高い就業理由であるが、その意味するところは、彼らのなかに単身および独立世帯が一部含まれることを考慮すれば、家庭の貧困だけでなく自活するためもあると考えられる。であれば、これも自立志向の表れのひとつとみなすことができよう。そもそも、彼らは中学時代から「中卒で働きたかった」と考えていた割合が25.0% [男 15.0%]と高く、中退直後の見通しも「正社員として働くつもりだった」が50.0% [男 18.0%]で極端に高かった。一貫して就労への志向が高かった彼らにとって、現状はそれを具現化したにすぎないともいえるかもしれない。

さらに、彼らは豊かな人間関係をもつ。彼らが保護者以外に親しく話せる大人として平均より多く挙げたのは、「アルバイト・仕事先の上司・先輩」64.1% [男 37.5%]、「友だちの保護者」26.1% [男 15.5%]、「近所の知人」16.3% [男 10.3%]など、主に家族や学校以外の場でのつながりであり、逆に「いない」と答えた割合は12カテゴリ中もっとも低い(7.6% [男 21.1%])。友人関係も豊富で、親しい友人の数を尋ねる質問において10人以上いると答えた割合が、「辞めた学校内に」42.4% [男 31.6%]、「小・中学校からの」60.9% [男 45.3%]、そしてここでは主に職場の仲間

であると推測される「選択肢以外」42.4% [男 26.8%]と、それぞれが高い。なお、彼らは生活や就労、就学に関する社会サービスについて、必要と答えた割合がどの項目でも軒並み平均的または低い。このような豊かな人間関係が、彼らを側面から支えているのだろう。

3年後の進路の希望としては、「正社員として働きたい」を挙げる割合が58.4% [男 42.8%]と高く、「アルバイトとして働きたい」はなかった [男 5.1%]。それ以外に「その他」20.2% [男 9.4%]も高い傾向にある。ここには、「今のまま正社員として働き続けたい」という趣旨の自由記述が6、独立や公社経営を目指すものが5、免許を取ったり転職をしたりしてステップアップを志向するものが4などとなっていた。ここで、現在取得を希望している資格を見ると、「アーク溶接、危険物取扱者」「大型免許、整備士」「足場組立て、解体、1t以上たまたげ」など、彼らが現在の仕事の延長線上に必要となるものを想定していることが分かる。こうしたことが3年後の進路の見通しに一定の確実性を与え、将来への不安を比較的強く抑える要因となっているのだろう。一方、3年後の進路として、高校再入学(5.6% [男 7.0%])や進学(専門学校5.7% [男 8.5%]、大学2.2% [男 14.5%])を挙げた割合は決して高くなく、特に大学進学希望は低い。高卒資格の必要性についても、中退前も中退後も一貫して必要とする者が少ない傾向にある(中退前 63.0% [男 74.0%]、中退後 62.0% [男 76.7%])。したがって、学校に戻ろうと考える者はごく一部に留まっていて、多くの男性たちは働き続ける道を選んでいると考えられる。

以上のように、自己イメージが全般的に肯定的である「正社員」の男性たちを特徴付けているのは、現状の就労生活への充実感、人間関係の豊かさ、そして就労における将来展望や自立への歩みの確かさであろう。これらの要素は互いに関連しあいながら、彼らの自己イメージに結びついているといえよう。しかしながら、一般的に高卒資格を持たずに得られる正規雇用の職は極めて限られている。加えて、建設関係などの技能系の職種に特有の文化や、多少やんちゃもして来たというようなサブ・カルチャーになじむことができる男性たちに主として開かれているに過ぎないことは付言しておくべきであろう。

2-2. 「働いている(家の商売や事業など)」(40名、男性31名、女性9名)

現在「家業手伝い」をしている者は男性が8割近いため、以下では男性のみに着目する。

「家業手伝い」の男性の自己イメージは、回答傾向は「正社員」の男性に近いが、母数が少ないため有意差の認められる項目は限られる。それでも、「自分がひとりぼっちだと感じる」では19.4% [男 32.5%]と低い。また「自分は人よりすぐれたところがある」では54.8% [男 44.2%]とやや高め、「友だちから仲間はずれにされた」では3.2% [男 10.1%]とやや低めで、自己イメージは肯定的な傾向にある。

彼らの年齢分布は、17歳以下の割合が83.9% [男 70.5%]で、やや若い方に偏っている。家族構成を見ると、単身世帯は1名のみで、父親との同居率が高く(90.3% [男 68.0%])、父親の収入で生活している割合もやや高い(74.2% [男 61.9%])。彼らは家業に従事しているわけだが、それは主に父親の営む会社や商売ということになるだろう。

次に中退時の状況をみよう。まず中退理由では、「高校生活以外に興味のあることができた」(23.3% [男 13.6%])がやや高い一方、「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」(19.4% [男 30.1%])はやや低い。彼らの多くは、高校生活に比較的早い段階で自ら見切りをつけ、就労の世界に足を踏み入れていったとも読み取れる。実際、彼らの中退時点での進路は、「アルバイトとして働くつもりだった」41.9% [男 28.1%]、「正社員として働くつもりだった」32.3% [男 18.0%]で、8割近くが就労を希望していたことがわかる。なお、再び中退理由に目を戻すと、「早く経済的に自立したかった」(16.1% [男 11.4%])や「早く家を出たかった」(3.2% [男 7.9%])は、正社員のように高くはない。彼らが最初から家業に従事していたかは別として、少なくとも家に留まりいざれ継ぐことを中退時から意識していたのかもしれない。

現在「家業手伝い」をしている彼らの就業理由に着目すると、「自分のやりたい仕事が見つかった」が51.6% [就業中男 24.9%]と高さが目に付く。「その他」で「父親が大工だから」という旨の自由記述があった1名も含めて、半数以上が今のところ家業に対して積極的にコミットしているようにも読み取れる。また、「親元を離れて自立したい」が6.5% [就業中男 19.0%]と低いことに加え、やや低い傾向が見られる項目に「働かないと生活できない」32.3% [就業中男 45.8%]、「遊ぶお金が欲しい」25.8% [就業中男 39.3%]が挙げられる。就労の目的が、自分の生活のためとい

うよりは家業に従事すること自体にあるようにも受け止められる傾向である。

また、「家業手伝い」の男性たちの人間関係を見ると、「正社員」同様の豊かさを見ることが出来る。「家業手伝い」に固有の傾向は、地域での人間関係に根付いた生活がうかがえることである。たとえば親しく話せる大人として「近所の知人」を選択した割合は22.6% [男10.3%] と高い。他にも「保護者以外の家族」が38.7% [男20.9%] と高く、「親戚」35.5% [男24.4%] や「友だちの保護者」25.8% [男15.5%] もやや高い。友人関係においても、10人以上いると答えた割合が「辞めた学校内に」で58.1% [男31.6%] とどのカテゴリより高く、「小・中学校からの」でも64.6% [男45.3%] と高い。このように豊かに結びつれたピア・グループの関係は質的に見ても親密である場合が多いようで、彼らが高校を辞める際に相談した相手として「高校時代の友人」(44.0% [男21.0%])、「先輩」(24.0% [男9.7%])、「中退経験のある人」(28.0% [男14.9%]) を選択した割合がいずれも高かった。社会サービスの必要性についても「正社員」同様軒並み低かったことから、彼らの周囲にいる大人や友人たちに十分支えられているのだろう。

3年後の見通しとしては、「正社員として働きたい」が60.0% [男42.8%] であるほか、「その他」が26.7% [男9.4%] と高い。ここには、今のまま働くことや「親のやっている仕事を株式会社にする」などの家業を継ぐ見通しが半分程度のほか、自分の店を持つことや、家業とは別の自分の夢(格闘技など)を追いかけるといったものもあった。なお、現在取得を希望している資格を見ると、「調理師免許」「船舶、無線レーダー、ダイビングのライセンス」「壁装一級」など、正社員の男性同様、現在の仕事に直結するとみられるものが多く並んでいる。今後、職場の変遷はありうるかもしれないが、当面どのような職業領域を生きていくかの見通しは比較的に明瞭であると推測される。一方、3年後の希望進路に高校再入学(3.3% [男7.0%])、専門学校(3.3% [男8.5%])、大学(0.0% [男14.5%]) を挙げる割合は決して高くない。彼らは、高校中退を後悔していないと答えた割合が54.8% [男43.1%] とやや高く、高卒資格の必要性に対する認識も中退後に減少している(中退前64.5% [男74.0%]、中退後54.8% [男76.7%])。彼らが家業に従事しており、学歴を問われる機会が少ないためだと考えられる。このように「家業手伝い」の男性たちは、「正社員」同様豊かな人

間関係に支えられながら、家業に対して若くしてすでにかなりコミットしている様子である。こうしたことが、彼らの自己イメージを高めているのだろう。

2-3. 「妊娠中・育児をしている」(64名、男性1名、女性62名、性別不明1名)

現在「妊娠中・育児をしている」(以下「妊娠・育児中」と回答した者は2名を除いて全員女性であるため、ここでは女性のみを取り上げる。

妊娠・育児中の女性たちは、将来への不安を感じている割合は68.9% [女70.2%] で女性平均と同程度であるが、自尊感情はとくに人間関係面において高めである。「自分がひとりぼっちだと感じる」(40.3% [女51.7%]) および「友だちから仲間はずれにされた」(9.7% [女19.6%]) は平均より低い。自分自身への自信に関しては、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」(48.3% [女38.9%]) は平均よりやや高いが、「自分は人よりすぐれたところがある」(19.4% [女26.9%]) は12カテゴリ中もっとも低く、総合的には高くも低くもない。

彼女たちの人間関係面における自尊感情の高さは、人間関係の安定性によるといえる。まず親しい友人の数をみると、10人以上と答えた割合が「辞めた学校内に」(32.3% [23.0%]) で高くなっている。また、保護者以外に親しく話せる大人については、「保護者以外の家族」(35.5% [女25.9%]) や「親戚」(32.3% [女23.6%]) が高い。身の回りにいる大人たちが、身重の体を気遣ったり、子育てに関わったり相談に乗ったりして、彼女たちと良好な関係を築いているのだろう。なお、社会サービスの認知度について尋ねる設問で、「生活で困ったときに、相談する方法」を「よく知っている」または「だいたい知っている」と答えた割合が52.5% [女27.9%] と突出して高い。おそらくは普段から保健師などと接する機会が多いためとみられる。

3年後の進路希望としてもっとも多いのは「その他」28.3% [女10.6%] である。自由記述の内訳を見ると、「専業主婦・主婦」3名、「育児に専念する」7名、何らかのかたちで子育てをしながら働きに出たり学校に通ったりしたいと記述した者が6名などとなっていた。どの自由記述も、基本的には育児との兼ね合いが織り込まれていると見てよいだろう。3年後の進路希望として次に多いのが「アルバイトとして働きたい」26.7% [女13.7%] である。「正社員として働きたい」は18.3% [女29.8%] と低い。働く時間を調整しやすい

アルバイトを希望する割合が高いのは、ここでも子育てとの両立が見通されているためだろう。

ところで、現在妊娠・育児中の女性たちは、全員が妊娠を理由に中退しているわけではない。中退理由で「妊娠したから」に「とてもあてはまる」または「まああてはまる⁵⁾」と回答したのは36名(58.1%)であり、25名⁶⁾(40.3%)はそれ以外の理由で中退し、その後の生活のなかで妊娠を経験して現在に至っている。この違いは、中退時の進路の見通しに関する回答に明確に表れており、妊娠を中退理由に挙げた者は58.3%が結婚か育児⁷⁾と答えているのに対し、挙げていない者は62.5%[女35.9%]がアルバイト、20.8%[女11.1%]が正社員で働くつもりだったと答えている。

両者は、世帯構成においても大きな違いを示している。妊娠を中退理由に挙げた36名のうち、未婚かつ子どもと同居している者は13名(36.1%)である⁸⁾のに対し、妊娠が中退理由ではない25名のうちでは1名(4.0%)である。少なくともデータ上は、妊娠を中退理由に挙げた者のほうが挙げていない者よりシングルマザーの比率が高い。このことと関連すると思われるのは、両者の将来への不安における差異である。ともに母数が少ないため統計的な有意差を確認することはできないが、将来に不安を感じている割合が、妊娠を中退理由に挙げた者では75.0%[70.2%]で、挙げていない者58.3%よりもやや高くなっている。

また、3年後の進路希望における高校再入学や高等教育進学割合にも若干の相違が見られる。妊娠を理由に中退した女性たちのうち、高校再入学が6名(16.7%[5.1%])、高等教育進学が4名(11.1%[23.1%])であるのに対して、妊娠を中退理由に挙げていない者ではどちらも0名である。前者において、一定数が学校生活のやり直しを希望していることがわかる⁹⁾。以上のことから、現在「妊娠・育児中」である女性たちの自己イメージとその背景を整理すると、次のように解釈できよう。彼女たちは、高校中退そのものの理由が妊娠にあるかどうかで、中退後の状況がやや異なっている。妊娠を理由に中退した女性たちは、約3人に1人が何らかの事情でパートナーとともに暮らすことができないまま妊娠・出産に至っており、そのことが将来への不安にやや結びついているようであった。一方、妊娠が中退理由ではない女性たちは、その多くが中退後、アルバイトや正社員として働くことを希望し、その後の経緯のなかで子どもをもうけたようであった。しかし、以上の差異に関わらずいずれの

場合も共通するのは、子育てや子どもの成長を念頭に置きながら、育児への専念あるいは就労や通学との両立といった3年後の見通しをもっていることである。加えて、子育てを通じた大人たちとのつながりが身の回りの大人たちを中心に形成されていること、また同世代との関係もそれなりに良好であることも共通する。これらの点が、彼女たちの比較的肯定的な自己イメージの形成に寄与しているのだろう。

3. 中間的な自己イメージのグループ

3-1. 「働いている(フリーター・パートなど)」(510名、男性199名、女性310名、性別無回答1名)

「現在していること」に「フリーター・パート」を選んだ人たちには、「フリーター・パート」のみを選択した者(343名、67.3%)のほか、「通信」(69名、13.5%)、「全日・定時」(31名、6.1%)などの学生、および「家事手伝い」(36名、7.0%)などとの重複回答を32.7%(167名)含んでいる。その一方で、この選択肢が「アルバイト・パート」ではなく「フリーター・パート」であることから、アルバイトはしているがアイデンティティは「フリーター」ではなく「学生」だと考える者のなかには、このカテゴリを選ばなかった者もいるかもしれない。そういうカテゴリであることを踏まえた上で、以下の分析を進める。

現在「フリーター・パート」をしている者たちの自己イメージは、男女でやや異なる。男性はすべてにおいて平均的であるのに対して、女性は自己イメージが肯定的なグループに属する。将来への不安を感じている割合は66.2%[女70.2%]とやや低く、自尊感情では、「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」86.1%[女83.7%]、「嫌いな人、苦手な人ともうまく付き合える」55.5%[女50.8%]、「仲間から信頼されている」73.9%[71.4%]と、人間関係面での自信において特に高くなっている。

しかしながらこのカテゴリにおいて検討したいのは、在学の有無と自己イメージとの関連である。ここでは便宜的に、「全日・定時」(31名)、「通信」(69名)、「専門」(3名)、「大学」(1名)のいずれかの学校に通いながら「フリーター・パート」も選択している人104名(20.4%)を「学生アルバイト」、学校には通っていない人407名(79.6%)を「非在学フリーター」と呼称しよう¹⁰⁾。この二つの自己イメージを比較すると(図

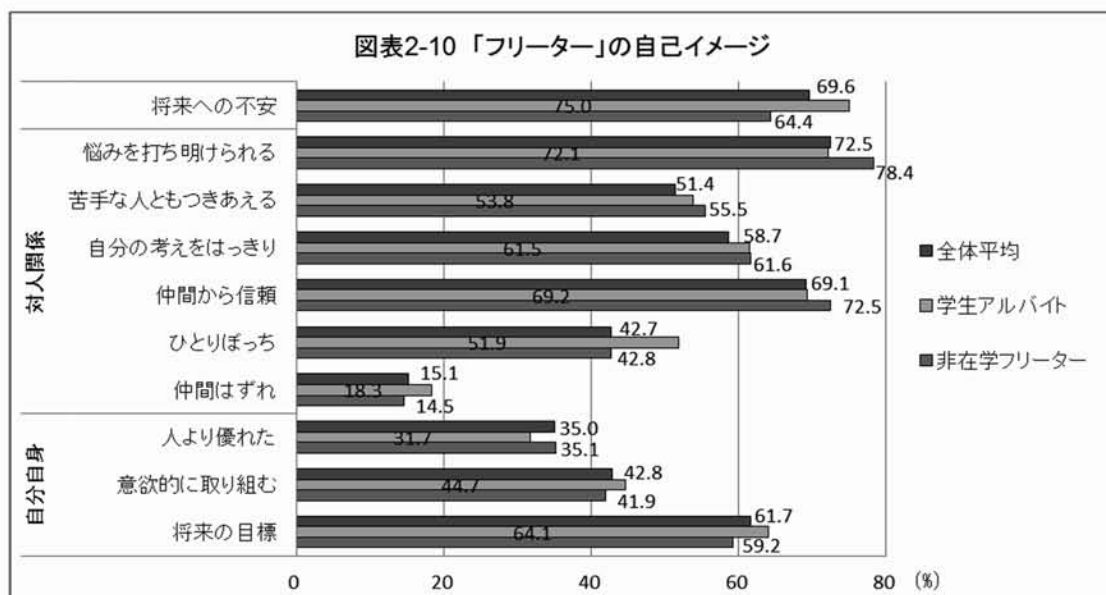


表 2-10)、自尊感情でもいくつかの差異が認められるものの、将来への不安での差は特に顕著である。これによれば、「学生アルバイト」で不安が高く、「非在学フリーター」で低い傾向が見られる。

では、現在「フリーター・パート」をしている人たちはどのような人たちなのだろうか。在学中か否かを意識しながら、以下検討しよう。まずかれらの家族の状況について見ると、母子家庭の比率（35.1% [28.4%]）が高くなっている。収入面を見ても、主に父親の収入で暮らしている割合（53.1% [59.3%]）は、独立世帯の多い「妊娠・育児中」（25.0%）や、単身者の多い「正社員」（11.5%）に次いで低くなっている。また、父母の学歴を見ると、父母とも短大・大学卒の割合が低い（父8.3% [16.2%]、母10.0% [15.1%]）。父親の学歴は在学の有無により差があり、「非在学フリーター」のほうが「学生アルバイト」より低い傾向が見られた（「非在学フリーター」：「学生アルバイト」＝中卒22.9%：15.7% [18.7%]、短大・大学卒6.6%：14.7% [16.2%]）。

次にかれらが中退から現在までたどった経緯を見てみよう。彼らの中退理由を見ると、トップ3は「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」28.0% [29.5%]、「校則など校風が合わなかった」27.3% [24.2%]、「人間関係がうまくいかなかった」19.8% [21.2%] である。ここで在学の有無に着目すると、「高校生活以外に興味があることができた」（「非在学フリーター」：「学生アルバイト」＝19.0%：10.6%

[14.5%]）、「早く経済的に自立したかった」（15.5%：7.7% [9.9%]）、「人間関係がうまくいかなかった」（17.2%：29.8% [21.2%]）の3項目に有意な違いが見られた。「非在学フリーター」が前二者において高い点は「正社員」と似た傾向である。

中退時の兄通しについても、在学の有無で差がある。「学生アルバイト」は59.4% [23.6%] が高校再入学を挙げ、アルバイトとして働くつもりだった者は16.7% [35.9%] に過ぎない。一方、「非在学フリーター」では高校再入学は12.1%で、アルバイトとして働くつもりだった者は59.9%だった。ただし「正社員として働くつもりだった」は9.1% [11.1%] に留まっており、正社員を希望してなれなかったというわけではなさそうである。

次に現在働いている理由を見てみよう。「フリーター・パート」全体の傾向としては、もっとも高いのが「遊ぶお金がほしい」51.0% [就業中47.0%]、「働かないと生活できない」47.8% [就業中49.2%] である。在学の有無別に注目すると、「学生アルバイト」では「学校に通うためのお金が必要」が34.6% [就業中15.4%] で、「非在学フリーター」12.8%より顕著に高い。一方、「非在学フリーター」で気になるのは、「自分のやりたい仕事が見つかった」が16.2% [就業中20.4%]（「学生アルバイト」12.5%）と低いことである。同じ「働いている」者でも「正社員」（36.3%）や「家業手伝い」（45.0%）とはかなり異なっている。

また、「学生アルバイト」が学校に通っている理由を

見ると、「高卒の学歴が欲しい」(93.3% [在学中 76.2%]) が高く、「自分の勉強したいことが見つかった」(7.7% [在学中 17.7%]) が低い。現在高校生をしている人たちと同様の傾向である。

人間関係の面では、まず親以外で親しく話せる大人の存在について、「アルバイト・仕事先の上司・先輩」が 55.7% [36.1%] と高い。この項目は、「学生アルバイト」(44.2%) よりも「非在学フリーター」(58.5%) で高くなっている。しかし、「非在学フリーター」の場合、同じ「働いている」カテゴリの「正社員」や「家業手伝い」で高かった項目、たとえば「友だちの保護者」(「非在学フリーター」17.7% : 「学生アルバイト」15.4% [15.1%])、「近所の知人」(8.8% : 5.8% [9.2%]) は高くない。「非在学フリーター」にとって親しく話せる大人は、職場の上司や先輩以外には広がりを持たないといえる。一方、「学生アルバイト」では、「以前の学校(小・中・高)の先生」32.7% [26.6%] (「非在学フリーター」23.6%)、「今の学校の先生」20.2% [9.2%] (同 3.4%) で平均よりは高い。しかし、二つの高校生カテゴリと比較すると、「全日・定時」(それぞれ 39.2%、37.5%) よりも「通信」(27.8%、17.8%) に近い。

友人関係も見てみよう。「フリーター・パート」全体として、辞めた学校や小・中学校からの友人数が10人以上と回答した割合はそれぞれ 27.4% [27.1%]、39.0% [37.5%] で、平均と変わらない。学校を辞めるとき相談した相手を見ると、「高校時代の友人」38.3% [29.4%]、「高校以外の友人」30.9% [25.0%]、「中退経験のある人」24.2% [18.0%] で高くなっていることから、中退前に築いた人間関係は概ね良好であったと考えられる。ここで在学の有無に着目すると、「学生アルバイト」では、現在通っている学校の友人を含むと考えられる「選択肢以外」が 29.8% (「非在学フリーター」19.2% [22.3%]) と高い。一方「非在学フリーター」は、「アルバイト先の友人」が10人以上である割合は 12.5% [7.1%] (「学生アルバイト」8.7%) に過ぎず、「いない」割合が 18.9% [13.1%] (同 28.8%) に上る。かれらにとって現在、新たな友人関係を築く第一の場は就労先であると考えられるが、そこでの友人は決して多くないことがわかる。

最後に3年後の見通しについて見てみよう。「学生アルバイト」では、専門学校 18.6% [10.1%]、大学 15.7% [12.9%] で、合わせて3人に1人が高等教育進学を希望している(「非在学フリーター」はそれぞれ 8.0%、

4.0%)。ただし、この数字は「全日・定時」(53.4%) よりかなり低く、「通信」(38.6%) に近い。代わって、「学生アルバイト」では「正社員として働きたい」が 37.3% [35.9%] と高めになっている(「全日・定時」24.6%、「通信」29.0%)。また、「学生アルバイト」では「まだどうしていいかわからない」が 17.6% [11.5%] (「非在学フリーター」11.8%) に上り、「通信」(22.2%) や「特に何もしていない」(19.6%) に次ぐ高さである。一方、「非在学フリーター」の3年後の見通しでは、「正社員として働きたい」42.0% [35.9%] がもっとも多いが、現在「正社員」の者たち(59.6%) や「家業手伝い」の者たち(51.3%) と比べると低くとどまっている。

以上のことから、現在「フリーター・パート」をしている者たちの自己イメージの背景を考えると次のようになるだろう。全体的な傾向として、中退前に築いた同世代との人間関係は比較的良好である。そのうえで、在学の有無により違いが見られた。多数派である「非在学フリーター」は、将来への不安を感じる割合が低かった。かれらは、高校を辞めたときも将来的にも学校に戻ることを考えておらず、高校を辞めた理由に「高校生活以外に興味があることができた」や「早く経済的に自立したかった」を挙げている点で、「正社員」「家業手伝い」と傾向が似ていた。しかし、今の仕事は自分のやりたいこととは言えず、将来的に正社員になる見通しは高くない。また、親しく話せる大人がいる場所が職場に限られており、その一方で職場に友人関係をあまり築けていないことなどから、「正社員」や「家業手伝い」の人たちほど肯定的な自己イメージが形成されないと考えられる。

一方、在学しながら「フリーター・パート」を選択した人たちは、将来への不安を感じる割合が高い傾向があった。加えて、かれらは高卒学歴がほしいという思いで高校生活に戻っており、勉強したいことがあるわけではない。この点は、現在高校に戻っている中退者たちと傾向を同じくしている。特に、3年後の進路として高等教育への進学希望率がやや低く、「まだどうしていいかわからない」者も一定数見られたこと、学校の教師と親しい関係を築けていない様子であることなどは、このサブカテゴリの3分の2を占め、否定的な自己イメージをもつ「通信」にやや近いといえる。

3-2. 「高校に在学中(全日制・定時制。休学中も含む。)」(120名、男性63名、女性57名)

「全日・定時」に通う者の自己イメージを見ると、自尊心に大きな特徴はないものの、将来への不安を感じている割合が男女とも高い点が目立つ。

かれらの大きな特徴は、1年時で中退した者の割合が高いことである。中退学年は1年が73.3% [44.2%]と12カテゴリの中でもっとも高くなっている。かれらはまた、中退時には高校再入学の見通しを持っていた。「別の高校に再入学するつもりだった」者は70.2% [23.6%]であり、かなり高い割合である。再入学の理由として、「高卒の学歴が欲しい」が85.8% [在学中76.2%]と最も高い。

では、かれらはどのような理由から中退に至ったのだろうか。中退理由は、多い順に「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」(33.3% [29.5%])、「人間関係がうまくいかなかった」(32.5% [21.2%])、「校則など校風があわなかった」(32.5% [24.2%])となっている。このうち全体平均と比較して高い割合を示しているのは後二者である。このことから、かれらが以前の学校に定着していなかった様子がうかがえる。また、「高校を辞めたことを後悔していますか」という設問に「いいえ」と回答した割合が57.5% [46.9%]と、全体平均よりも高くなっており、中退前の学校に対する思い入れは薄い様子がわかる。

では現在の人間関係はどうだろうか。親しく話せる大人についてみると、「今の学校の先生」は37.5% [9.2%]で、同じ高校生である「通信」(17.8%)より高くなっている。では友人関係はどうだろうか。本調査は質問項目に現在通っている学校の友人について尋ねているものがなかったため、「選択肢以外」の友人の中に含まれている可能性がある。「選択肢以外」の回答傾向を見ると、10人以上と答えた割合が31.7% [22.3%]となっており、やはり全体平均よりかなり高い割合となっている。とはいえ、小・中学校からの友人が10人以上いる割合は45.0% [37.5%]であり、依然として中学校までの友人関係がかれらの中でもっとも広がっている。

現在必要としている支援を見ると、「進路や生活などについて何でも相談できる施設」53.4% [48.6%]、「進路や生活などについて何でも相談できる人」72.5% [66.6%]、「仲間と出会い、一緒に活動できる施設」62.5% [55.9%]と、いずれも全体平均を上回っている。かれらは基本的に毎日学校に通っているが、相談施設・相手や仲間と出会える場を求めているということは、現在の学校が生活する場として馴染めていな

いとも読み取れる。

以上のような再入学先への馴染めなさには、再入学後の学年が関係しているのではないだろうか。全日制・定時制高校に再入学する場合、一般的には中退前よりも下の学年に再入学している者が多い。同年齢の者たちが中心である人間関係の中に異年齢者として入学するということは、それだけでも高校生活に定着していくことが難しいと予想され、そのことが学校への馴染めなさにつながっているのかもしれない。

3年後の進路希望については、他カテゴリと比較して進学志向が強い傾向がうかがえる。「専門学校に入学したい」は28.0% [10.1%]、「大学に進学したい」は25.4% [12.9%]である。ただし、自己イメージに関する項目の中で「将来の目標がある」が全体平均と変わらない(65.6% [61.7%])のは、進学が将来の目標というよりは当面の目標であるにすぎないためではないだろうか。

以上をまとめると、全日制・定時制高校に通う者たちは中退以前の学校に定着できずに中退しており、そのことを後悔している様子は見られなかった。再入学後の現在では、今の学校での人間関係はそれなりに築けているようであるが、友人関係については依然として中学校以前の友人が中心となっている。相談施設・相談相手が必要としていることから、現在の学校に対して、生活する場としては馴染めなさを感じているのかもしれない。現在の学校への馴染めなさは中退前よりも下の学年に入学していることが関係していると思われるが、もしそうであれば、再入学した高校は多くの者にとって高校生活をやり直す場となりえていないのではないかと考えられる。

3-3. 大学に在学中(39名、男性19名、女性19名、性別無回答1名)

現在大学生である者の自己イメージを見ると、将来への不安を感じている割合は74.4% [69.6%]で平均とあまり変わらない。自尊心については、人間関係面での自信が全般的に低く、自分自身への自信は高い。このような自己イメージをもつ大学生たちにはどのような特徴が見られるだろうか。

このカテゴリのもっとも大きな特徴は、普通科を中退した割合の高さと親学歴の高さである。まず中退した学科を見ると、普通科が94.9% [55.8%]と全体平均よりも顕著に高い。また親の学歴を見ると、短大・大学卒の割合が父親で71.8% [16.2%]、母親で48.7%

[15.1%]と高くなっている。さらに、高校中退直後は「大学に進学するつもりだった」者が顕著に多い(78.9% [7.0%])。かれらにとって大学進学は、中退前から自明視されていたものと考えられる。

次に中退時の状況について見てみよう。まず中退理由で多かったのは、第一に「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」36.8% [29.5%]、第二に「人間関係がうまくいかなかった」23.1% [21.2%]、第三に「健康上の理由」20.5% [9.1%]である。このうち、「健康上の理由」だけが全体平均よりも有意に高かった。なお、このカテゴリにおいて「健康上の理由」を挙げた者のうち、「人間関係がうまくいかなかった」も重複して選択した者は1名にとどまった。1章では、中退理由に健康問題を挙げたが人間関係上の問題を挙げなかった者たちに神経症的な不登校の傾向があったことが示唆されていたが、このカテゴリで健康問題を中退理由に挙げた者もまた、不登校経験を経て中退しているのではないかと推測される。

また、中退時の人間関係を見ると、中退することについて「相談した」割合は89.7% [77.9%]で、全体平均よりやや多い。中退時に相談した者のうち、その相手が「高校の先生」である割合は65.7% [51.3%]と平均よりやや多い。しかし、「高校時代の友人」(11.4% [29.4%])や「高校以外の友人」(11.4% [25.0%])を挙げた割合は少ない傾向にある。

次に、現在の状況について大学進学理由と現在の人間関係について見ていきたい。進学理由は中退時の消極的な印象と異なり、かなり積極的である。進学したきっかけとしてもっとも多いのは、「自分の勉強したいことが見つかった」で66.7% [在学中17.7%]であった。また、「現在または将来の仕事に必要」59.0% [在学中43.6%]、「就職に役立つ資格を取りたい」38.5% [在学中21.3%]も中退者平均より高い。進学理由を見る限りでは、大学生になった現在、自分の勉強したいことや将来の仕事に関して学べるような環境が得られた者が多いのではないだろうか。

しかし、現在の友人関係は広く活発なものとはいえない。「あなたには、親しい友だちがどれくらいいますか」という設問で、親しい友人が「いない」または「1～3人」と答えた割合が高い項目を見ると、「辞めた学校内に」56.4% [41.4%]、「小・中学校からの」43.6% [28.8%]、「選択肢以外」46.1% [39.1%]となっている。「全日・定時」カテゴリで述べたように、「選択肢以外」の友人として現在通っている学校の友

人を挙げると推測するならば、大学での友人も少ない傾向にあると思われる。また、現在アルバイトをしている者が39名中1名であり、アルバイト先で友人関係を広げる機会も持たないことがわかる。

最後に、3年後の見通しでは、「その他」(43.6% [9.9%])がもっとも多く、自由記述欄には現在通っている大学に在学中であるとの回答が多かった。現在のかれらの年齢は18～19歳が84.6% [26.2%]となっていることから、入学1年日の者が多く、3年後は在学中である者がほとんどである。

このように現在「大学」に通っている者は、健康問題に起因する中退理由を挙げる割合が高く、不登校の経験者が含まれることが示唆された。中退後は大学に進学して、自分が勉強したいこと、将来就きたい仕事に関連したことを学びたいと考えていた。現在は大学に入学したばかりで、やりたいことを学べる環境にある者が多いだろう。しかし、友人の数は少ない傾向にあり、人間関係が狭い印象がある。こうした点が人間関係面での自尊感情を低めていると考えられる。

3-4. 「専門学校に在学中(夜間部・通信制なども含む。休学中も含む。)(21名、男性13名、女性8名)

現在専門学校に通っている者の自己イメージの特徴は、「将来の目標がある」が90.5% [61.7%]と高いことである。母数が21名と少ないため、統計的に有意な差を示すことが難しいが、以下では将来の目標に関連するような質問項目について論じていきたい。

進学理由を見ると、仕事や就職についての積極的な回答傾向が見られる。進学理由では「自分の勉強したいことが見つかった」(76.2% [在学中17.7%])の割合が特に高く、他に「現在または将来の仕事に必要」(61.9% [在学中43.6%])、「就職に役立つ資格を取りたい」(57.1% [在学中21.3%])の割合も全体平均より高い。このことから、進学時ですでに仕事や就職に強い関心を持っていたといえるだろう。

仕事や就職に対する関心が現在も高いことは、職業訓練を受ける方法を認知している割合¹¹⁾が38.1% [24.7%]とやや高いことや、「会社などでの職場実習の機会」を必要と答えた割合が76.2% [56.3%])と高いことからわかる。そして、現在かれらが専門学校生であることから、職業資格がかれらの仕事や就職に対する関心のある程度現実的なものになっていると考えられる。職業に関わる資格で取りたいものが「ある」と答えた割合が76.2% [37.5%]と非常に高く、

具体的に取りたい資格を自由回答から見ると、国家資格が半数である¹²。そして、「その資格をとることができると思えますか」と尋ねた質問については、「はい(既に取得済み又は取得中を含む)」と答えた者が 93.8% [54.8%] となっており、かなり高い割合である。

かれらが将来の目標を持っているのは、仕事や就職への強い関心があり、専門学校で取得する職業資格を通して正社員になることを志向しているためであるといえるだろう。このように将来の目標やその実現の見通しが具体的にイメージできることが、他の在学者たちとは異なっていると考えられる。

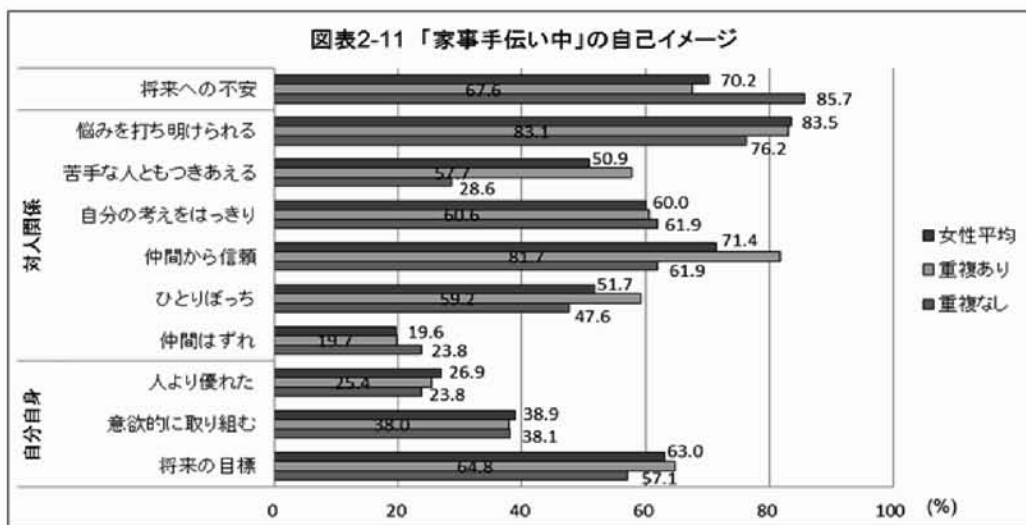
3-5. 「家事・家事手伝いをしている」(129名、男36名、女92名、性別無回答1名)

現在していることに「家事手伝い」と回答した者は、71.3%が女性である。以下では女性に限って述べる。また、分析にあたって考慮したいのは重複回答と自己イメージとの関連である。女性92名のうち71名が「現在していること」の設問で家事手伝い以外の選択肢を重複して回答している(以下「重複あり」)。もっとも多いのは、フリーター・パート(27名¹³)で、ほぼ同じ割合で「仕事を探している」者(26名¹⁴)が続く。また、妊娠・育児中の者も多い(20名)。重複のある71名と重複のない21名の自己イメージを比べると(図表2-11)、将来への不安を感じている者は、「重複あり」:「重複なし」の順に67.6%:85.7% [女70.2%]であった。「重複なし」は不安感が高い傾向にある。また対人関係における自信について、「重複あり」では「仲間から信頼されている」がやや高い一方、「重複なし」では「嫌いな人・苦手な人も、うまくつきあえる」で低いなど、全般的にあまり高いとは言えない。

では、「家事手伝い」をしている者たちにはどのような特徴が見られるだろうか。「重複あり」「重複なし」を意識しながら検討していこう。まず、世帯構成を見てみると、「重複なし」では全員が結婚も同棲もしていないが、「重複あり」では独立世帯が13名いた。親と同居している者のうち、ひとり親世帯の比率を見ると、「重複なし」で52.4% [女34.9%]と高い(「重複あり」21.1%)。

次に、中退時の様子を見ていこう。中退するにあたって、「重複あり」「重複なし」とともに多くの者が誰かに相談しているが(91.5%:81.0% [女84.5%])、その相手について傾向が異なっていた。まず、「重複あり」の相談相手はそれぞれ女性平均と変わらなかった。これに対して「重複なし」では、「高校時代の友人」11.8% [女35.6%]、「高校以外の友人」5.9% [女29.3%]、「中退経験のある人」5.9% [女20.6%]、「先輩」0.0% [女11.9%]といずれも低くなっている。このことから、「重複あり」の多くは中退時に友人を含めた幅広い相手に一定程度相談できていたのに対し、「重複なし」の多くは中退時において周りの友人から孤立していたことが想像できる。

この点は、現在の交友関係にも表れている。友人関係について、「いない」と答えた割合を「重複あり」:「重複なし」で比較すると、「辞めた学校内に」(11.3%:28.6% [女10.1%])、「小・中学校からの」



「(7.0%:19.0% [女 4.9%])、「選択肢以外」(19.7%:42.9% [女 24.6%])と、いずれも「重複なし」が高い傾向を示している。また親しく話せる大人についても、「重複なし」では「いない」者の割合が高い傾向にあり(14.1%:33.3% [女 17.4%])、「以前の学校(小・中・高)の先生」と親しいと答えたのは21名中1名にとどまった(29.6%:4.8% [女 26.9%])。こうして見てくると、「重複なし」では、これまでの学校生活で出会った友人や教師たちとの間で孤立し、つながりが途絶えがちになっていることがうかがえる。

では彼女たちは、中退直後の見通しをどのように描いていたのだろうか。重複回答の有無にかかわらず、もっとも多かった回答は「アルバイトとして働くつもりだった」である(40.3%:42.9% [女 42.9%])。しかし中退後の苦勞を見たとき、「重複なし」では「仕事をしていく自信がもてない」(22.5%:61.9% [女 16.9%])で高く、就労しようとしても容易にいかなかったことがうかがえる。また、彼女たちは進学に関しても苦勞が多く、「別の高校や専門学校などに進学・編入するための必要なお金がない」(15.5%:28.6% [女 15.5%])、「地元に進学・編入先がない」(2.8%:14.3% [女 4.7%])では「重複なし」に限って高い値が並んでいる。

最後に、3年後の進路希望を母数の多い「重複あり」についてのみ見てみると、中退直後では「正社員として働くつもりだった」、「専門学校に進学するつもりだった」がそれぞれ6名(9.0% [女 4.9%])、2名(3.0% [女 4.1%])と多くはなかったが、現在は「正社員として働きたい」、「専門学校に入学したい」がそれぞれ21名(30.0% [女 29.8%])、13名(18.6% [女 11.8%])へと、全体平均に沿う形で増えている。つまり「重複あり」のなかでは、現状と比べてより安定した雇用形態や上級の学校など、前向きな見通しを抱けている層がいる。このことが、「重複あり」の将来への不安感を女性平均程度に留まらせているのかもしれない。

以上のように見てくると、現在「家事手伝い」をしていると回答した者は、「家事手伝い」以外に重複回答をしている者とそうでない者で、自己イメージが異なるとともに、過去・現在の人間関係などにも大きな差があった。「重複あり」は、「家事手伝い」以外になんらかの社会的な活動をおこなっているが、「重複なし」は多くの場合自宅で過ごす時間が多いと考えられ、活動範囲や人間関係が狭く、不活発状態にしていることをうか

がわせた。「重複なし」はまた、中退以前の学校生活においても孤立傾向が強かった。このようなことが「重複なし」の不安感の高さや対人関係における自信の低さといった傾向と結びついているのではないだろうか。なお、こうした「重複なし」の傾向は、後に触れる「特に何もしていない」カテゴリと類似するところが多いことも重要な特徴である。

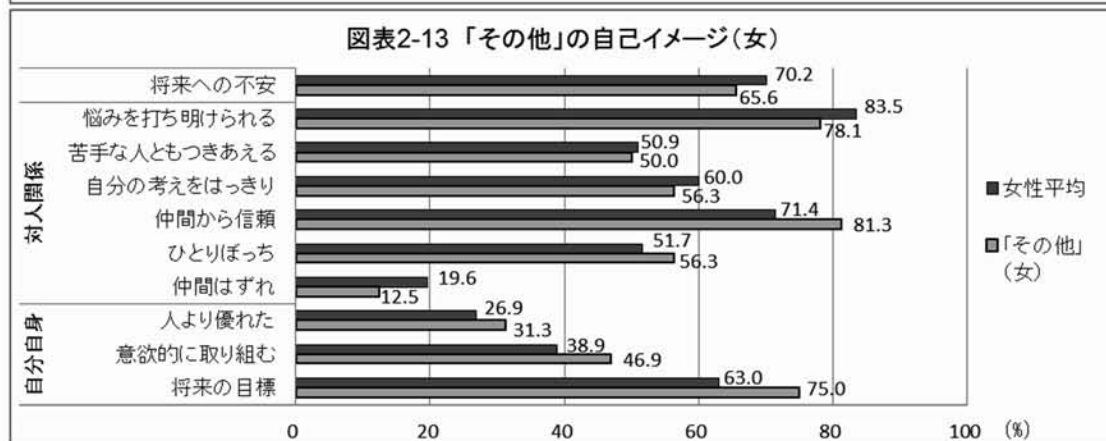
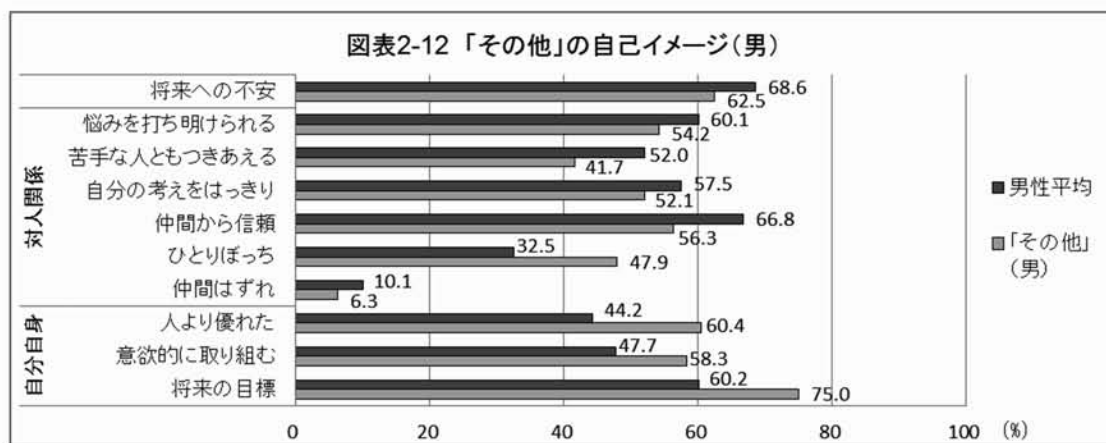
3-6. 「その他」(82名、男性48名、女性32名、性別無回答2名)

現在の状況で「その他」を選んだ者は、6割を男性が占める。はじめに、「その他」と回答した者たちが具体的に何をしているのか、自由記述から整理しておこう。内訳としてもっとも多いのが、受験勉強をしている者(24名、このうち「大学」と明記している者18名)あるいは予備校に通っている者(14名)であり、46.3%(計38名)を占める。次に多いのが高卒認定試験の勉強中であり、12.2%(10名)である。つまり大学等の受験準備中の者がおよそ6割を占める¹⁵。

このような現状にある「その他」カテゴリの者たちの自己イメージを見ると、全体としては中程度のグループに位置しているものの、3つの側面ごと、あるいは性別ごとに違いがみられた(図表2-12、2-13)。まず、将来への不安を感じている割合は、男女ともに全体平均と同程度であった。一方、自分自身への自信は平均並か平均よりやや高く、特に男性で高い傾向が見られた。また、人間関係面における自信では、総じて女性が女性平均と同程度であるのに対して、男性は「仲間から信頼されている」「自分がひとりぼっちだと感じる」の項目で男性平均より低かった。このように「その他」を選んだ者たちは、将来への不安は平均程度に感じつつも、自分自身への自信は比較的高い。とりわけ男性においては自分自身への自信は高く人間関係面での自信は低いという傾向が読み取れる。

では、「その他」を選んだ者たちにはどのような特徴が見られるだろうか。まず、中退した学科を見ると、普通科が大学生カテゴリに次いで多い(73.2% [55.8%])。また親学歴では両親ともに短大・大学卒が多く、父親41.5% [16.2%]、母親39.0% [15.1%]と高学歴傾向が顕著である。

次に中退の理由を見ると、もっとも多かったのは「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」(31.7% [29.5%])であるが、2番目の「健康上の理由」(28.0



% [9.1%]) は 12 カテゴリ中でもっとも高い。このカテゴリでは、中退時の相談相手等の自由記述において、精神面での健康問題を抱えていると推測される記述が多く見られた¹⁶。一方、中退理由に「人間関係がうまくいかなかった」を挙げた割合は 14.6% [21.2%] で全体平均よりやや少ない。ここで、「健康上の理由」に「とても当てはまる」を選んだ者 23 名のうち「人間関係がうまくいかなかった」も「とても当てはまる」と回答したのは 4 名にとどまった。このように見ると、大学生同様、1 章でみた「人間関係のもつれを伴わない健康問題グループ」との重なりが感じられる。

続いて、中退時および現在においてどのような展望をもっているのかを見よう。中退時の見通しについては「大学に進学するつもりだった」と答えた者が顕著に多く (48.8% [7.0%])、「アルバイトとして働くつもりだった」は少なくなっている (12.5% [35.9%])。現在の 3 年後の展望においてもまた、「大学に進学したい」と考えている者が多く (63.0% [12.9%])、その一方で「正社員として働きたい」は少ない (7.4%

[35.9%])。かれらの多くは中退後から一貫して大学進学という進路希望を強く抱えてきた者たちである。

なお、高校中退への後悔があると答えた者は大学生に次いで低い (14.6% [23.7%])。その一方で高卒認定試験を知っていると答えた者が 85.4% [64.2%] と多かった。かれらの多くは、高校を辞めてもなお高卒認定試験などを経て大学進学を目指すことのできる状態にある。そのことが高校を辞めたことそれ自体への後悔を下げ、大学進学という現在のかれらの見通しを支えているのだと思われる。

では、かれらはどのような人間関係を形成しているのだろうか。高校中退時に誰かに「相談した」者は 85.4% [77.9%] で、相談相手は「親」が 95.7% [90.0%] と全体平均と同程度だが、「高校の先生」は 62.9% [51.3%] とやや多い。後者の点については、かれらが親しく話せる大人として「以前の学校 (小・中・高) の先生」を挙げた割合 31.7% [26.6%] と高く、現在に至るまでのつながりとなっている様子である。また、このカテゴリの特徴として、「塾や予備校の先生」と親

しいと答えた者が28.0% [3.8%]と顕著に多かった。現在かかわっている教師とのつながりも一定存在することがうかがえる。一方同輩関係において、受験準備中が多い現状を反映して、ほかではあまり見られない塾や予備校での友人関係が一定見られることはこのカテゴリの特徴である¹⁷。また、辞めた学校にいる親しい友人の数も全体平均と同程度であった。しかし、高校中退時に相談を友人にした者は、「高校時代の友人」20.0% [29.4%]、「高校以外の友人」15.7% [25.0%]と少ない傾向が見られた。親しい友人とはいいながらも、中退時に相談できるほどの関係ではなかったことが読み取れる。

以上より、神経症的不登校タイプの者が一定含まれると推測される「その他」カテゴリの者たちの多くは、高校を辞めてもなお大学進学を目指すことのできる状態にある。つまり、大学進学という一貫した目標が、自分自身に対する自信を支えているのだろう。また、かれらと家庭や学校、予備校における人とのつながりは中退前も後も一定保たれてはいるものの、中退時に友人に相談しなかったことに象徴されるかれらの友人関係のあり方は、かれらの（特に男性において）人間関係面における自信がやや低い傾向にあることとかわわっていると思われる。

3-7 「仕事を探している」(160名、男性75名、女性85名)

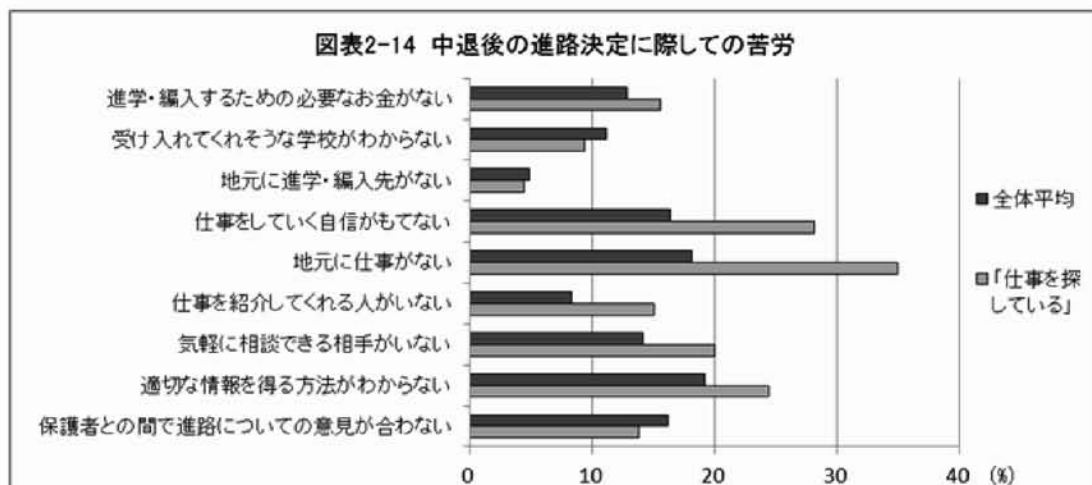
現在「仕事を探している」者たちの自己イメージは、カテゴリとしては中程度に位置づく。将来への不安を感じる割合がやや高い(75.1% [69.6%])ほかは、全体平均と変わらなかった。では、現在「仕事を探して

いる」のはどのような者たちなのだろうか。

このカテゴリについてまず断っておかねばならないのは、「仕事を探している」のみ選択している者は53名(33.1%)にとどまり、重複回答者が多いことである。重複回答者のなかには、現在就業していて転職先を探している者(46名¹⁸)と、現在就業しておらず仕事を探している者(61名)の両方が含まれる。前者の内訳は、「フリーター・パート」35名、「家業手伝い」7名、「正社員」5名¹⁹、後者は「家業手伝い」35名、「全日・定時」・「通信」・「専門学校」18名、「特に何もしていない」8名、「妊娠・育児中」6名、「その他」4名である²⁰。このように「仕事を探している」者は、現在多様な活動と平行して求職活動をおこなっている人々であり、求職の動機も多様であることを押えておく必要がある。

このように多様な人々の集まりではあるが、いくつかの共通点を見出すことができる。まず特筆すべきは、中退後の経緯における苦勞である。図表2-14を見ると、かれらは中退後、とりわけ就労をめぐる苦勞や困難を抱えていたことがわかる。このことと表裏の関係にあると思われるのが、中退直後の進路の見通しについてである。このカテゴリでは、高校を辞めた時「アルバイトとして働くつもりだった」が高く(47.7% [35.9%])、12カテゴリ中では「フリーター・パート」(51.4%)に次いで高い。一方、「正社員として働くつもりだった」は全体平均と同じであった(11.1% [11.1%])。職がない、仕事をしていく自信もない、支援してくれる人もいない、などの様々な要因から、中退直後は正社員に就職するハードルが高いと感ぜられていたと推測される。

図表2-14 中退後の進路決定に際しての苦勞



このハードルは、現在に至っても克服されたとは言いがたいように思われる。まず、必要と感じる社会サービスを見ると、「会社などでの職場実習の機会」68.1% [56.3%]、「進路や生活などについて何でも相談できる施設」56.3% [48.6%]で高く、就労に関する支援や相談できる場所未だ十分でない様子が見て取れる。また、現在の人間関係の特徴を見ると、保護者以外に親しく話せる大人が「いない」と答えた割合が26.3% [19.1%]と高くなっており、就労等に関して身近に相談できる大人がいない様子が見えてくる。こうしたことを反映してか、3年後の見通しにおいて「正社員として働きたい」の割合は36.5% [35.9%]と最も多くなっているものの、全体平均と比べれば決して高くはない。一方、「アルバイトとして働きたい」の割合は18.9% [9.9%]で、中退直後よりは低くなってはいるが、全体平均より高い。様々な要因から、アルバイトとしての就労の見通しを余儀なくされているといえるかもしれない。

以上のことから「仕事を探している」者は、全般的に高校中退後の進路決定の際に苦勞が多く、特に仕事に就けない諸事情を抱えていた。現在に至っても、保護者以外に親しく話せる大人がいない者が多く、支援を求めている様子が顕著であった。仕事を探すことに苦勞を感じ、相談できるような大人も少ないことが、正社員として働く展望をかれらに持ちにくくさせ、当面の間はアルバイトとして就労する展望につながっていると考えられる。

4. 自己イメージが否定的なグループ

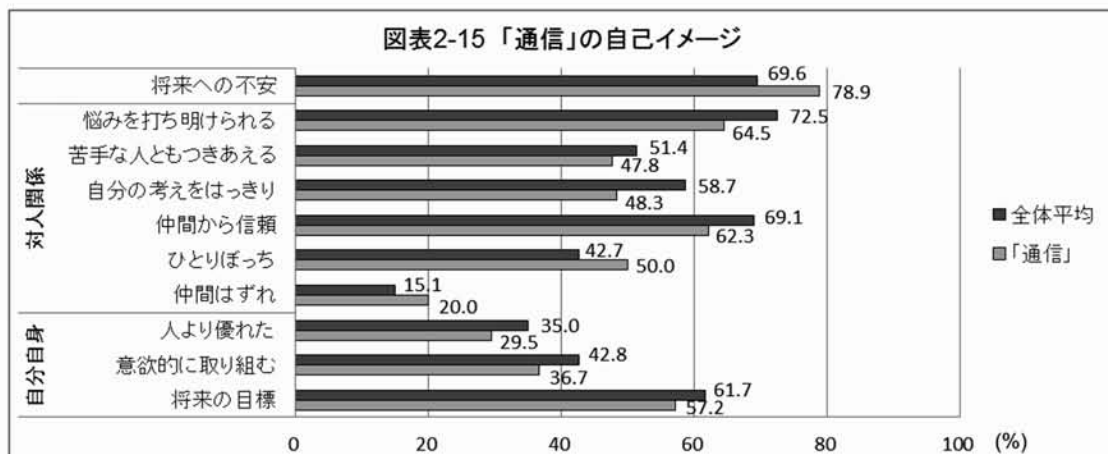
4-1 「高校に在学中（通信制。休学中も含む。）」（180名、男性81名、女性97名、性別無回答2名）

現在通信制高校に在学している者たちの自己イメージは、全般的に否定的である（図表2-15）。将来への不安を感じている割合が高く、自尊心は人間関係面での自信も自分自身に対しての自信も低い。このような自己イメージをもつ通信制高校在学者にはどのような特徴が見られるだろうか。同じ高校再入学者のカテゴリである「全日・定時」との相違を意識しながら以下検討しよう。

まず中退時の学年を見ると、1年49.4% [44.2%]、2年38.3% [41.0%]、3年11.1% [13.1%]、4年0.6% [0.8%]となっている。「全日・定時」では1年時に辞めた割合が73.3%であることと比較すると、「通信」は中退学年がかなり高い傾向にある。このことは、中退学年が高くなると全日制・定時制高校への再入学が困難となることを示唆している。なお、再入学の理由としては、「高卒の学歴が欲しい」が89.4% [在学中76.2%]で、「全日・定時」（85.8%）とは大きく変わらない。

「通信」は、仕事をしている者の多さという点でも「全日・定時」と大きく異なる。「通信」では、「正社員」・「家業手伝い」・「フリーター・パート」との重複回答が42.8%²⁾に上る。これは、「全日・定時」の28.3%よりかなり多くなっている。また、「仕事を探している」も「全日・定時」の4.2%よりもかなり多い11.7% [13.6%]となっている。

では、現在の人間関係はどうだろうか。「通信」の場合、友人関係や親しく話せる大人が少ない傾向が見られる。現在の学校の友人を主に含むと考えられる「選



選抜以外」の回答傾向を見ると、「いない」または「1～3人」と答えた割合が46.7% [39.1%]と高い。他の項目における「いない」または「1～3人」の割合を見ると、「辞めた学校内に」49.4% [41.4%]、「小・中学校からの」で35.6% [28.8%]と高くなっている。また、「アルバイト先には」36.6% [35.7%]で平均程度にとどまっている。さらに、保護者以外に親しく話ができる大人について見ると、「いない」と答えた割合が27.8% [19.1%]で、12カテゴリ中「特に何もしていない」に次いで多い。親しく話せる大人として挙げられた項目のうち、「今の学校の先生」のみが17.8% [9.2%]で全体平均よりも高いが、「全日・定時」では37.5%となっていることを考慮すると、むしろ低いといえる。このように、友人関係や親しく話せる大人といった観点から見て、かれらは人間関係をあまり形成できていないといえるだろう。

かれらが人間関係に関して欠乏感を抱いていることは、必要な社会サービスについての回答傾向からもわかる。「進路や生活などについて何でも相談できる人」75.6% [66.6%]、「仲間と出合え、一緒に活動できる施設」61.1% [55.9%]、「進路や生活などについて何でも相談できる施設」56.1% [48.6%]がいずれも平均と同程度が高い割合となっている。通信制高校では登校回数等も少ないことが予想され、今の学校では相談施設・相手や仲間といえる存在が得られていないのではないかと思われる。

3年後の進路については、もっとも多い順から「正社員として働きたい」(29.0% [35.9%])、「大学に進学したい」(22.7% [12.9%])、「まだどうしていいかわからない」(22.2% [11.5%])となっている。全体平均と比較して特徴的なのは、「まだどうしていいかわからない」が12カテゴリでもっとも高くなっていることである。

これまで見てきたように、かれらは特に学校内で友人関係が形成されている様子が見られず、また親しく話せる大人も少ないことから、人間関係が狭い傾向にある。さらに、通信制高校という場所の特質として、登校回数が少なく、進路をめぐって教師や学校の雰囲気そのものから受ける影響は弱いだろう。そのため、かれらのうちの少なくない者たちに進路の見通しを持ちにくくさせていると考えられる。以上のことが、かれらの否定的な自己イメージの形成にかかわっているのではないだろうか。

4-2 「特に何もしていない」(47名、男性23名、女性23名、性別不明1名)

現在「特に何もしていない」と回答した者は、現在していることでの重複傾向はやや少なく、同時に職探し中の者が8名(17.0%)、家事手伝い中の者が3名(6.4%)のみだった。彼らは、男女ともに共通して自尊感情が低かった。ただし、将来への不安を感じている割合は平均程度であった。このような自己イメージを持つ「特に何もしていない」人たちにはどのような特徴があるのだろうか。

まず注目すべき点は、中退してから8ヶ月以内の者たちの割合(42.6% [29.9%])が、12カテゴリの中で「その他」(45.1%)に次いで高いという点である。中退直後ということで、次の進路に向けた過渡期にある者や、中退という体験をめぐって混乱の最中にある者が含まれている可能性が高い。

では、かれらが中退に至った理由を見てみよう。このカテゴリでもっとも多かった理由は、第一に「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」39.1% [29.5%]、第二に「勉強が分からなかった」23.4% [14.9%]、第三に「人間関係がうまくいかなかった」19.1% [21.2%]、そして健康上の理由(10.6% [9.1%])であった。

また、中退時の様子を見ると、誰にも相談しなかった者が多い(36.2% [21.9%])。相談した者のなかで、親に相談した割合は90.0% [90.0%]、「高校の先生」には50.0% [51.3%]と、平均と差はなかったが、「高校時代の友人」に相談したのは16.7% [29.4%]、「高校以外の友人」は13.3% [25.0%]と少ない傾向が見られた。つまり、現在「特に何もしていない」者は、3人に1人が誰にも相談せず高校を辞めており、相談したとしてもその相手が友人であることは少なかったことが読み取れる。

続いて、かれらの中退直後の見通しを見てみよう。このカテゴリに特徴的なのは「どうしていいかわからなかった」を選んだ者が21.3% [8.9%]と、12カテゴリ中もっとも多い点である。またカテゴリ内で最大であったのは「アルバイトとして働くつもりだった」(44.7% [35.9%])である。中退をしたあとにどのように進んでいくか迷っていた者が他のカテゴリより顕著に多く、他方で半数近くはアルバイトとして働くことを希望していた。

では、その後かれらはどのように現状へと至っているのだろうか。まず、中退後苦勞してきたこととし

でもっとも多かったのは「仕事をしていく自信がもてない」であり、他のカテゴリより顕著に多い(38.3% [16.4%])。また「仕事を紹介してくれる人がいない」も他のカテゴリより顕著に多かった(21.3% [8.3%])。先述したように半数の者がアルバイトを希望していたにもかかわらず、就労への困難を多く抱えていたようである。次に、現在特に何もしていない理由を見てみよう。カテゴリ全体では「これからどうすればいいかわからない」がもっとも多く(25.5%)、次に「もう少し何もせずにゆっくり休みたい」が続く(23.4%)。ただし、「これからどうすればいいかわからない」を選んだ者のうち75.0%は中退してから9ヶ月以上の者である。先に見たかれらの中退時の展望と、中退後に様々な苦勞を感じてきた者の多さを踏まえれば、それら苦勞に直面する中で次の進路に向けた動きをもちにくく、「何もしていない」という現状に至っている者が多いと考えられよう。一方で「もう少し何もせずにゆっくり休みたい」を選んだ者のうち72.7%は中退してから8ヶ月以内の者であった。ここからは中退前の学校生活でかなり疲弊していることをうかがうことができる。なお中退理由の自由記述欄には、「行こうと努力したがしんどくていけなかった」との記述がみられた。

次に、現在彼らがどのような生活を送っているのかを交友関係から探ってみよう。まず、「辞めた学校内に」に親しい友だちが「いない」または「1~3人」とする割合が53.2% [41.4%]と高い。さらに「小・中学校からの」で46.8% [28.8%]、「選択肢以外」で57.5% [39.1%]が「いない」または「1~3人」と回答しており、友人が少ない傾向が見られる。アルバイト先での友人関係を尋ねた設問では「アルバイトをしていない」との回答が非常に多く(73.9% [38.3%])、そもそも友人形成の場となっていない。以上からは、中退時のみならず現在においても友人関係が狭くなっている様子がうかがえる。さらに親以外に親しく話ができる大人との関係を見てみると、「いない」人の割合の高さが12カテゴリ中で突出している(38.3% [19.1%])。例え「親戚」(12.8% [23.8%])といった身近な大人でも、他カテゴリと比べてやや少ない傾向が見られた。働いているわけでも就学しているわけでもないことから、日常の活動範囲も狭くなりがちであることが想像でき、そのことが、中退後の現在の大人・友人等の人間関係の希薄さにつながっていると思われる。

とはいえ、かれらが求めている支援をみても、たとえば「進路や生活などについて何でも相談できる施設」を必要とする割合は40.4% [48.5%]にとどまるなど、あまり強くは求めてはいない。将来に対して平均程度に不安を感じていることを踏まえれば、不安はあるもののそれが漠然としていたり言葉にできなかったりするために、誰かに相談するというかたちでは表れていないのかもしれない。また、「生活や就学のための経済的補助」を必要と答えた割合も同様に低く(55.8% [63.1%])、強くは求めていないようである。しかしこれをもってかれらの家庭が経済的に豊かであると言い切るのは妥当ではない。保護者の学歴をみると、全体平均との差はあまりない。さらに「生活保護を受けている」割合は12カテゴリ中でもっとも高かった(8.5% [3.8%])。よって、階層的に高いわけではなく、経済的に豊かではない者も多い。にもかかわらず経済的支援を必要としていないのは、日々の不活発な生活のなかで消費活動をおこなう機会が少ないということに起因するのかもしれない。

3年後の進路については、「正社員として働きたい」と考えている人が23.9% [35.9%]でもっとも多いものの、平均よりはやや低い。これに対し、次の「まだどうしていいかわからない」は19.6% [11.5%]と、12カテゴリのなかで「通信」に次いで多い。

以上の検討をまとめてみよう。現在特に何もしていない人たちが抱く将来への不安は平均程度だが、自尊感情が低い傾向にあった。その背景を探ると、中退時には誰にも相談しなかったり相談できる友人などがないなかで中退している者が多かった。中退直後「どうしていいかわからなかった」、また中退後8ヶ月以内の者では「もう少し何もせずにゆっくり休みたい」が多くを占めることなどからは、何らかのしんどさを抱えながらの中退が多かったと考えられる。さらに現在も大人・友人を含めた人間関係が希薄で、活動範囲の狭さなどと相まって不活発な状態を続けている者が多い。アルバイト就労などを試みようとした者も半数程度はいるものの、うまくいっていない。将来展望も明確にはもてていない者が多い。これらは自尊感情の低さと相互的な因果関係を構成しているのではなかろうか。こうした状態はいわゆる「ひきこもり」像と重なるところも多いが、親学歴に見る家庭階層からは、中間層以上と思われる者は少ない。中退後経過期間が比較的短い者が多いことから、まだその先を模索中という者たちも少なくないだろうが、人間関係などの狭

きは模索を豊かにおこなうことへの制約となる可能性が強く、放置されれば不活発状態から容易に抜け出せなくなる可能性も秘めているのではないだろうか。

5. 小括

以上のように本章では、「現在していること」として挙げられた12のカテゴリに沿って、各カテゴリの中退経験者たちがもつ自己イメージの傾向を把握するとともに、その傾向がそのカテゴリを選択した人々の特徴とどのように結びついているのかを検討してきた。本章冒頭で指摘したように、高校中退者が「現在していること」とは、一般的な若者が取りうる選択肢の分布の仕方と著しく異なっている。そのことに留意した上で、以下ではまず、自己イメージに即して分類した三つのグループごとに特徴を整理しよう。

自己イメージが相対的に肯定的であるグループには、現在「正社員」「家業手伝い」「妊娠・育児中」であると回答した中退者が分類された。この三つのカテゴリは、「正社員」「家業手伝い」の8割が男性、「妊娠・育児中」のほぼ全員が女性というように、従来の性分業に即した性別比率であり、このカテゴリへの参入の機会が必ずしも両性に平等に開かれているとはいえない。とはいえかれらは概ね、将来への不安を感じる割合が相対的に低く、人間関係面でも自分に対する自信という面でも自尊感情が高かった。

このような自己イメージの背景を探っていくと、三つのカテゴリともまず人間関係の豊かさを指摘できる。3カテゴリとも友人が多く、広範囲にわたっている。親以外に親しく話せる大人が「いない」割合は低く、ほとんどの者が誰かしらを挙げている。とくに「現在していること」をおこなっている当の場、たとえば「正社員」や「家業手伝い」は職場や地域の大人たち、「妊娠・育児中」は子育てを通した身の回りの大人たちと関係が形成されていることが読み取れた。ただし、妊娠を理由に中退した女性たちについてはパートナーとの同居率が低く、そのことが彼女たちの将来への不安をやや押し上げている感があった。

また、三つのカテゴリに見出せるもうひとつの傾向は、かれらの3年後の希望進路が、目下取り組んでいる仕事や子育ての延長線上に位置づいていることである。典型的なのは「正社員」と「妊娠・育児中」である。「正社員」の男性たちは、引き続き正社員として働くことを見通しているだけでなく、取得を希望する資

格として現在の仕事に直結するとみられるものを多くの者が挙げていた。また「妊娠・育児中」の女性たちは、子育てや子どもの成長を念頭に置きながら、育児への専念あるいは就労や通学と子育ての両立といった3年後の見通しを形成していた。この両カテゴリにおいて、現在取り組んでいることと3年後の将来の見通しとは連続性が見られる。一方「家業手伝い」の場合、彼らの多くが3年後も家業に従事したいと考えているかは、本調査の設計上即断できなかった。しかし、彼らが取得を希望している資格には、「正社員」と同様の傾向が見られた。したがって、職場こそ変遷していく可能性は残るが、当面どのような職業領域で生きていくのかということの見通しは比較的明瞭であると考えられる。

この二つのカテゴリとは対照的なのが、現在通信制高校に通っている人たちと、「特に何もしていない」を選択した者たちである。かれらの自己イメージは、将来への不安を感じている割合が平均的か高い傾向にあり、自尊感情は人間関係面でも自分に対する自信という面でも低い。かれらの特徴を探ると、まず目に付くのは人間関係の狭さである。友人の数は、いつのどの場所の関係でもおしなべて平均並みか少ない傾向があり、親しく話せる大人もいない者が多かった。かれらはとりわけ、「現在していること」をおこなっている場での人間関係をもていないように見える。たとえば「通信」では、現在在籍している通信制高校の教師を親しく話せる大人に挙げた割合は2割に満たず、友人関係もあまり形成されていない様子がかかえており、在学中の学校での人間関係が少ない傾向が見られた。また、「特に何もしていない」人たちの場合、就業も就学もしていないので、人間関係の形成の場がそもそも著しく限定されている。さらに現在のみならず、中退時の相談相手に友人が少ない傾向さえ見られた。

加えて特徴的であるのは、3年後の希望進路に「まだどうしていいかわからない」を選択した割合が高いことである。ただしそうした展望に至る経緯は両者でやや異なる。通信制高校在学者の場合、高校に在籍しているにもかかわらず、進路について相談できる人や場への欠乏感が強かった。言い換えれば、通信制高校という場がこれらの役割をあまり果たしていないために、かれらが将来の進路に迷いを感じているとも読み取れる。一方、「特に何もしていない」状態の者たちは、人間関係も活動範囲も狭いなかで不活発な状態に陥り、将来について考えることすらおぼつかない状態にある。

このように、両者の抱える困難は異なる性質をもつと考えられる。

問題は、「通信」や「特になにもしていない」状態と高校中退という経緯とが深い関連をもつという事実である。「通信」について言えば、本章冒頭で指摘したとおり、高校中退者にとって高校に再入学する際の選択肢は、通信制高校に偏って開かれていた。本章の検討によって明らかになったように、通信制高校が人間関係の形成や進路形成の場として成立しにくいとすれば、それらの面で高校中退者はおのずと不利な選択をせざるを得ないことになる。また「特になにもしていない」について言えば、高校中退はかれらにとって社会的な帰属先を失うことを意味する。したがって、外からの働きかけがない限り、かれらは不活発状態から脱しにくい。いずれにしても、この両者は高校中退という経緯と密接に関わるカテゴリであることに留意する必要がある。

では、自己イメージが肯定的でも否定的でもない中間層のグループは、どのようにまとめることができるだろうか。

ひとつは、カテゴリ内に特徴の異なる下位集団が存在するため、それぞれの下位集団の自己イメージが相殺しあい、結果的に中間に位置づいたと考えられるものがあつた。たとえば、現在「フリーター・パート」をしている者には、一般的に「学生アルバイト」と見なされる者と「非在学フリーター」がともに含まれているが、両者の間では特に将来への不安の高低で差異が見られた。すなわち、「非在学フリーター」は自己イメージが肯定的な「正社員」や「家業手伝い」の者たちとやや似た傾向を持ち、将来への不安を感じている者が少なかったが、「学生アルバイト」では、このサブカテゴリの3分の2を占める通信制高校在学者のカテゴリとやや似た傾向を持ち、将来への不安を感じる割合が高かつた。このように、二つの異なる下位集団の傾向によって相殺された結果、「フリーター・パート」は自己イメージの中間的なグループとして位置づいているのである。

また、「家事手伝い」は、カテゴリそれ自体に特徴を見出すことが難しく、いわば仮のカテゴリであつたといえる。「家事手伝い」では、他の活動と重複して「家事手伝い」もしている人と、今のところ他の活動をしておらず専ら「家事手伝い」をしている人との間で、特徴が異なつていた。特に、「家事手伝い」のみを選択した者たちには人間関係が孤立しがちで不活発な様子

がうかがえ、それは自己イメージの否定的であつた「特に何もしていない」カテゴリの者たちと似た傾向となつていた。一方で、他の活動をしながら「家事手伝い」もしている者たちは、「アルバイト」や「妊娠・育児中」などを同時に回答していた。このことは彼女たちにとって、他に活動する場があり、「家事手伝い」はそれら主たる活動と同時並行的におこなわれていることを示すものと考えられる。このように「家事手伝い」というカテゴリは、多くの者が他の活動と重複して「家事手伝い」を選択している一方で、他の活動と重複していない者たちも「特に何もしていない」と類似した傾向を示していることから、このカテゴリを選択した者全てに共通する傾向を見出だしにくいといえる。

最後に、「大学」「その他」について言及しよう。この二つのカテゴリは、自己イメージのなかでも高い傾向を示す質問項目と低い傾向を示す質問項目が存在していた。かれらは、自分自身への自信では高い傾向を示していたものの、人間関係面での自信については低い傾向を示していた。したがってこの二つのカテゴリは、自尊感情について高い側面と低い側面が存在し、それらが打ち消しあつたことで、結果的に中間的な自己イメージグループに位置づいたケースだといえる。

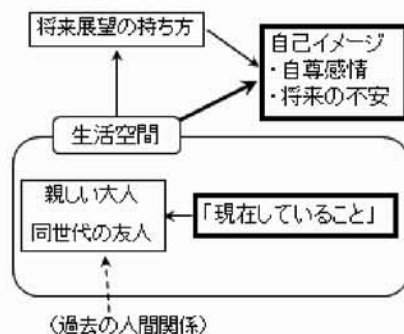
以上のように各グループを整理してみると、高校中退者が現在有している自己イメージの性格に影響を及ぼす諸要素が浮かんでくる。ひとつは現在取り結ばれている人間関係である。ここでいう人間関係とは、異世代すなわち大人との関係と、同世代すなわち友人関係の双方を指す。自己イメージに対する人間関係の規定の仕方は一様ではないし、単純ではないけれども、概ねの傾向として次のようにいえるだろう。まず、どのくらいの数の人々と関係が形成できているかという側面がある。親しく話せる大人がいないうよりはいるほうが、友人が多いほうが、ひとつのつながりだけでなく幅広いつながりを持っているほうが、肯定的な自己イメージの形成につながりやすい。また、どのような人たちと関係を形成しているかという側面も重要である。「現在していること」をおこなっている当の場で、異世代、同世代両面での人間関係をもっているかどうかは、自己イメージに大きく関わっている。さらに、中退時に相談した相手として、親や教師だけでなく同世代の友人を挙げていると、自己イメージも肯定的な場合が多い。同世代の友人に相談しているかどうかは、同世代の人間関係が自らを受け止めてくれる存在であるかどうか、あえて言えば表出的な機能を持ちうるか

どうかに関係するということだろう。なお、現状での人間関係、特に同世代の人間関係が相対的に希薄なカテゴリにはなんらかの精神的な健康問題やその他の要因から、中退以前にも友人関係の形成につまずきを経験している様子が見て取れ、それによって現在の友人関係の形成に支障を来している可能性が示唆されていた。そのような意味で、過去の人間関係は、現在の人間関係の結びつき方を介して、自己イメージに影響を与えるものといえるだろう。

自己イメージを規定するもうひとつの重要な要素は、「現在していること」それ自体である。「現在していること」は、まずもって人間関係の形成に大きなインパクトをもたらす。たとえば、同じ高校生でも「全日・定時」と「通信」では、自己イメージのあり方が異なるとともに、在籍校での人間関係にも違いがあった。この違いは、「全日・定時」と「通信」の場の性質の違いに由来しよう。通信制高校在学者は、在籍校での友人が少なく、教師とも親しくない様子であった。通信制高校では、高校に登校する回数が少なく、友人や教師との関係形成がされづらいからであろう。それに対して全日制・定時制高校在籍者は、基本的に毎日高校に通っていることで、ある程度の人間関係を築くことができていた。このように場の性質の違いによって人間関係の形成のされ方に違いが生じているということが、両者の自己イメージの差異にも一定つながっていると考えられる。ただし、「全日・定時」の自己イメージも、あくまで中程度であることは重要である。全日制・定時制高校在籍者は、中退を契機に同年齢集団を基本とする空間の中に年上として入っていったことによる異質感によって、学校への馴染めなさを抱えやすい。これらの友人関係が今なおかつての学校で出会った友人を中心としているのは、再入学後の高校が居心地の良い生活の場となり得ていない状況を反映していると考えられる。

「現在していること」が人間関係の形成に与えるインパクトは、もうひとつ、重要な側面をもつ。それは、現在していることの当の場の性質が、そこで結びつけられる人間関係を介して高校中退者たちの3年後の進路展望に大きな影響を与えているという側面である。典型的には「正社員」や「家業手伝い」の男性たちが示している。彼らが参入している職場は、多くの場合技能系職種に典型的なタイプの職業コミュニティを有するものとみられる。このような職業コミュニティでは、価値体系や成長の仕方や経験年数に基づくステージの

図表2-16「現在していること」と自己イメージの関係



ありようなどの時間展望が、一般的には「定程度明確」に存在し、また共有されている。「正社員」や「家業手伝い」の男性たちが、今の仕事に直結する資格の取得を希望しているのは、その職業コミュニティに共有された技能者としての成長の道筋を彼らも共有しはじめられており、それに沿って自らの歩みを見通すことができているからである。そしてそのことが、将来への不安を低め、肯定的な自己イメージの形成に寄与しているのだろう。また、先に挙げた「全日・定時」と「通信」における人間関係形成の差異は、両者の進路展望の持ち方における差異にも関わっていると考えられる。「全日・定時」で言えば、学校で一定程度取り結ばれている友人や教師との人間関係は、学校への深いコミットメントには至らずとも、学校ランクに基づくトラッキングを共有する間柄にはなっており、それが高等教育への進学志向につながるとともに、「まだどうしていいかわからない」者の比率を平均程度に低めているのだろう。反対に「通信」では、現在の学校生活での人間関係を持ちにくいことから、進路形成をめぐる価値観を共有することも難しくなっている。このことが、3年後の将来で「どうしたらいいかわからない」者が多くなっていることに関係しているといえる。無論、家族以外に属するコミュニティをもたない特に何もしていない者の場合も、進路展望は持ちにくいと考えられる。

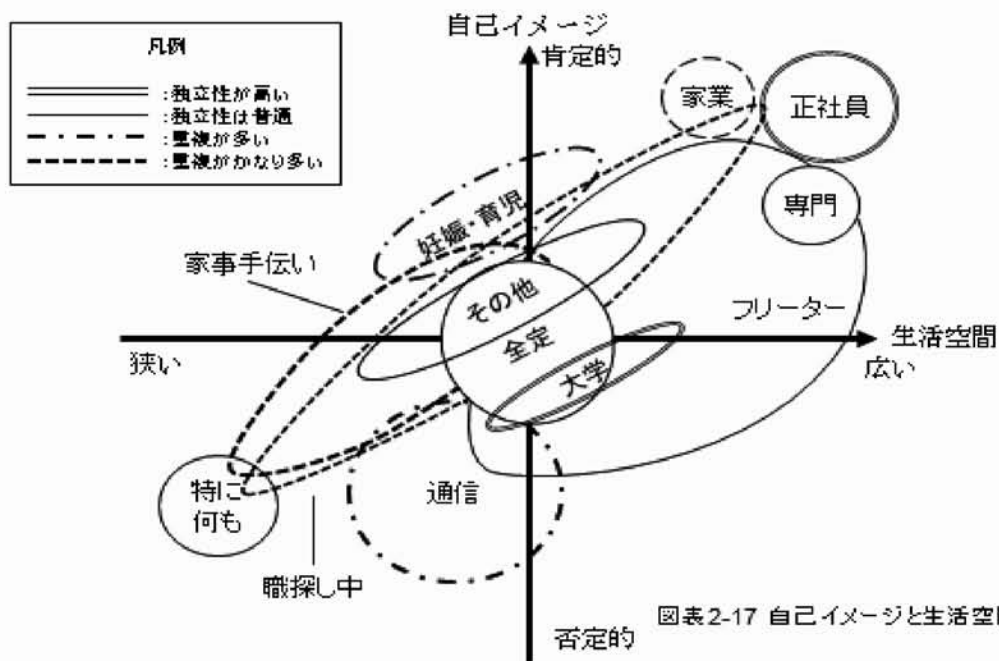
以上のように見てくると、中退経験者たちの形成している自己イメージは、現在および過去の人間関係、「現在していること」、そして将来展望のありようが関わっているとひとまずは整理ができる。しかしながらこれらの諸要素は、個々に等しく自己イメージを規定しているというよりは、相互に有機的な関係をもちな

がら、総休として自己イメージに影響をもたらしていると考えたほうがよいだろう(図表2-16)。ここでは、その有機的な関係の核となる部分に、仮に「生活空間」という言葉を充ててみたい。生活空間は、ここでは主に高校中退者個々人が取り結んでいる人間関係と、「現在していること」それ自体の双方によって構成されるものを想定している。人間関係には、「現在していること」によってもたらされた異世代および同世代(例:職場の仲間や現在の学校の友人など)の関係と、「現在していること」とは相対的に独立した同世代の関係(例:辞めた学校の友人、小・中学校からの友人、先輩など)の双方が含まれる。このうち後者は、稀に道具的機能をもつ関係になりうるが、基本的には表出的機能をもつ関係として位置づけられる。もう一方の「現在していること」によってもたらされた人間関係は、先に職業コミュニティや学校での教師との関係を例に挙げて表現したものを指しており、表出的機能を担保しつつ道具的機能も高い関係として位置づけられる。なお現在の人間関係のありようは、以前の人間関係に影響を受けながら、現在の結び方へといったんは結実しているものである。このように主に「現在していること」と現在の人間関係との双方によって構成される生活空間は、自己イメージ、とりわけ自尊感情に

影響を及ぼすと考えられる。

また生活空間は、主に「現在していること」によってもたらされた人間関係を通して、3年後の見通し、すなわち将来展望の持ち方に関わるものとも想定される。ここで将来展望の持ち方とは、どのような展望を持っているかということに加え、その達成がどの程度現在の状況の延長線上にあるかを含意している。このように仮定した将来展望の持ち方は、自己イメージのなかでも特に将来への不安の抱き方に影響するものと考えられる。

以上のような意味内容をもつ生活空間の広がりや横軸に、「自己イメージ」の性格を縦軸にとって、各カテゴリを配置すると、図表2-17のようになるだろう。この図では、第一象限に「正社員」「家業手伝い」「妊娠・育児中」が、第二象限には「特に何もしていない」「通信」が位置づいており、その間を埋めるように中間グループが並ぶ。このように、各カテゴリの位置関係が全体として右肩上がりになっているのは、生活空間が広いほど自己イメージが肯定的となり、狭いほど否定的になるという関係を表しているためである。ここで重要なのは、この図が、将来展望の持ちやすさ/持ちづらさの関係とも重なっていることである。先に述べたとおり、将来展望は中退者個々人の生活空間を



図表2-17 自己イメージと生活空間

上台として形成されている。その展望の持ち方が自己イメージにおける将来への不安の抱き方に影響していることを踏まえれば、この岡の右肩上がりの布置関係は、現在していることとの関連において将来展望をもちえているか否かということとも重なり合っていることを表している。

以上のように、どのような生活空間の中で生きているのかということは、自己イメージや将来の見通しの持ち方に非常に大きくかかわっている。しかし、これまで再三繰り返してきた通り、高校中退者はそもそも「現在していること」として選択できる事柄が、高校中退を経験せずにいる者に比べて極端に偏っていることをここでも思い出したい。したがって、生活空間が「広い」といってもその広さは相対的なものに過ぎない。とすれば、自己イメージを規定する中退者の生活空間をいかに豊かに保障しようかという観点から改めて中退者の問題を捉える必要があるであろうし、そこを踏まえた支援策が講じられる必要が生じるだろう。

注

1 『平成19年就業構造基本調査 新職業分類(平成21年12月改定) 特別集計 全国編』の「男女、従業上の地位、雇用形態、起業の有無、年齢、教育、職業別有業者数」より算出。

2 本章の記述でも、中退理由に関する各設問への回答の割合は、特に断りのない限り「とてもあてはまる」のみを採用する。

3 以下、社会サービスの必要性についての回答はすべて「必要」「ある程度必要」と答えた割合の合算値とする。

4 彼らが中退と同時に家業に従事するつもりでいたかは、調査票の設計上判然としない。そのため、ここでの「アルバイト」や「正社員」は、家業における雇用形態を指すのか、他の職場でのそれを指すのかわからない。なお「その他」を選択して家業に従事する旨を明記しているのは1名、また調査現在で家業以外の「働いている」カテゴリを重複選択した例は「フリーター・パート」3名である。

5 1章の「妊娠グループ」では、中退理由に「妊娠したから」が「とてもあてはまる」と回答した人のみを含めているが、ここでは妊娠が中退の理由になっていない者との差異を検討するため、「まああてはまる」と回答した者を引退理由に妊娠を挙げた者と見なすことにする。

6 ほかに1名、中退理由の「妊娠したから」の項目が無回答だった者がいる。

7 中退直後の見通しとして「結婚するつもりだった」と答えた14名と「その他」の自由記述で「育児」または「子育て」の記述があった7名を合計した。

8 ここでのシングルマザー率が1章の「妊娠グループ」での数値(34.2%)と異なるのは、「妊娠グループ」38

名のうち、現在していることに「妊娠・育児中」を選択しなかった人が2名いること、男性1名を除外したこと、中退理由に「妊娠したから」が「まああてはまる」1名を加えたことなどにより、母集団が異なるためである。以下の分析でも同様である。

9 このほか、「その他」を選択した人で「子育てをしながら学校に通う」旨を自由記述にしている人が2名いた。

10 両者の合計人数が510名にならないのは、このカテゴリを選択した者のなかに、内閣府の集計ではシステム欠損値として処理された者が1名含まれているためである。該当者の個票を特定することができなかつたため、以下の「学生アルバイト」と「非在学フリーター」に分類した記述では、どちらかのサブカテゴリにこの1名を含んだままSPSSで算出した数値を用いることとする。

11 以下、社会サービスの認知についての回答はすべて、「よく知っている」「だいたい知っている」と答えた割合の合算値とする。

12 美容師3名、調理師2名、自動車整備士2名、建築技能士および施工管理士1名、看護師1名、介護福祉士1名で、合計10名が国家資格の取得を希望している。

13 このうち学生が8名いる。

14 4名は学生と、3名は「フリーター・パート」と、2名は「妊娠・育児中」と、1名は「家業手伝い」とかけもちしており、1名は「特に何もしていない」と重複回答をしている。一方で、「仕事を探している」の他に重複回答がなかった者は17人であった。

15 なお、入学等への受験準備中の者は女性のうち46.7%であるのに対して男性は66.7%であり、男性で多い傾向にある。また、受験準備以外の者は、就職に内定(7名)、芸能活動(3名)、専業主婦(2名)、治療中(2名)、フリースクールに通っている(2名)、高校再入学の準備(2名)などであった。

16 高校中退時の相談相手や、親以外に親しく話ができる大人を尋ねた設問の自由記述欄には、15名からの記述があった。このうち、「医師・カウンセラー」など、健康問題についての言及があった者は9名おり、そのなかで「心療内科」「カウンセラー」など精神保健専門家などと記述していた者は7名であった。そのうち「うつ病」「SAD(社会不安障害)」など精神的健康面での不調を明記した者は7名中5名となっている。

17 塾・予備校に通ったことのある40名のうち親しい友だちが「塾や予備校」に10人以上いると答えた者が、22.5%[9.3%]にのぼる。ただし、回答者全体のなかで塾・予備校に通ったことがある者のうち、そこに「友だちがいない」と回答した者の割合は53.0%であった。学校やアルバイト先などと比べ、塾・予備校は新たな友人関係を形成しにくい場になっていることがわかる。

18 ここには、学生(9名)、「家事手伝い」(7名)、「その他」(1名)との重複選択者が含まれている。

19 「家事手伝い」と「フリーター・パート」を重複回答した者が1名おり、両方に含まれている。

20 二つ以上重複して選んでいる者がいるため、合計が61名となっていない。

²¹ 在学者のうち就業中の者は115名、31.9%である。

²² このアイデアについては、エリック・H・エリクソンのアイデンティティ概念にヒントを得ている。Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*, W. W. Norton & Company, Inc. = 西平直・中島由恵訳 (2011) 『アイデンティティとライフサイクル』(誠信書房)を参照のこと。また、この点を若者の〈学校から仕事へ〉の具体的な移行過程に即して検討した論考として船山「若者のアイデンティティ形成と教育・研修プログラム(仮題)」(近刊)を参照されたい。

[船山 万里子・三浦 芳忠・山崎 恵里菜]

おわりに

—高校中退者の実態と支援構築への視座

中退時点・現状から見える中退者の実態

本稿では、内閣府「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）」のデータを元に、高校を中退した若者たちが中退後どのように生きているのか、その実態を明らかにすることを目的に考察を試みてきた。その際、大きく二つの分析角度からの検討をおこなった。一つは、かれらが高校を中退した時点に焦点化したものであり、特に高校中退の理由を起点に考えるものである。いま一つは、かれらが中退後に至っている現時点（調査時点）に焦点化し、とりわけ現在していることを起点に考えるものであった。二つの起点から考えたとき、それぞれ中退者のどのような側面を明らかにしたのか、改めて整理しておこう。

まず、1章において、高校中退時点、とりわけかれらの中退理由に着目した際に見えてきたことは、高校中退といっても、そこには多様な辞め方のタイプが存在することである。経済的に自立することを志向し意識的に高校生活からスパイアウトするようなかたちで辞める者もいれば、経済的に厳しい家庭環境下で本人の希望とは関係なく退学せざるを得なかった者も一定いる。また、健康上の問題を抱えるなかで退学に至る者もあり、そこには何らかの人間関係のもつれや神経症的な不登校などから心身の不調をきたして辞めたと思われる者もいた。

このようなそれぞれの辞め方から、中退後の軌跡、さらに現在の状況を見ていくと、そこには辞め方ごとに一定の特徴が見出された。たとえば、経済的自立志向グループでは中退後働いている者がほとんどであった一方で、神経症的な不登校タイプと一定の重なりが考えられた人間関係のもつれを伴わない健康問題グループでは、大学進学やその準備をおこなう者がほとんどであった。また、いじめ等の人間関係のもつれから精神バランスを崩したと考えられる者が含まれるもう一方の健康問題グループでは、家事手伝いや職探し中など、在学・就労いずれの状態にもなく現在の生活状況が不確かな者が多かった。ここには、いじめ等の人間関係のもつれによる中退時の心身状況が、中退後の現在にも影響を及ぼしていることがうかがえる。つまり、中退後どのような状況に至っているかは、端的にはどのような辞め方をしているのかという中退時点のありようが大なり小なり影響していると考えられるのであ

る。

また、中退時点の様子は、現状だけでなく将来展望にも影響していた。現在仕事に就いているという点では、経済的自立志向グループも経済的困窮グループも問題行動グループも同じであった。だが、経済的自立志向グループが中退時点から一貫して社会に出て働くことを志向し3年後の将来展望においてもそれは変わらないのに対し、自ら望んで辞めたわけではない者が多く含まれているほかの二つのグループでは、高校への再入学を含めて今後の将来展望を模索する様子が見られた。つまり、現在同じように働いていたとしても、中退理由やその後のプロセスによって、かれらは異なる将来展望をもっているのである。そこには現状と地続きに見通しをもつ者がいる一方で、迷いを含めて将来展望を描く者もいる。だからこそ、中退者の実態を捉える際には、現在の状況を取り出して見るだけでなく、中退時点からのプロセスを踏まえて読み取る必要がある。そうした視点をもつことによって、はじめてかれらの迷いや不安を含んだ多様な実態を捉えることが可能になるのである。

次に、現時点に焦点化し、現在していることを軸に分析をした結果見えてきたものを整理してみよう。まず、かれらがもつ将来への不安、人間関係面や自分自身に対する自尊感情といった自己イメージは、現在していることによって異なる傾向をもつことが明らかになった。現在正社員や家業で働いている者や妊娠・育児中の者たちは、相対的に肯定的な自己イメージを形成しているが、その一方で通信制高校在学者や特に何もしていない状態の者は、自己イメージが否定的であった。しかし、高校中退者にとって現在していることの選択肢は、そもそも限定されていたり偏っていたりするため、中退者にとって肯定的な自己イメージの形成につながるような選択肢は極めて限られていた。

では、現在していることによって、形成される自己イメージが異なるのはどのような要因からなのだろうか。その内実を読み解くと、そこには大人や友人を含めた人間関係のありようがまず関係していた。親しい大人や友人が多いこと、幅広い範囲で関係が構築されているとともに、現在していることの当の場で人間関係を形成していること、中退時に同世代の人々に相談していること、などが肯定的な自己イメージにつながりやすい。加えて、現在していることそれ自体が重要な要因となっていた。就業者なら職場や仕事を通して出会う人々、学生なら学校の教師やクラスメイトとい

うように、現在していることはそこで出会う人たちの性格を決定づける。また現在していることによっては、その当の場において人間関係を形成しにくい場合がある。たとえば同じ高校生でも、全日制や定時制では基本的に毎日登校することである程度の人間関係が形成される一方で、通信制は登校の機会がそもそも少ないことから、在籍校での人間関係形成が進まずにいるようであった。このように、現在していることの当の場での人間関係の形成は、そこで取り結ばれる人間関係の広がりという側面においても、どのような人々と出会うかという側面においても、現在していることそれ自体の性質に大きく影響されることがわかる。2章では、以上のように現在していることを介して取り結ばれた人間関係と、それ以外にも広がっている人間関係、そして現在していることそれ自体の活動の場を包括して「生活空間」と表現し、生活空間の豊かさや広がり具合が総体として自己イメージの形成にかかわっているのではないかと考えた。

さらに、自己イメージの形成は将来展望のありようにも影響を受けていた。そしてその将来展望の形成は、生活空間という言葉で含意した現在していることと人間関係とのひとまとまりのありように関わっていると考えられる。たとえば職場における先輩モデルの存在や技能系職種に典型的な職業コミュニティは、成長への見通しや時間展望を描きやすくさせる。正社員や家業従事者が現在の仕事に直結する資格の取得を希望しており、3年後に現在と同様の働き方を志向しているのはそのためである。反対に、通信制高校在学者や特に何もしていない状態の者は、現在していることそのものによって出会える人々が極めて限られており、近い将来への展望も不透明である。このようにかれらの将来展望は、現在していることだけでなく、どのような場においてどのような人とのつながりをもっているかという総体としての生活空間から影響を受けている。したがって生活空間は、将来展望の形成という経路をたどって自己イメージに影響を与えてもいるのである。

以上二つの起点からの検討を、時間軸に沿って整理してみよう。1章の議論が切り取ったのは、中退時点を起点に、現在さらには将来展望に象徴される未来を捉えようとするものであった。それに対して、2章が切り取ったのは、現時点の状態が、将来への不安や見通しを含む自己イメージをどのように規定しているのかという点であり、それは現在から未来へという時間軸を中心に中退者を捉えようとするものである。それ

ぞれ異なる時間軸における中退者の様子からグループ化し導き出した考察は、先に見たように、異なる知見を提示している。このことは、中退者をより実態に即して捉えようとする上で重要だろう。2章で見たように、現在していること自体がかれらの自己イメージ、さらにはかれらがどのようなことを感じているのかを規定するのであれば、かれらが現在どのような生活空間の中で生きているのかを捉えることは中退者の実態把握において必須となる。だが、同時に、現在の状況だけではそれぞれがもつ将来への不安や迷いは捨象されてしまう面があり、1章で見たように中退時点からのプロセスの中で現状と将来展望を捉える必要もある。つまり、同じく現在の状況を見るにあたって見る側の視点の持ち方によって実態の見え方は異なるのであり、両者の時点から見る視座を獲得して初めて、中退者の実態を詳細につかむことができるのである。

以上のことは、中退者への具体的な支援体制や施策を考える際にも同様に重要な視点となるだろう。支援に際して中退者の実態を捉えることが前提になるという意味ではこのことは当然であるが、両者の視点によって捉えられる実態が異なるように、支援においてもそれぞれの視点を基に異なる側面が提起しうると考えられるからだ。以下では、上記に見てきた時間軸に沿って、中退時から現在、さらに将来展望の描き方といった時間経過において、どの時点でかれらが支援を必要としているのかというニーズを見出すことを念頭に置きながら支援について検討してみよう。

支援への視座

まず、中退前を中心にしたときに考えうる支援とは何か。まずは、家庭の経済的理由から学校を離れざるを得なかった経済的困窮グループのように、中退を不本意に感じている者たちへの支援が必要であろう。2010年度から高校授業料無償化が実施され一定の支援措置は講じられつつあるが、現在議論されている給付制奨学金制度の導入など経済的支援の充実によって、かれらが安心して学校生活を送れる条件整備をおこなうことが、この時点のサポートとして考えられる。また、人間関係のもつれを伴う健康問題グループに見たように、学校空間において周囲との関係に困難を経験した者にとっては、そうしたトラブルを未然に防いだり関係の紡ぎ直しをはかることも求められるだろう。さらに、中退前を含んだ過去の友人関係が現在の友人関係に影響していることを踏まえれば、トラブルを未

然に防ぐということに留まらず、人間関係を積極的に形成する場として中退前の学校空間が再度認識される必要もある。

一方、中退後に至っている現状を軸に支援について考えてみると、まずもってかれらの中退後の移行先が限られているという問題が挙げられる。先にも指摘したように、かれらが至っている現状は、労働市場では正規雇用よりも非正規雇用に著しく偏っていた。また、正社員では高卒資格を要しない土木建築系など技能系職種が多く、それらの文化に馴染む一部の男性に限られたルートとなっている。同様に、再入学の学校についても、全日制高校の多くは同年齢集団で構成されており、中退後に異年齢者として入り直すことへの抵抗は想像に難くない。実際、中退者は全日・定時制高校よりも通信制高校に多く在籍しており、偏った選択肢の中で再入学の道を探らざるを得ない状態に置かれているといえよう。以上のように、中退者にとって中退後の移行経路が狭められた選択肢の中で形成せざるを得ないものとなっていることは、かれらへの支援を考える際には極めて重要な事実である。たとえば、経済的自立志向グループのように中退前から一貫して働くことを希望している者たちは、一見中退後も何の問題もなく就労生活を送っているように見えるが、その実、正社員へのなりづらさなど様々な面で不利な立場にさらされているのである。以上からは、かれらが高校中退後にとりうる選択肢の幅を広げることが今後の重要な課題となるといえる。

また、中退後に高校に再入学した者への支援も検討しておきたい。たとえば、通信制高校在学者は、高校に通っているにもかかわらず、教師を含めて親しく話せる大人がいなくてとする者が3割近くにのぼり、進路や生活について相談できる施設や相手、仲間と出会い一緒に活動できる施設を多くの者が必要としていた。高校での帰属感や居場所感覚がもてず、人間関係形成もなされづらいことの表れだと考えれば、通信制高校のあり方を問い直したり、ほかにもそれらの機能を担保する場のあり方を探ったりするなどの支援構築に向けた検討が急務である。また、以上のことは全日制高校においても当てはまる。通信制在学者よりも学校教員との関係性が築けている面があるとはいえ、相談施設や相談相手を欲していることから、全日・定時制高校在学者においても前述したように再入学した高校への馴染み難さがうかがえる。少なくとも中退者が再びスタートさせた高校生活をどのように豊かにできるの

かということについては、今後検討の余地があるだろう。特に人間関係がうまくいかなかったといった中退経緯をもつ者が学校生活をスムーズに再開するためには、受けられる学校側に意識的な工夫が求められるはずである。

また、それとかかわって述べておきたいのは、1章で中退理由を起点にグループ化した際に、問題行動グループや経済的困窮グループのように働いている者が多いグループ内でも高校に戻りたいとする者たちが一定数見られたことである。高校生活をやり直したい、高卒資格を取りたいと思いつつも、実現できずにいる層が一定いるのである。経済的困窮グループについては先に中退前の経済的支援が不可欠だと述べたが、一度高校を辞めた後でも本人が希望した際に再び学校に戻れるような経済支援や環境を整備していく必要がある。

次に、高校中退後に妊娠・育児中といった状態に至っている者についても考えてみよう。先の分析では、妊娠を理由に中退した者と中退後に妊娠し現状に至っている者とで多少の違いが見られることが指摘されたが、特に前者の者たちは、3人に1人がシングルマザーである可能性がある。そうした事情も関係してか、彼女たちの将来不安は高めであった。彼女たちは必ずしも十分な資源があるわけではないまま生活をし、子育てとの兼ね合いの中で今後の将来展望を描いていかなければならない。そうした困難を踏まえたとき、彼女たちを経済的にも精神的にも支える支援の必要性が挙げられるだろう。

以上、中退前・中退後それぞれの時点において中退者に抱えられている困難とそれに対して講じられるべき支援を考えてきた。しかし、再び中退者の困難というものに着目して見れば、中退前・中退後といったかたちで明確に区切ることのできない問題もまたあることが浮かび上がってくるのではないだろうか。かれらが抱える問題は、中退時点においてのみ存在していたり、現在の問題として生じているだけでなく、中退時の問題が後々に影響してそれぞれの現状問題として顕在化している場合もあるからだ。とすれば、中退前・中退後といったいわば定点での対応ではなく、包括的・長期的に捉えられるべき支援課題もあることが見えてくる。

そこでまず注目したいのは、現状で「特に何もしていない」、あるいは他項目と重複せず「家事手伝い」とのみ回答した者たちである。就学も就労もしていない

ため、狭く限られた生活空間に生きているかれらは、孤独感を強くもっており、今後についても「まだどうしていいかわからない」といった状態にある者も多い。また、現在の友人関係が少ない様子からは、そもそも高校在籍時から交友関係が狭かったともいえ、かれらは在学時から不活発な生活を送っていたとも考えられる。不活発であるがゆえに現在支援ニーズを表出できない状態にあるのだとすれば、容易に現状から抜け出せなくなった際にかれらが外の社会とつながる道は閉ざされがちである。もちろん、中退して間もない者が多いことを踏まえれば、かれらが今後どのような状態に至っていくかは未知数であるし、支援と称した一方的な介入には注意が必要だが、社会との接点を失い不活発なまま停滞し続けざるを得ない状況にかれらを追い込まないためにも、高校在学時から中退後まで一貫した支援体制が必要となる。具体的な手立てとしては、本調査で極めて認知度の低かった地域若者サポートステーションとのつながりを在学時、中退時につくるといったことが考えうるだろう。また、地域にある支援機関と学校が連携して支援体制を構築し、学校からの退学がそのまま社会との接点を失うことにならないようフォローする動きが、今後ますます重要になってくることも指摘しておきたい。いずれにせよ、仕事に就かせることや学校に在籍させるといった状態を強いるのではなく、今後どうしていきたいかを共に相談し、より安定的に現在とこれからの見通しを展望できるような支援を、中退前・中退後一貫して保障することが重要ではないだろうか。

一方、これらカテゴリの者たちと一定の重なりも考えられる人間関係のもつれを伴う健康問題グループについても付言しておきたい。いじめ等の人間関係トラブルから中退した者も含まれるかれらの中には、現在に至っても精神面での困難を抱え、「仕事をしていく自信がもてない」などの不安を感じている者が多かった。かれらはいわば中退時の問題を引きずったまま現在に至っている。しかし、そうしたかれらが描く将来展望は、現状との間にややギャップを感じさせるものだった。かれらにとっての3年後の将来展望は、今後の自分を具体的にイメージするというよりは、「そうなったらいいな」と思える未来を展望するようなかたちで形成されているようにも見える。かれらが相談施設や相手を強く欲していることから、将来展望形成を支え、ともに不安を共有したり考えたりできるような支援機関等の存在が望まれているといえるだろう。

また、人間関係のもつれを伴わない健康問題グループや現状として「その他」と回答した者たちへの支援についても、中退前から現在へと続く経過のなかで捉えられるべきだろう。かれらの中には、大学等への受験準備中の者が多く、高校在学者においても人学進学を希望するなど、特徴的な大学進学志向が見られた。かれらが高等教育進学という希望を強く抱いているにもかかわらず高校中退に至っている背景の一つには、主に精神面での健康問題やそれに伴う不登校経験が考えられる。現在においても心療内科等に通う者が一定おり、友人関係もそれほど広く形成されている様子が見られないことから、かれらが少なくない困難を抱えていることが想像できる。また、人間関係のもつれを伴わない健康問題グループでは、相談施設や相談相手、仲間と出合い一緒に活動できる施設を求めている者が多く見られた。中退後、多くが高卒認定試験や通信制高校等への再入学を経て大学受験に邁進できる状況にはあるものの、そこには一定の困難が抱えられているという事実は見落とされるべきではないだろう。

また、かれらが大学に至った際にどのような困難を抱えるのかということについても注視が必要である。「大学」カテゴリで見たように、中退後大学に入学した者たちには、学びたいことが見つかったり資格取得を目指したりといったように積極的な様子が垣間見られ、自分自身に対する自信も比較的高い様子が見られた。しかし、人間関係面での自信は低く、親しい友人が少ない傾向や大学内での友人関係が形成されていない印象があった。仮にかれらの大学生活が豊かなものとなっていないのだとすれば、大学進学に邁進しこれから大学に入学していこうとする中退者の中にも、大学入学後同様の困難を抱える層が生じることが考えられる。その点からは、大学進学以降にかれらを支える何らかの策が講じられる必要があるかもしれない。

以上、中退者がどの時点で困難を抱えており、そこにどのような支援が求められるのかということを見てきた。このように見てくると、中退前、中退後、また中退をめぐる一貫して求められる支援を考える際には、中退時を起点にみる視点と現状を起点にみる視点双方が入り組みながら寄与していることがわかる。中退後の支援といっても、2章で見た現時点で高校に在学している者たちの分析を基に提起できる支援もあれば、1章で見たように不本意に高校を辞め再度学校へ戻りたいと考える層に着目するからこそ考えうる支援もある。双方の視点から見ることによって、かれらの

その時々、困難を同定することが可能となり、時宜にかなった多様な支援を検討することができるのである。

まとめと残された課題

高校中退者といっても、その様子は極めて多様であり、まずはかれらの状況や中退後のプロセスを丁寧につかみ出すことが求められる。本稿では、中退時、現時点という二つの起点から高校中退者の実態を明らかにすることを主題に据え、検討を加えてきた。そして最後に、中退者それぞれが抱える困難を同定し、それに応じて必要とされる支援について若干の提起をおこなった。

だがその一方で、いくつか残された課題も指摘できるだろう。まず、中退理由を起点に分析した1章では、典型的な辞め方タイプに沿ってグループ化をおこなうことで中退者の大枠をつかんだが、グループに含まれた人数は調査対象者の半数に満たない。残り半数の者が今回提示した典型的なグループと一定の重なりをもつのか、あるいは異なるタイプとして見出せるのか、その性格はまだ明らかではない。また、中退時点への着目として今回は中退理由に焦点化したのが、中退時の展望の持ち方がその後の状態にどのように関わっているのかといった観点からの検討も必要であろう。

また、2章では現状と自己イメージの関係性について検討をおこなったが、そこで見られた各カテゴリにおける意識面での男女差については十分に分析することができなかった。それらの差異がジェンダー差によるものなのか、現在至っている状況のなかで様々なバイアスを受けながら生じている、いわばカテゴリ特有のものなのかは判然としない。ただし、この点の検証に関してはデータ上限界もあり、より詳細な調査に基づいて分析することが求められる。

さらに、中退者の家庭階層が低い方に偏っていることは指摘したとおりだが、本稿では階層特有の意識や文化といった側面を十分に論じることができていない。データ上の制約もかかわってはいるものの、中退者を捉える上で重要な論点であり、本調査データにおいても今後さらなる検討が望まれる。

最後に、中退者一人ひとりが具体的にどのようなことを感じたり求めたりしているのかといったことは、「中退者調査」のデータ分析では限界を認めざるを得ない。中退者のより具体的な実態をつかみ出していくためには、内閣府で一定おこなわれてはいるものの更なるインタビュー調査とその詳細な分析が必要となる

だろう。また、今回の調査対象者は、高校を中退して間もない主に10代後半の者たちであった。中退後さらに時間を経た中退者がその後どのような人生経路を歩んでいくのかについての調査・検討も今後重要となるだろう。それら新たな調査研究によって高校中退者のさらに具体的な実態の解明がおこなわれると同時に、かれらへの支援策が探られる必要がある。

注

¹ 付言すれば、中退者の職業教育の機会についてはほぼ絶たれているといっても過言ではない。専門学科をもつ定時制高校はごくわずかであり、公共職業訓練の学卒者向けのものについても高卒者と比して少ない。高校中退者が職業教育を望む場合は、主に、全日制の専門学科に1年次から入り直すか、高卒認定試験を経て専門学校に入るかのいずれかになるだろう。

図1. あなた自身についてお聞きします。(※選取数の右欄等に、単純集計の結果を記載している。単位は%)

(1) あなたの性別を教えてください。(○を1つつける)

- 47.1 1 男性
- 52.2 2 女性

0.7 無回答

(2) あなたの生年月日を教えてください。(枠内に記入)

平成 年 月 日生まれ (平成22年4月1日現在平均年齢17.1歳)

(3) 中選した時期、中選したときの学年を教えてください。(枠内に記入)

今から 年前の 月 日中選 年中選 年生 (中選時の平均学年1.7年)

(4) 中選した高校について教えてください。

① 学科 (○を1つつける)

- 55.8 1 普通科
- 6.9 2 農業科
- 13.7 3 工業科
- 8.6 4 商業科
- 9.0 5 総合学科
- 5.5 6 その他(具体的に：_____)

0.5 無回答

② 課程 (○を1つつける)

- 87.2 1 全日制
- 8.2 2 定時制(夜間を主とする場合)
- 4.3 3 定時制(昼間を主とする場合)
- 4 通信制

0.3 無回答

(5) あなたの国籍を教えてください。(○を1つつける)

99.1 1 日本

0.7 2 日本以外 (国籍：_____)

0.2 無回答

IV 調査票 (単純集計結果付)

(1) で、選択肢 5～8「在学中」を選んだ方にお聞きします (n=382人)

(3) 進学したきっかけを教えてください、(当てはまる番号すべてに○をつける)

- 17.7 1 自分の勉強したいことが見つかったから
- 43.6 2 現在又は将来の仕事に必要だから
- 76.2 3 高校の学歴が欲しいから
- 21.3 4 就職に役立つ資格を取りたいから
- 0.6 5 学費がたまつたから
- 0.3 6 ただで高校に行けるようになつたから
- 19.1 7 家族にすすめられたから
- 4.7 8 友人にすすめられたから
- 1.7 9 就職できなかつたから
- 7.7 10 まだ働きたくないから
- 5.5 11 その他(具体的に: _____) 1.1 無回答

(1) で、選択肢 12「特に何もしていない」を選んだ方にお聞きします (n=47人)

(4) 「特に何もしていない」のはなぜですか、(当てはまる番号すべてに○をつける)

- 28.4 1 もう少し何もせずにゆつくり休みたいから
- 4.3 2 通学や編入学ができなかつたから
- 19.1 3 就職できなかつたから
- 4 経済的な事情があるから
- 2.1 5 家庭の事情があるから
- 12.8 6 健康の事情があるから
- 25.5 7 これからどうすればいいかわからないから
- 12.8 8 ほかにやりたいことがあるから
- 21.3 9 その他(具体的に: _____) 2.1 無回答

問 2. あなたが現在していることについてお聞きします。 0.6 無回答

(1) あなたが現在していることを教えてください、(当てはまる番号すべてに○をつける)

- 13.6 1 仕事を探している
- 9.6 2 働いている(正社員・正職員など)
- 43.4 3 働いている(フリーター・パートなど)
- 3.4 4 働いている(家の商売や事業など)
- 10.2 5 高校に在学中(全日制・定時制、休学中も含む。)
- 15.3 6 高校に在学中(通信制、休学中も含む。)
- 1.8 7 専門学校に在学中(夜間部・通信制なども含む、休学中も含む。)
- 3.3 8 大学に在学中(夜間部・通信制なども含む、休学中も含む。)
- 5.4 9 妊娠中・育児をしている
- 11.0 10 家事・家事手伝いをしている
- 7.0 11 その他(具体的に: _____)
- 4.0 12 特に何もしていない 4ページの(4)へ

2・3・4・5・6・7・8・12を選択しなかった人は、5ページの問3へ

(1) で、選択肢 2～4「働いている」を選んだ方にお聞きします (n=661人)

(2) 今の仕事をしている理由を教えてください、(当てはまる番号すべてに○をつける)

- 24.4 1 中退前からですと同じ職場で働いていたから
- 20.4 2 自分のやりたい仕事が見つかったから
- 16.6 3 資格や経験が必要ない仕事だったから
- 10.4 4 安定した仕事につきまかつたから
- 16.6 5 これ以上高校で勉強したくなかつたから
- 49.2 6 働かないと生活できなかつたから
- 15.4 7 学校に通うためのお金が必要だから
- 21.8 8 親元を離れて自立したいから
- 47.0 9 遊ぶお金がほしいから
- 13.3 10 家族のすすめや紹介があつたから
- 12.9 11 友人のすすめや紹介があつたから
- 0.3 12 高校の先生のすすめや紹介があつたから
- 0.2 13 地域若者サポートステーションなどの相談施設の職員からアドバイスを受けたから
- 6.8 14 その他 (具体的に: _____) 0.3 無回答

ここからは、全員の方におたずねします。

問4. あなたが高校を辞めたときの状況についてお聞きします。

(1) まず、中学時代、卒業後の進路をどのように考えていましたか。(○を1つつける)

- 14.6 1 中学で働きたかった
82.5 2 高校に進学したかった

2.9 無回答

(2) 高校を辞めた理由として、(ア)から(ソ)それぞれについて、1~3のうち当てはまる番号1~3に○をつけてください。

	とても当てはまる	まあ当てはまる	当てはまらない
(ア) 勉強がわからなかったから	1	2	3
2.2 無回答	14.9	33.8	49.1
(イ) 校則など校風が合わなかったから	1	2	3
2.1 無回答	24.2	27.8	45.9
(ウ) 仲の良い友人が辞めてしまったから	1	2	3
2.6 無回答	4.5	10.3	82.5
(エ) 問題行動を控えたから	1	2	3
2.3 無回答	11.5	12.5	73.6
(オ) 第一希望の高校ではなかったから	1	2	3
2.5 無回答	7.6	13.3	76.7
(カ) 人間関係がうまくいかなかったから	1	2	3
1.7 無回答	21.2	25.1	52.0
(キ) 親に辞めさせられたから	1	2	3
2.5 無回答	0.9	2.0	93.6
(ク) 経済的な余裕がなかったから	1	2	3
2.5 無回答	5.1	10.6	81.3
(ケ) 授業上の理由から	1	2	3
2.5 無回答	9.1	9.1	79.0
(コ) 転校したから	1	2	3
2.6 無回答	3.2	0.8	93.1
(チ) 高校生活以外に興味があることができたから	1	2	3
2.6 無回答	14.5	21.8	61.0
(シ) 欠席や欠席がたまって進級できそうもなかったから	1	2	3
1.8 無回答	29.5	25.4	43.4
(ス) 早く経済的に自立したかったから	1	2	3
2.6 無回答	9.9	20.1	67.5
(セ) 早く家を出たかったから	1	2	3
3.2 無回答	8.6	13.6	74.6
(ソ) その他(具体的に)			

問3. あなたのご家族についてお聞きします。

(1) 現在、同居している家族の方は、あなたを除いて何人ですか。(枠内に記入)

あなたを除いて 人 (平均3.2人)

(2) 同居している家族について教えてください。(当てはまる番号すべてに○をつける)

63.1	1 父親	24.0	5 祖母
85.4	2 母親	6.2	6 あなたの結婚相手・同居相手
72.8	3 兄弟姉妹	4.2	7 あなたの子ども
14.3	4 祖父	5.5	8 その他(具体的に)

0.5 無回答

(3) 現在、あなたは結婚していますか。(○を1つつける)

3.9	1 結婚している	83.0	3 結婚していない
2.6	2 同居している		

0.5 無回答

(4) 現在、主に誰の収入によって生活していますか。(当てはまる番号すべてに○をつける)

26.4	1 あなた自身	7.0	5 祖父
59.3	2 父親	5.3	6 あなたの結婚相手・同居相手
53.5	3 母親	3.8	7 生活保護を受けている
6.3	4 兄弟姉妹	2.2	8 その他(具体的に)

0.5 無回答

(5) あなたの保護者の学歴について教えてください。(○を1つつける)

父親:	18.7	1 中学校卒業(高校中退を含む)	16.2	4 短大・大学卒業
	38.0	2 高校卒業	11.2	5 わからない
	4.3	3 専門学校卒業		
				11.6 無回答
母親:	14.9	1 中学校卒業(高校中退を含む)	15.1	4 短大・大学卒業
	48.4	2 高校卒業	7.4	5 わからない
	11.3	3 専門学校卒業		
				2.8 無回答

(6) 最近のあなたの家族は経済的にゆとりがありますか。(○を1つつける)

8.8	1 ゆとりがある
27.4	2 ややゆとりがある
37.8	3 やや苦しい
25.2	4 苦しい

0.9 無回答

問5. あなたの今後の進路についてお聞きします。

(1) 今後、どのような進路を希望されていますか。3年後の自分を想像して1つだけ○をつけてください。

- 6.1 1 高校に再入学したい
- 10.1 2 専門学校に入学したい
- 12.9 3 大学に進学したい
- 9.9 4 アルバイトとして働きたい
- 35.9 5 正社員として働きたい
- 1.0 6 しばらく遊んでいたい
- 2.3 7 進学も仕事もせずに、結婚したい
- 11.5 8 まだどうしていいかわからない
- 9.9 9 その他(具体的に: _____) 0.4 無回答

(2) あなたは、自分の将来について、どのように感じていますか。当てはまる番号1つに○をつけてください。

- 8.4 1 まったく不安はない
 - 21.4 2 あまり不安はない
 - 43.4 3 やや不安がある
 - 26.1 4 たいへん不安だ
- 0.6 無回答

問6. 資格や支離についてお聞きします。

(1) 次の質問項目について、当てはまる番号に○をつけてください。(それぞれ○を1つつける)

	はい	いいえ
(ア) 中退する前は、高卒の資格は必要だと考えましたか。	1 76.8	2 24.1
(イ) 中退した後は、高卒の資格は必要だと考えましたか。	1 78.4	2 21.3
(ウ) 高等学校卒業程度認定試験(高卒認定試験)を知っていますか。	1 61.2	2 35.5
(エ) あなたは高卒の資格を得るために、あま何回必要が知っていますか。	1 37.0	2 62.5

(3) あなたは高校を辞めることについて誰に相談しましたか。(○を1つつける)

- 21.9 1 相談しなかった
 - 77.9 2 相談した
- 0.3 無回答
- 「相談した」場合、どんな人でしたか。(当てはまる番号すべてに○をつける) (n=916人)
- 90.0 1 親
 - 11.0 7 先輩
 - 18.9 2 兄弟姉妹
 - 18.0 8 中流経験のある人
 - 51.3 3 高校の先生
 - 1.5 9 地域若者サポートステーションなど相談施設の職員
 - 6.3 4 小中学校の先生
 - 29.4 5 インターネットで交流のある人
 - 25.0 6 高校以外の友人
 - 7.0 11 その他(具体的に: _____)
- 無回答

(4) 高校を辞めた時点では、その後のことについてどのように考えていましたか。(○を1つつける)

- 23.6 1 別の高校に再入学するつもりだった
 - 4.0 2 専門学校に進学するつもりだった
 - 7.0 3 大学に進学するつもりだった
 - 35.9 4 アルバイトとして働くつもりだった
 - 11.1 5 正社員として働くつもりだった
 - 2.4 6 しばらく遊ぶつもりだった
 - 1.5 7 進学も仕事もせずに、結婚するつもりだった
 - 8.9 8 どうしてもいいかわからなかった
 - 5.4 9 その他(具体的に: _____)
- 0.3 無回答

(5) 高校を辞めた後の進路を決めるときに、苦労してきたことは何ですか。(当てはまる番号すべてに○をつける)

- 12.8 1 別の高校や専門学校などに進学・編入するための必要が利益がない
 - 11.1 2 受け入れてくれそうな学校がわからない
 - 4.8 3 地元に進学・編入先がない
 - 16.4 4 仕事をしていく自信がもてない
 - 18.1 5 地元で仕事がない
 - 8.3 6 仕事を紹介してくれる人がいない
 - 14.1 7 気軽に相談できる相手がない
 - 19.2 8 適切な情報を得る方法がわからない
 - 16.2 9 保護者との間で進路についての意見が合わない
 - 20.4 10 その他(具体的に: _____)
- 10.7 無回答

図7. 社会サービスについてお聞きします。

あなたは、次のことについて、どのくらい知っていますか。(ア)から(カ)それぞれについて、1～4のうち当てはまる番号1つに○をつけてください。

	加えて知っている	加えて知っている	加えて知らない	加えて知らない	加えてない	加えてない
(ア) 雇用保険(失業による生活不安に對して、現金を給付する制度)	1	2	3	4	0.6 無回答	34.0
(イ) 職業に必要な技能を得るときに、職業訓練を受ける方法	5.8	21.3	35.3	34.0	0.6 無回答	37.4
(ウ) 仕事で困ったときに、相談する方法	1	2	3	4	0.9 無回答	30.8
(エ) 生活で困ったときに、相談する方法	1	2	3	4	0.9 無回答	35.1
(オ) 地域若者サポートステーション	8.4	18.1	37.2	35.1	0.9 無回答	69.9
(カ) 専門学校・高校授業料無償などの進学支援制度	1.5	4.1	23.3	69.9	0.7 無回答	20.9

問8. 次のことは、あなたにとって必要でしょうか。(ア)から(キ)それぞれについて、1～4のうち当てはまる番号1つに○をつけてください。

	必ず必要	ある程度必要	あまり必要ではない	必要ではない
(ア) 若い家族で住めるところ(家や下宿のよいところ)	1	2	3	4
(イ) 生活や電気のための経済的補助	29.1	26.1	20.3	23.4
(ウ) 通勤や生活などについて何でも相談できる施設	1	2	3	4
(エ) 通勤や生活などについて何でも相談できる人	31.3	31.8	19.1	16.9
(オ) 仲間と相談、特に活動できる施設	1	2	3	4
(カ) 仲間と相談、特に活動できる施設	18.0	30.5	28.1	22.5
(キ) 読み書きを計算などの基礎的な学習への支援	1	2	3	4
(ク) 読み書きを計算などの基礎的な学習への支援	1	2	3	4
(ケ) 会社などでの職場支援者の確保	33.1	33.5	17.6	14.9
(コ) 会社などでの職場支援者の確保	1	2	3	4
(ク) 会社などでの職場支援者の確保	25.1	30.5	21.9	18.5
(ケ) 会社などでの職場支援者の確保	1	2	3	4
(ク) 会社などでの職場支援者の確保	12.0	21.6	30.8	34.9
(ケ) 会社などでの職場支援者の確保	1	2	3	4
(ク) 会社などでの職場支援者の確保	23.7	32.0	21.0	19.0

(2) 職業に関わる資格(例:自動車整備士・美容師など)で取りたいものはありますか。(○を1つつける)

37.5 1 ある

26.2 2 知らない

35.7 3 まだわからない

問7へ

0.6 無回答

(2)で、「ある」を選んだ方にお聞きします

(3) それは、どのような資格ですか、具体的にお書きください。

(4) その資格をとることができると思いますか。(○を1つつける) (n=442人)

54.8 1 はい(既に取得済み又は取得を含む)

43.0 2 いいえ

問7へ

2.3 無回答

(4)で、「いいえ」を選んだ方にお聞きします (n=200人)

(5) それはなぜですか。(当てはまる番号すべてに○をつける)

47.5 1 お金がない

34.0 2 具体的な取得方法がわからない

59.0 3 基礎学力に自信がない

8.5 4 家族の協力が得られない

15.5 5 その他(具体的に: _____)

5.0 無回答

問13. あなたは、次にあげたことかどのぐらい当てはまりますか。(ア) から (コ) それぞれについて、1～4のうち当てはまる番号1つに○をつけてください。

	とても当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	当てはまらない
(ア) 友だちから誘われて朝日新聞に載ることが多い	1	2	3	4
(イ) 嫌いな人・苦手な人とも、うまくつきあえる	1	2	3	4
(ウ) 自分の考えをはっきり相手に伝えることができる	1	2	3	4
(エ) 仲間から信頼されている	1	2	3	4
(オ) 自分自身は人よりすすんでくれたところがある	1	2	3	4
(カ) うまいいくつかわからないことにも点数的に振り回される	1	2	3	4
(キ) 将来の目標がある	1	2	3	4
(ク) 時間をうまく守ることができる	1	2	3	4
(ケ) 読み書きに苦みする	1	2	3	4
(コ) 挨拶が自分で行ける	1	2	3	4

問14. あなたは、次にあげたことかどのぐらいありますか。(ア) から (ウ) それぞれについて、1～4のうち当てはまる番号1つに○をつけてください。

	よくある	あまりない	あたる	あたらない
(ア) 自分がひとりでぼっちだと感じる	1	2	3	4
(イ) 友だちから仲間はずれにされた	1	2	3	4
(ウ) 我慢できないほど騒がしく	1	2	3	4

私たちは、このアンケートだけではうかがえない詳しいお話を、了解いただいた方々へ直接お話ししてうかがいたいと思っています。この後の面接調査にも協力いただけるでしょうか。(○を1つつける)

- * 「協力できる」に○をしていた方は委員にお話をうかがうわけはありません。
- * お話をお聞きする場合には、こちらから事前に連絡します。
- * 調査に協力いただいた方には、謝礼をお支払いします。

44.2 1 協力できる 53.9 2 協力できない 2.0 無回答

これでアンケートは終わりです。ご協力、ありがとうございました。

問9. 高校中退を経験した先輩の話を聴く機会があれば参加しますが。(○を1つつける)

13.9 1 はい 0.3 無回答
54.9 2 いいえ
30.8 3 どちらともいえない

問10. あなたには保護者以外に親しく話しかけられる大人がいますか、その人はどのような人ですか。当てはまる番号すべてに○をつけてください。また、1～10以外にもあれば、11に自由に書いてください。

23.5 1 保護者以外の家族 26.6 7 以前の学校(小・中・高)の先生
23.8 2 親戚 9.2 8 今の学校の先生
2.7 3 習いごとの先生 15.1 9 友だちの保護者
36.1 4 アルバイト・仕事先の上司・先輩 9.2 10 近所の知人
3.8 5 塾や予備校の先生 11.2 11 その他(具体的に:)
0.4 6 家庭教師 19.1 12 いない

1.3 無回答

問11. あなたには、親しい友だちがどれくらいいますか。(ア)～(カ) それぞれについて、当てはまる番号1つに○をつけてください。

	たくさんいる	多い	少ない	ほとんどいない			
(ア) 離れた学校内に	10.7	30.7	21.3	9.0	3.1	22.0	
(イ) 小・中学校からの	1	2	3	4	5	6	
(ウ) 休や編校に	0	79.3	24.0	20.8	11.8	8.1	29.1
(エ) アルバイト先には	1	2	3	4	5	6	
(オ) インターネットや携帯サイトには	19.5	12.1	6.0	2.9	2.0	12.2	
(カ) アパート外で	1	2	3	4	5	6	

問12. あなたは高校を辞めたことを後悔していますか。(○を1つつける)

23.7 1 はい
46.9 2 いいえ
28.7 3 どちらともいえない 0.6 無回答